

仁和寺旧蔵心經にんなじ 俯勢仰勢の自在すいろ 垂露りゅうろう 龍爪の巧みを
尽くせど廢墟しむな 摩訶般若波羅蜜多心經まかはんにやほらみったしんぎよう 釈迦牟尼しやかむにたお 斃れ
五百年後製なれば 似非にて ここに在りしは古紙乾墨のちみつくり

龍 りよ

肯 う

古瓦を襲う傾盆の雨が耳を聳す。雨は傲然たる態度で降りしきる。代々の家々の甍が蕭然と烟っていた。十月終わりの某日、午後三時半、僕は瞬まさに、ここにいる。竹林の擾乱、道祖神の毀たれたる石像。

傘などないも同然であつた。頬を痛いくらいに撃ち、毛細血管を収縮させる。唇へ挿る滴。顎から次々落下する。靴は濡れ、歩く度に鳴った。見れば、合皮革靴は濃く染み、型崩れしている。

爆竹のような路面、遠く山景は寂寥を鼓し、田畑の向こうには雑木の丘を背負った人家。戸姑郡噫曾良村は、真言宗室生寺派の波羅噫曾良寺を由緒とする。古参道へと聯なる竜垂涎通りをゆけば、書肆、料紙卷子本舗、文房具清蘭洞、骨董などの老舗の囲む四つ辻へと出る。村唯一の信号機があつた。僕は附近で気が附く。

傘も差さず、独り立つていた彼女。交換留学生の彼女は米国籍で、ギリシア系の父とスペイン系の母とを持つ。痩せて長身のイキリアが烈雨にイむ姿は尖つたモニュメントであつた。

走り寄つた。

傍まで行つたが彼女は振り向かない。

「イキリアっ！　いつたい、どうしたの、傘は？」
向く。

制服下のブラウスまで浸し、十四歳の皮膚を透かせ貼り附いている。

「風邪引くじゃないか」

黙つて僕を見つめるだけ。

下瞼が堰のように涙を溢れさせている。その揺らめきが燦めきを以て移ろう双眸には、凜とした毅然があり、僕をたじろがせた。

眼の碧さは虹彩と云う、瞳孔を調整する筋肉の一種に因るものだ。虹彩の色素が少ないと、青い光線が吸われないまま亂反射し、為に生じる。

イキリアの虹彩の亂反射が捉えられないほど眩いのは、虹彩を蔽う角膜と、角膜と虹彩との間にある前眼房を満たす眼房水とが、尋常ならざる透明の晰らかさを持つことに因る。喩えとするならば、湖面から水深一〇〇mの底にある砂粒の、ひとつひとつが表面の凹凸の一二を、精緻な解析度で明晰できる透明度。

移ろいつつ煥り為す青碧、または蒼燐が紺碧に燦々炯めく。ときに碧蒼なる燠火の如、炮烙し、奥になるにつれ炳焉かとなつて、その奥にも燠せる青蒼を赫変たる太陽の燦らかさで燦かせる。

以来、彼女は僕の最も強烈な実存となつたのだ。

なぜイキリアが傘も差さず涙していたのか解らず終いだつた。尋ねられそうな状況でもなかつたし、実際、尋ねようかどうか逡巡する間さえ与えてくれずに彼女が立ち去つてしまつたからだ。

思いは様々に巡る。僕は涙の理由に固執していた。恋慕の情を嗅ぎ取つたからである。つまり、彼女が誰かに恋し、思慕のために泣いていたのだと考えたのだ。嫉妬であつた。

その翌朝、僕は教室にいた。

級友らもまだ疎らな時刻で、イキリアは来ていない。

眠れずに登校した僕が思い浮かべるのは、ただ彼女の双眸ばかりであった。瞳の綾の千変万化の大海原はあらゆる浪漫を孕んでいて、僕を余情させる。だからイキリアの瞳だけを心に観ながら同時に凡てを夢想していることになるのだ。

例えば、草々靡く丘のうえ、濃い黄昏に燻られ、言いたげなまま静止している中世の廃塔。上層部は斜めに崩れ、未だ見上げられるだけの高さを維持しつつも、屋根も何も落ちて、墟しく尖端の缺けた円錐でしかない。崩壊した上層部へ、巨大な巻上機でも使ったのであろうか、近代的な二門の機甲列砲が、柔らかい暈しのような黒で滑らかな流線を持ち、異様に置かれていた。濃厚な黄燦の雲が翳りを帯びて、仰ぎ見る背景を行く。バイオリンの亀裂のような静寂が響る。

僕が斯くも憂鬱な瞑想に耽り続けているとき、イキリアは教室に入ってきた。

「おはよう」

皆に手を振って挨拶する彼女。歩く軌跡がパッヘルベルのカノンだ。バロック的な華やかさと哀しさ、微風のある初夏の朝の空気だ。

昨日の涙のかけらも残っていないかのようなイキリアの笑いがささめく。

一度だけ、微笑を込めて彼女が僕に視線を投じた。何か意味を含むような気もしたが、なかったかもしれない。僕は目を伏せたから解らない。

時を告げる鐘音が鳴響する。

始業のチャイムだ。級友らは席に着き始める。

あらかた級友らが着坐し、床を椅子の脚が引摺る音が止み出して、第二校時目の教師を迎えようとする頃、一人入って来た。教室前方の扉から、77年ジョニー・ロットン風のスパイキー・ヘアに最近髪型を変えたばかりの叭羅蜜多ばらみたが、誰の顔も見ずに教壇まえを横切り、後方の坐席へ坐った。彼は波羅噫曾良寺の住職の倅だ。坐ると四つに折った新聞をズボンのポケットから取り出し、眺め出す。

彼の入室直後、数学の石川広秀教諭二十九歳が引戸を開けた。

石川教諭は壇上に立つと、叭羅蜜多を一瞥し、咳払いして授業を開始した。叭羅蜜多は怪訝な表情で教諭を見上げ、机に入れた放しの教科書を出す。窓側最後方に棲息する僕には状況がチェスを俯瞰するように眺めることができ、刹那の愉快を嘗った。

石川教諭が立方体の図形を黒板に書いた。説明を始めた。

叭羅蜜多の奴が手を挙げた。石川教諭は顔を顰めたが、言った。

「何だ、舎家」

舎家 叭羅蜜多。それが彼の名だ。因みに僕は鱗 龍背。もう一人珍名で、靈廟 氷裂と云う奴がいる。もともとの村出身者には異形名が多いのだ。噫曾良村は古代大和朝廷に叛逆した蝦夷で、七世紀頃までは独立国家だったなどと主張する村粋主義者もいるくらいであった。

「先生、ユークリッド幾何学は、数多ある仮説的推論群の一体系にすぎない。先生の今の言い方は、まるで絶対的な唯一の公理みたいだ」

クラス中がうんざりとした表情になるのが分かる。僕も思わず左の額に手を当てた。

教諭は咳払いをした。

「舍家、おまえの言うことは分かるがな、今いきなり数学論全体を展開しても、まだ皆解らないだろう。取り敢えず感覚に馴染みがあるところから始める、これが方便と云うものだろう」

叭羅蜜多ばらみたは有利な回答へと誘引しようとする交渉者の口調で応えた。

「ならば、一言それについて触れる必要がないでしょうか。もし俺が中卒で終わったら、一切知らないままで終わってしまう」

「分かった。いいから坐れ」

「そのうえで、先生が敢えてユークリッド幾何学に偏重すると言うなら、それはそれで教師の道じゃないですか。俺らは俺らでそのスタンスで拝聴すればいいわけだ」

「うるさい！ いいから坐れ！」

叭羅蜜多ばらみたは平然と坐った。僕は苦笑した。

教室に静寂が戻ると、僕は再び中央最前列いる彼女の、ミネルヴァとマルスの描かれた新品のローマ金貨のような眩しさの髪を眺めていた。

いくら眺めても飽きない。堪え難いから。捉えられないものへの執著は尽きることがない。逆に捉え終わってしまうえば人間の興味は転化するのだろう。安易に捉え終わらないのは生存の絡繰りなのだろう。魂を飢えさせ、生存へ執著させ続ける為なのだろう。なぜか解らない。その絡繰りから逃れる術もない。

イキリアを誰の手に渡すことも堪えられない。

けれども、事態は予断を許さないのであった。

イキリアが来日したのは今年八月で、九月の二学期から通い始めている。

誰もが外人に近附きたがり世話焼こうとしながらも、恋愛対象としては見られない、と思われて三日もせぬうち、最初にモーションをかけたのは参廊さくらうだった。

冗談を言ったり、からかったり、いい加減な英語を自分で言っ自分笑って、ともかく構いまくるのが彼の常套手段だった。僕らから見ると馬鹿らしい限りなのだが、こう云う積極性が意外と女子に受けるから、女って不思議だ。まあ、女の子の方も男が可愛いぶった頭悪そうな子に騒ぐのを同じような目で見てるのだろうけれど。

イキリアに恋してから、僕にとっての参廊さくらうは参廊ではなく、ただ平坦な、妬みの対象でしかなくなった。もし今、彼が怪我か病気をしても、ほくそ笑むだけで同情できないだろう。

特に僕の性分からすれば、参廊さくらうみたいなタイプには一番イキリアに触れて欲しくない。軽佻浮薄で真実なんて一片もないように見えるからだ。

だからと言って、真面目で人一倍心を配り思い遣りのある彝齋肯いさうが、誰もいない教室でイキリアの鞆にこっそり手紙を差し込んだりするのを、叭羅蜜多ばらみたと偶然目撃したときは、何か心を傷つけられたような感じがしなかったわけでもない。

彝齋肯いさうの行為も彼女が来てから三週間と経たないうちだった。

叭羅蜜多ばらみたは面白そうだったが、僕は理由もなくショックだったのだ。思えばあの頃から彼女を意識していたようだ。

今月に入ってから次々と、爽烈そうれが雑誌を持って来て新作映画紹介欄を指し示し映画に誘ったり、普齊ふせうがやたらいろいろ教えたがって講釈かましたりたり、炎がイキリアのいるときには無闇にオーバークションだったり、もの静かで瞑想的な舍却しやきやまでも甚深な憂

いの眼差しを遣るようになって、約二か月遅れで第七番目の男（知る限りだが）として勃発した僕も含め、教室は亂世の如き様相を呈していた。

当然女子の反発も僻みも批判も嘲笑もある。由伽は反発派で、燎々が僻派、樂夏が批判派で、憂貴が嘲笑派と云った感じか。余り違いもないが。

ともかくも僕はイキリアの涙の理由を考えていた。三校時が終わっても席を立たず固まっていた。四校時が終わって食事を済ませ、昼休みが終わろうとしてもなお考え続けた。

僕の第一の直感は恋に敗れてと云うものだったが、考えてみればこの日本で実った恋があったとは思えない。ライバルは誰も同じラインにいるように見える。

恋人に不幸があつて、と云う線もなしか・・・

だが、あれは哀しみの涙だった筈だ。恋愛絡みではないと云うことか・・・しかし、いたい、何が。家族の不幸なら何らかの情報がある筈だし・・・

ちよつと、待つて。何も日本での恋愛に限定する必要はない。そうか、本国に恋人がいて・・・その方がよっぽど自然だ。ここ日本で恋の哀しみと云う段階へ行くような経過があったとは到底思えないし。

そうか・・・

だが、そうなると問題は解決不可能なように思えた。そもそも僕らは埒外なのだ。

頭を挙げた。

「叭羅蜜多？」

僕は唐突に叭羅蜜多が気になって辺りを見回した。なぜ気になったのか。明白だ。いつも休憩時間に僕に声を掛けてくるのに今日は全然来ない。胸騒ぎがした。教室を出た。

校舎内がまるで迷宮みたいで、床も壁も脈打って波立ち歪むような錯覚を覚えた。すれ違ふ誰をも顧みずに走った。

動悸が制御できない。手足の力が抜けて頼える。

こんなにも動揺する必要があるのか。だが、心臓は自分の意志ではない。どうやって変えろと言つのか。

そんな思いも上滑るだけ。意識がVideoのように勝手に回転しはじめる。

そうら、オペラ・ガルニエ・・・バルコニーからエントランス及び壮麗な大理石の階段を見下ろす・・・ウガンダの少年兵たち・・・指揮官は敵がいると判明すると、さらつてきた子どもの兵士らを一列に並べて尖頭を進ませる・・・こんなことが許されて良いのか、命令者は永劫地獄に堕ちて二度と救われることはない・・・記憶が混乱していた。今の勝手に浮かび上がってきた意識は何だったのか。止まらない。意識は、けして自分のものではないのだ。

一九九七年四月十六日、チャイブ・モハメッドの村の外で武装イスラム集団によって凌辱され喉をかき切られた少女らの遺体が見つかる・・・一九九五年七月、スレブレニツアで起こったセルビア軍による非武装ムスリム男性の大虐殺・・・イスラエルに後押しされたキリスト教民兵によるパレスチナ難民の大量虐殺・・・

気が附くと、僕は講堂の裏にいた。

大きな樫の木の下に立つ叭羅蜜多とイキリアとを、既に見ていた。まるで望んでいたかのように、予感的中してしまったのだ。

怒るべきことではない。哀しむべきことでも。

だが、心は僕を嘔み乾した。怒りと嫉妬とに裂かれた。心を乖離することはできない。裏切られたように思うのは余りにも叭羅蜜多に対して理不尽であろう。彼は僕の気持ちすら知らないのだ。だが、心の怒濤を抑えても、それは抑圧され潜伏し歪んでより醜怪な怨霊物化に姿するだけにすぎない……

叭羅蜜多は何か言っているようだった。イキリアはじつと叭羅蜜多を見つけていたが、時々俯いた。

あたかも叭羅蜜多に欺かれたかのような逆上、それが違つといくら判つていても、僕を撃ち抜いてしまっているのだ。拭えなかった。人間には自由などない。

イキリアが横に首を振って、叭羅蜜多から去った。叭羅蜜多は寂しさを隠せない微笑で手を軽く振っただけだった。

何も起こらなかったのだ。彼もまた他の男らと同じ一人にすぎなかった。だが、僕の衝撃は消えなかった。二度と元には戻れなかった。

僕も静かにその場を去った。

仰げば秋晴れの蒼穹。太陽の眩さが揺らぐ。

教室へ帰りながら、さつき観た幻影がなぜ湧き起こったのか、考え込んでしまった。不可解としか言いようがない。

太陽の眩さとともに、現実までもが揺らぐ。

放課後になった。

陽射しは色を帯び、黄昏を孕む。

僕は気怠い教室のさなか、^{いれつ}裂を誘って帰ろうとした。いつもは叭羅蜜多となのだが、今日はその気になれなかった。^{いれつ}裂も剣道部がないから好都合だった。期末テスト一週間まえの部活動は停止になる。クラスの全員が一斉に帰る光景はこう云うときにしか見られない。

「あれ、叭羅蜜多がいねえ。トイレか」^{いれつ}裂が言つて見回す。

「そのうち来るさ、ぼちぼち行つてよう」僕は応えた。

そう言いながら、脇目にイキリアが教室前方から出て行くのを確認する。由伽と憂貴と一緒にいる。併せて晰らかに意図的に、参廊が舍却を伴つて後方扉から出ようとしている。穏健で

人柄の善良な舍却を傍らに采配し、自らを引き立てようとする策か。

「さあ、行こうよ」僕は^{いれつ}裂を促した。

東昇降口へ降りて靴に履き替え、ブロックで仕切られた手製の花壇が続く区域に出た。軟らかそうな土に花草は見えなかった。

敷地内の舗装路はグランドの縁を巡るように敷かれ、グランドの向こう側にある正門へと続く。僕はまず校舎と平行し西昇降口方向へ歩くこととなる。

まえを参廊と舍却、二人の肩の間からイキリア、由伽、憂貴らが喋りながら行くのが見えた。

「よお、龍背！」いきなり背中を叩かれ驚いたが、叭羅蜜多だった。追いつかれたのだ。少々ばつが悪かった。それほど意図して置いてけぼりを食わせたつもりはない。だったと思つてみるも目を合わせられない。視線を避ける。

「遅えぜ、叭羅蜜多」と^{いれつ}裂が言う。

何も知らぬ叭羅蜜多は僕の態度も一向気にせず、「ああ、遅くなった、便所だったんだ」と応えた。「糞かよ！」^{いれつ}裂が顔を顰める。

叭羅蜜多の視線は既に参廊にいつていた。

参廊はわざとイキリアに聞こえるように大声で舍却相手に騒いでいる。由伽と憂貴とが時々振り向いて笑った。イキリアもだ。叭羅蜜多の眉目が曇ったような気がした。僕の胸に入り交じる想いが滲む。

ふと後を振り向くと、犢齋肯が歩いていった。

僕の隣で^{いれつ}裂はいつの間にか黙っている。柄に似合わず、意外こう云うときの雰囲気を察する奴なのだ。

西昇降口のまえで折れて、講堂に沿って進み始めると、普齊が出て来てイキリアのグルーブに話しかけ一緒に歩く。蘊蓄を傾けているらしい。

参廊が今度は声を上げて、普齊に向かって言い始める。

講堂が尽きたところでまた東に向かって折れ、塀に沿って繁茂する高木を右手に見ながら正門へと進む。

「勉強してるかい？」後ろから不自然に会話を差し込んで来たのは、僕らに追いついていた犢齋肯だった。話しかけてきながら彼の目は不自然に僕らを越えて前方を凝視している。誰もが細胞の有機的全体が構築する構造によって生じ、未来へ向かって状況を変えようと活動する実存であった。

正門に來ると、爽烈が待っていて、憂貴や由伽を無視し、堂々とイキリアと一緒に帰ろうと申し出た。「ちよつと、待ったあ」冗談を装いつつ参廊が本気で走り寄って、和氣藹々の乱戦の模様を呈し始める。舍却是放られ状態になってしまった。

門を出て西に向かい、田圃の角の小さい杜を南へ曲がって竜涎川方面へ行く。

左右が刈り終えた水田で開けた道を進みつ、土手を上る道になると竜涎橋だった。

橋の中央で、欄干に背を寄り掛かせている炎と橋の真中に立つ樂夏・燎々々が向き合い諍っている。

同じ状況を僕はどこかで観た記憶があった。いや、違っていたかもしれない。

思い出せなかった。

炎はイキリアに気が附くと、樂夏も燎々も初めからいなかったかのように無視し、満面笑みを浮かべる。

「イキリア！」炎が言った。

僕には奇態で矯激な彼の次の行動が見えた。

「あいつ、いったい、何をする気だ」^{いれつ}裂が素っ頓狂な声を上げる。

叭羅蜜多が「あつ」と小さく叫ぶ。

皆が呆気にとられる中、炎が欄干の上に立ったのだ。

ポーズを取る炎。

二年B組！ 由良 炎は！ イキリアのことが！」飛び込みの姿勢。

跳ね上がる。落下した。放物線を描くその空中で、「好きだあああああ！」と絶叫する。それがコマ送りのように見えた。女子の悲鳴。大きな水飛沫が挙がる。

誰もが衝突するように欄干へ走って、身を延ばし覗く。

暫時、川の流れがあるのみだった。

「ふうふあーっ！」

河童のように炎が顔を出す。

「馬鹿野郎ッ、炎！ 大丈夫か！」誰かが叫ぶ。

炎が手を振った。

大袈裟なクロールで泳ぎ、岸に上がると犬のように体を振って、くしゃみ。

一同抱腹絶倒。

安堵と滑稽さから込み上げる笑いだ。さつきまでの緊迫もどこへやら、皆、肩や背を叩き合い、振れるように大笑いしている。

笑って笑って退け反ったときに、僕は見た。東の地平から西の地平線まで、平衡感覚を失わせるほどぐりと巡る半球型の、穹。ここに在る僕ら。広がる田圃。伸びる田舎道。竜涎川。遠き山々。

忽然、僕の脳裏を細密なコンピュータのマトリックスのように物語が紡ぎ綴られ、表象した。

『世界は一つの海によって南北へ裂かれていた。その海を裂南北大陸海と云った。』

南北それぞれの大陸には、超弩級の大国が一つずつある。

南の篡奪者をマール帝国、北の覇者を神聖シルヴィエ帝国と云った。大陸には他にも中小規模の国家が南北合わせて計百八十一国あった。

北大陸南部地域の中規模国ユヴィンゴ連邦バリヴォ自治州に於いて齊曆二七二七年十月二十七日、第二次革命が勃発した。

シルヴィエの傀儡であった連邦政府が民衆によって打倒され、高らかな人間現実存在宣言とともに革命政府が誕生したが、三か月後、シルヴィエ帝国七十万の陸軍南部作戦軍機装甲軍集団によって再び壊滅させられた。

革命はパンを求める女子紡織工八十二名のストライキから始まっている。

集会活動が行われ、やがてデモ行進となり、同調する街の婦人らが次々参集、一部地域の男子労働者が決起すると飛び火し、州都モスコールの全民衆による一斉蜂起となったのである。

当初、状況を甘く見ていた自治州政府は午後になると自治州軍に対して州都防衛委員会指令を発動し、非常緊急対応として非武装人民への発砲も止むなしとしたが、軍部は自治州警察と民衆との小競り合いを傍観するのみで、敢えて動かない。

警察が発砲すると民衆は逃げ惑った。

これに憤った一部の下級兵士らが蜂起。民衆側に附く。だが、状況はいまだ苦しかった。この形勢を逆転させたものは、何とシルヴィエ監督府からの蜂起であった。

実はこの日、シルヴィエ帝国大枢機卿の長子レオンが帝都の権力抗争を避けて、モスコールに亡命して来た日であったのだ。これに内通していた監督府の将校がクーデターを起こし、監督府を制圧。同時にモスコールの革命に加わったのである。

革命は一気呵成に遂げられるかに見えた。

だが、ユヴィンゴ連邦駐留のシルヴィエ帝国機械化装甲師団が州都に接近中との情報が入る。パニックになった一部民衆の間では、異民族異宗教徒間で虐殺行為が行われた。

だが、軍部にカリスマ的影響力を持つレオンが、レストフ將軍率いる師団を調伏、逆に味方としてしまう。

斯くして革命は一日にして成就された。

革命会議が招集され、様々な活動が為される。全ては順調に見えた。

だが、次第に革命会議は権力抗争の場となり、恐怖政治化して民衆の支持を失う。弱体化するうちに、終にはシルヴィエ帝国から大軍が怒濤し、民衆の夢は儚く終わった』

帰宅すると、僕は書肆^{いばん}葦盤堂^{いばん}に行った。昨日この交差点で、イキリアと会ったのだ。

瓦の軒を突き出して、木造の本屋は、元禄時代の呉服屋のミニチュア版のようでない。棚に並ぶ書籍は天井まで段を重ね、台の上に詰まれた文書の中には和綴の本だの、漢籍書だの、奥にはガラス棚があつて、解体新書などが置いてある。

店主は丸眼鏡をかけて坐っていた。ルーペ片手に古書の活字を調べているようだった。少し頁をめくると、メモを取るのだ。

「おじさん、十月新刊の・・・」

「ファルコのかい？」

「どうして分かったの？」

「いや、何となく。ほれ、あそこに置いてある」

僕はそのハードカバーを手にした。白い装丁に浮彫^{レリーフ}風のスク립ト体のタイトル文字、帯はパウダー状のクリムゾン・レッド地に金の細い活字。値段は・・・やっぱ結構

高いな。

「ねえ、ファルコ。貴方は聞いたの、あの話」

アイリツシュが髪を傾けて尋ねた。ソファに脚を組んで深々と坐っているストレートの黒髪は床に着きそうだった。

「何を言おうとしているか分かるさ。私の最新作『ラグナレク・ノアイユ伯爵』にまつわる奇怪極まりない噂だ」

南米の新進流行作家ファルコは坐り直すと、両掌を外縛に組んでアンラージュの女性編集担当者の眼を見据えた。山賊のような顎鬚が胸まである。

「でも、目撃者の一人は私の知り合いで、絶対信頼できるわ」

褐色の膚を持つインド系イギリス人であるアイリツシュは、髪を振ってからまっすぐに見つめ返した。ファルコは大袈裟に両手を広げて天を仰ぐ。

「馬鹿馬鹿しい！ 目撃しただと！ 正気なのか？ 小説中の人物だぞ」

「でも、モデルはいないの？」

「君は何年私を担当しているのかね。いないのは、知っている筈だ」

「でも、本当にそっくりで、思い描いていた通りの人物が現れて、……その薄青の瞳は本物でしかあり得ない光だと言っていたわ。

ねえ、そう云うニュアンスって解るでしょう、ファルコ」

作家は肩を竦めた。

「確かに私は小説に描写された世界も、現実なのだと言ったことがある。だが、それとこれとは違うレベルの話だ。

私は逆に現実もバーチャル・リアリティであると言った筈だ。心にすぎないとね。現に東洋の禅宗では、心とは現実を指して言う術語だ。

ラグナレクの真似事なんて誰にでもできるじゃないか。腰まで覆う長く冷たい白金の髪、遠くを観るような薄青の双眸、凍てた白皙の皮膚、端整で伶俐な顔立ち……

どうかね、恐らく白い長衣を引きずってさえいれば、それらしく見える筈だ」

「あなたが全く毛色の違う作品をいきなり発表するから、こっちも何か魔術めいたものがあるように思えちゃうのよね」

「確かに自分でも不思議に思うさ。啓示を受けたと言うか、神的な何かにインスパイアされた、今までとは明らかに違う、そんな感じはあるがね」

『・・・ラグナレクは齊^{せい}歴^{れき}二七〇六年十一月、ユヴィンゴ連邦国境に近い辺土トラヴ
アニシチリアで生まれた。かの有名な湖上城に住むのは十数年後のことである。
出生にまつわる夢魔の逸話がある。

父伯爵ヴィクトール老は四十七歳年下の妻の声で目を醒ました。午前二時であったと
言つ。妻ヘレネスのうえに覆い被さっている毛むくじやらで真つ黒な獣の姿に彼は驚愕し
た。あるうことか抑えられているヘレネスは開脚し、身も世もなくよがっていた。

ヴィクトールは壁に掛けられていた先祖伝来の剣をつかむと挙げる。

嘲るかのよう夢^{インキュバス} 魔は嗤^{わら}笑し、抜いた瞬間、体液がヴィクトールの頬へ飛んだ。

振りかぶるも虚しく夢魔は笑いだけ残し消えた・・・』

『あのよがりの表情が臉を離れなかった。彼には見せたことのない若々しい表情、まる
で苦悶から免れようとするかのように振れながら、悦び吸い附くようにしがみつき、感窮
まったように繊細に顫え、羞恥と解放とが併せられた初々しさと啜り泣きとで、捉えられ
ようもない、はち切れんばかりの実存を湛え・・・裏切られた気持ちだった。老いの悲し
みもないまぜだった。

妻は毎日泣いていた。彼女には 実 存^{じきぐん} を説明する叡智がなかったのだ。だが、
悲劇はこれで終わらなかった。医師はヘレネスの懷妊を告げた』

『その日は来たのだ。今まさに産声が聞こえようとしていた。

蝋燭の灯に照らされた書斎、桤木材に神像や妖精の彫刻が為され、暗鬱さを醸す。老伯
爵は独り椅子に身を屈めて、神の罰に怯える者のよう両手に頭を抱え、固まり続けていた。
置時計の音だけが響く。

壁には、かつて先祖がポメニの戦役で歿した際に振るつた古剣が飾り懸けてあった。そ
れが視線を捉えたとき、彼は何かに触れられたように顫えた。

深夜の闇を産声が裂く。生まれた。それは臨終の時を告げる鐘の音のように、ヴィクト
ールの心臓を貫いた。

壁に向かった。剣を奪取する。妻の寝室のある方向を、詰と睨んだ。・・・』

(ファルコ・A・オステロ著『ラグナレク・ノアイユ伯爵』より抜粋)

私たちの群れが行列して進む。

幻影だろうか。

女子工員が尖頭で、エプロン姿の主婦らが続くのだ。手当たり次第のものを武器にして氣勢を挙げている。例えば、大鎌や斧やスコップ、鍋蓋やら何だか判らない木の棒やら大きな篋^{くわ}等々だ。

旧市街の石畳は埋め尽くされようとしていた。

幻影は傾いて観えている。晴れて明晰なのに、まるで雲が幾つも通り過ぎるように、明暗の濃淡が過ぎる。フィルムが時々切れるのか、画面は瞬きのように刹那の途切れを繰り返す。音は何も聞こえなかった。

遡ること十二年まえ、貴族たちの途方もない性的淫蕩と紊亂との時代に端を発していた。ジャンヌ・デティオル侯爵夫人は国王ルヴィニコフ・ド・ユヴィンゴの愛人で、寵愛を一身に受けて親族を重職へ登用し、権勢を振るった。

夫のなりふり構わぬ行為に絶望した王妃マリア・アントニアは度外れた享樂や遊戯、贅沢に耽った。また賭事に熱中し、巨額の借金を作ったが、それは国庫を費やして支払われた。

王妃の金銀製の精緻な装飾彫刻を施した小さな飴入れ一つで恐らく何千人もの民衆が飢餓から救われたであろう。また彼女の崇拜者、取り巻きであるポリネアック公爵夫人は王妃の愛護を利用して好き放題に国庫の金を浪費し、国政に介入したのである。

国民は飢えた。

斯くして齊曆二七二五年二月二十三日、第一次革命は起こったが、隣邦の大国、神聖シルヴィエ帝国が数千台の自走式機装甲戦車部隊を率いて軍事介入、革命を鎮圧し、同時に民意反映の大義を以て王権神授説を否認のうえ、王と云う位を残しながらも（王族貴族階級の反乱を抑制する為である）王政を廃し、実質的に帝国の主導する国民会議を開催、同会議選出による政府を樹立し、ユヴィンゴを帝国陸軍監督下の連邦国家とした。

だが、連邦国家政府には、搾取と権力抗争、汚職と無責任とが蔓延し、腐敗を極めた。

画面は逆さだった。陽光が強い。暗色の濃い白黒の画面で、鉄鎚を挙げて振るう鉄工労働者の群れが・・・それは収斂し、龍背^{りよう}の臉の裏となった・・・□

モスコクールを降りると革命だった。

北大陸最南端の邦、ロレアル・アングルジョから北上、最新の蒸気機関を積んだアングルジョ・ヴィコ・エクスプレスで、ユヴィンゴ連邦バリヴオ自治州都の東駅に着いた、その日だ。

ここへ至るまでの何と贅沢であったことか。奢侈の極み、王侯貴族に交わって荘厳なるリルイ社製の寝台車に乗り込み、フローレンス地方から取り寄せた最高の食前酒を日々嘗めた。

昨日晚餐の豪勢なことといったら。ラス湾で採れたばかりのオマール海老、紫の斑点ある濃紺の甲殻の、その乳白色の身を噛むと、あふれる汁の香ばしさと旨味とで口の中を占拠する。

施設設備も列車の中とは信じられぬ等級の豪奢、自らが古代暴虐傾国の皇帝であるかの攪乱すら覚える。

浴室は各個室に附いている。しかもその規模が凄い。浴槽からこぼれる湯に満ちた床へ一歩足を踏み入れた途端、目にも縊なる縞目模様の色大理石、彫り込まれたアルテミス女神、翼ある愛の神エロス、七弦琴、太陽神アポロン、馬の耳と尾とを持つ半獣神シレノス、酒神讃歌、狂躁乱舞の狂熱的女、実の母親や姉妹に八つ裂かれるテーバイの王ペンテウスの悲劇・・・雲霞の如き撩亂状態だ。巧みに併設配置された発汗室、微温室、納涼室、塗香室。専属のエステシャンまでいる。

部屋の天井を見上げれば、マニエリスム画家による聖人昇天の動的な大天空図、の緻密なレプリカがある。金銀象牙の精巧、壁へ目を遣ると、嵌木細工の絢爛、燃える真紅のタペストリー、ロココ調の家具類・・・

まどろみへ滑り込ませる乗り心地は微動すらさせぬ超絶のサスペンションに支えられ、ふと置時計の秒を刻む音が聴こえることに気が附く。

斯くも贅を極めた旅路はよもや二度とはあるまい。

エル・バツハロ・デル・マル

しかし、断じて身分不相応ではない。父が故郷 海 島 島を裏切つて敵国ユヴ

イングの密偵となり、数年で秘密警察庁長官補佐まで登りつめて、爵位を褒授している。

僕は真正正銘の貴族なのだ。

エル・バツハロ・デル・マル

ただ、海 島 島からユヴィンゴ王国の南海作戦軍が撤退してしまつたせい、元の領主パスタリヤ家が復活し、僕らの家の没落が始まつてしまつただけのことだ。

そう、島を侵略したユヴィンゴは肝心の本国が紛争で困蹙状態となり、さらにはそこへ附け込んだ隣邦の超大国、神聖シルヴィエ帝国が平和維持を大義名分として軍事介入したため、ユヴィンゴの南海作戦軍は呼び戻され、裂南北大陸海への侵攻は第一歩で頓挫してしまつたのである。十二年まえのことだ。

スール

グランデ

だが、パスタリヤにしても、元来は南大陸のパーリ人（僕もパーリ人だが）の豪族であつて、島を占領統治していることには変わらない。本当に不幸なのは僕らより原住民だろ。

父は処刑（と言うよりは私刑）され、母は発狂し、その翌年故人となつた。姉は南大陸系の一大宗派である羅教の原理主義過激派に輪姦され喉を裂かれ、骸とされた。去年のこ

スール

とだ。妹は先月だった。

僕が紛々たる豪奢に身を任せようと、不思議はない。

だが、それも終わった。

1 kmにも及び長大な車輛の繋がりが見えなくなり、到着したとき、朝靄の駅を窓から眺める僕は、湯上がりがどきに合わせて塗香室に待たせてあった香油師のマッサージを終え、ゆつくり髭を剃っている最中だった。

無論、顔の半分は絹布で蔽ってあるから、剃るのも半分だ。

顎に竜涎香で燻じられたクリームを入念に塗る。床暖房は香木を焚くことで為され、嗅香師によって熟慮された匂いが遁走曲を奏でている。

龍肯、君はここで降りなければならぬ。

刺繍を施した、艶やかなカシミア地のスーツに袖を通し、仰々しいプラチナ・レースの附いたカフスを留める。大振りなタイは緩めに結ぶのが伊達だ。

「頼むよ」 ポーターに革鞆を持たせ、ガラス張りのドーム型天井に覆われたプラット・ホームへ颯爽と下り立つ。

駅員らの目が忙しく動いていた。

早朝の寒気がマフラーを通して首筋を襲う。時折り蒸気の噴声が車輪の間から響くだけの静寂。晴れているらしい。今日、ここら辺りで乗り降りする上流階級の者は少ない。

複雑な流れを造る広大な噴水や天窓や列柱廊、四十七人の聖人が並ぶ欄干、壁を劇的に躍動する群像彫刻、それらに満ち溢れた駅構内を抜ける。外へ出た。

駅まえには幾十もの馬車が寄せられるロータリーがある。閑散としていた。ロータリー中央のオベリスクが虚しく蒼穹を目掛けて聳えている。

顧みれば、東駅はマンサード屋根を持った第二帝政様式。

僕はここまで荷物を運んでくれたポーターへ言った。

「その荷物は君にくれてやる」

「へ？ 何と仰言いましたか」

面倒臭いのでそのまま歩き出した。「ちよつと、御待ちを！」と言う声を後にして。

歩きながら、ネクタイをでたために緩めた。善良なポーターはまだ追ってくる。仕方ないか・・・

僕は、顔の覆布を剥いだ。そして、振り向いた。ポーターは追うのを止めた。呆然とした表情で、しゃがみ込んでしまったのだ。

僕の顔の左半分には青龍の刺青がある。

いや、正確に言えば、喉仏左側から左の後頭部までだ。鯨のように逆立った龍の図で、爛々たる眼、赫奕たる口を喉元に裂き、鬣が僕の喉辺りに靡かせられ、左顎に前脚、左頬に胴身を長々し延べ、脛を跨いで眉を越え、額左面に彫られた後脚の爪で威嚇しながら、尾を後頭部までのたくらせている。

青鱗が僕の緋色の髪と異様なコントラストを為す。濡れたような緋色とぬらつくような鱗の青さとで、凄い。

刺青は姉の虐殺直後に彫ったものだ。

様々な理由がある。竜神は島の原住民古来の信仰だ。パリー人羅教過激派と島の民族主義者とは殺戮し合っている。僕はパリー人で已然、羅教徒のままだ。改宗してはいない。

道行く人が時々僕に向かって瞠目し、また目を逸らした。

だが、思ったほど気に留められていない。

僕は、街の異変に気が附いていた。

女たちが群れて大通りを歩いて行くのだ。若いのも老いたのもいる。尖頭は女工のようだった。人間が次々と街角から湧き、列は膨れ上がってあふれて行く。女工らに追従する大半の人々は下層階級の主婦らだった。

口々に何か叫んでいる。棒やら鍋やらを持っているものいれば、プラカードらしきものを举げている者らもいる。

中には子供の手を引いている母親さえいた。

こうした連中が中世を色濃く残した旧市街を占拠しつつあった。

一番尖の集団の中に一際目立つ少女がいる。

背が高く、群衆に抜きん出ている。それが毅然としていて靡かせる金髪も神々しく、碧蒼の眸が青い烙陽のように燐の矢を放っている。

アテナ・パルテノスが地上に顕現して光燦に包まれ、地面を灼きながら軽らかに歩むうであつた。

真紅のスカートの裾から纔かに見える黄色い靴下も颯爽、白い服の黒い襟紐は解かれ、汗の為に喉へ貼り附いた髪の一つ、三つの筋が僕を捉えて離さなかった。

思わず、傍らにいた公衆便所の硬貨徴収係の老人に糾す。

「いったい、何が起ったんだ」

皺と白髪との男は一瞬こちちを見てぎょっとしたようだったが、懸命に堪えて体裁を整えようと努力する。身なりが貴族で、風貌が化け物の少年を、どう考えて良いのか判らなかつたのだろう。

彼は諦めの表情を再び顔面に貼附して応えた。

「女子紡織工のストライキです」

併せて言えば、集会でデモが行われているのだろう。

現在のユヴィンゴ情勢を考えれば、如何なる争議行動も一氣に終局へ向かう可能性がある。る。

僕は、状況が思ったより流動的であると覺らざるを得ず、畏怖心にも似た血の奮いが起こるのを抑えられなかつた。海を渡った甲斐もあると云うものだ。

「ありがとう」

僕は最後の硬貨を年寄りにくれてやった。

海鳥島の家屋敷等々一切を処分して工面した金子は終わつた。僕は解放された。それは全く自由な気分だった。僕は浮かれた。

街の古い憂鬱がさらに僕を喜ばせてくれる。

モスクール旧市街は峻巖な、北方特有の物思いを石造建築に漂わせていた。

海鳥島も南大陸出身の豪族、パスタリヤ家が領有する以前には、北大陸の大貴族の属領だった時代が五百年近くも続いていた為、現在も建築物の殆どが北方系の峻巖だった。

だが、如何せん北緯二十七度の風土である。南方系の懶惰な気候にとっては、憂鬱もまたエキゾチックなスパイスでしかなかったが、ここは違う。

それに今、街が滾っている。この騒亂の予感が堪らない。

氣勢を挙げている女たちの興奮が、僕に伝染する。蒼穹がどよめいている。

僕は男でありながら参列を試みた。

主婦らしき人々が叫んでいた。

「戦争は要らない！ パンを！」

僕も拳を挙げた。

「戦争は要らない！ パンを！」

彼女らは僕の存在に気が附いた。僕の周囲は人払いしたかのように直径十mに渡って空間となった。皆が離れたのだ。無理もない。この刺青のせいなのは分かっている。顔面半分を異様な青龍の刺青で覆った人間が（しかも動脈の血液のような濡れ色の緋髪だ）行列に飛び込んでくれば、誰だって恐れ訝しり疑うものだ。

それが快かった。僕は嬉々と歩んだ。

女達が僕を見て囁き合う声は、騒々しさを聞こえない。子を匿う歳若い母親さえいる。忌まわしげな表情に囲まれている僕は嗤笑した。

「さあ、行きましょう！ 連邦政府を打倒し、シルヴィエ皇帝ジュダスを怒りで蒼白にさせてやるんだ！」

だが、僕の氣勢は彼女らを畏怖させただけのようだった。

ジュダスの名をあらさまに出すことに恐れを覚えるのだろう。それほどにシルヴィエは恐ろしい。強大な軍事力と無表情で非情な残虐さを以てこの大陸を圧倒している大帝国なのだ。本来のシルヴィエ聖教の博愛主義など面影もない。

十二年まえ帝国が為した暴虐はいまだ記憶に新しいのだ。

誰もがこの行為がシルヴィエへの抵抗であると分かっているが、意識から伏せているのだ、それを赤裸々にして見せたのだ、それが気持ちよい。

僕は有頂天になった。周囲の騒々しさも耳に入らなかった。いや、皆そうであつたらう。これはまだ革命ではない。だが、いずれ革命となる。興奮が募った。

いきなり夢から醒めさせられた。

「おい、貴様！ この馬鹿野郎どもめがつ！」

髪をつかまれ引つ張られた。見上げると、黒髪で眉の濃い警察官が騎乗から憎々しげにこちらを睨みつけている。

典型的なパーリ人の顔だ。僕と同じ種族だ。そう、パリヴオ自治州はパーリ人が多いからパリヴオ（パーリの土地）なのだ。彼は民族主義者に違いなかった。それも分離独立派に違いない。異宗教異民族が団結する労働運動は彼にとって敵なのだ。

この男はかつての大パーリ王国（齊曆一九九九〜二〇二八年）の復活を夢見る狂信者なのだ。民主主義など糞食らえと云うわけだ。

民族、宗教、こいつらが妹や姉や父や母を虐殺したのだ。こう云う考えは、道理としては妥当ではない。だが、僕は人間だ。

ありつたけを込めて馬上を睨み返した。

「何でこんなことしているのよ！ 馬鹿ね。働く必要なんてないわ！ いったい、誰の為なのよ」

りようりよう

燎々が怒鳴っていた。この叫びが始まりだった。彼女は喚き続けた。

「働いたって、パンなんか、どこにもないじゃないの！ 先月だって、パン屋を壊しても何にも出なかったわ、いったい、どうなっているの、どうなっているのよっ！」

いつも金切り声を上げている彼女だけれど、今日のは特に生存的な気魄が憑いていて、裂帛の、と云う喩えが似合っていた。

早朝の六時四十分、この日が革命となるなんて、ここに居る誰もが思っていなかったに違いない。この八十数名の女子紡織工らの集まりが発端になるなんて、夢にも思っていなかった。

昨日、工場監査を終えたばかりで監督官らは出勤が遅かった。始業寸前の工場の隅で、わたしたちは集まっていた。左手傍らには、膨大な数の紡織機が並び、その列が数十列も続く。

皆思い思いに膝を抱えたり、壁に凭れたり、胡座だったり、肘を突いたり、突っ立ったり、腕を組んだりしながら、困蹙したような、険しいような、哀しげな、憤りを含み、日々の労働の汚れに塗れ、疲弊した表情で眺めていた。

りようりよう

烈火のような燎々は止まなかった。

「考えても御覧なさいよ。」

ねえ、リサ、あんた先々月に郷里に帰ったときはどうだったの！

痩せて髪のはらついたリサが気怠そうな茶色の眼で応えた。

「何度も言ったでしょう、もう。豊作よ。蔵に入り切れないくらいね。私の郷里の東西南北、どこの領地を見ても大豊作だったわ。」

ここまで麦穂で道を敷いても、残りで州都の人間が三か月間たっぷり飽食できるくらい

はあったわ」

りようりよう

燎々は再びわたしたちを振り返って、両手を広げ訴えた。

「聞いたでしょう！ どう思うの、あなたたち！ ねえ、そうでしょう。その麦はどこにいったの、人間様に食べられるべき筈なのに、どこにもないのよ。」

ああ、信じられないよ。現にあるのよ！ こんな馬鹿なことである？ 赦せると思う

の！ 流通機構だの社会構造だの云う見えもしない絵空事のせいで、現実にあるあの麦粒の乾いた感触がどつかに消えちまっているんだよ。いったい、何のことなのさ！ どっちが現実なの！ 世の中どうかしまっているんだわ！」

シャイラが緑に染めた髪を振って立ち上がり反論する。

「でも、今は行動を起こしてはいけなさと通達されている筈よ。」

りようりよう

燎々あなたの言うことは尤もよ。解るわ。でも、皆が臨界点なのよ。ここで動いたらそちこちで暴動になる。

でも、今一斉に蜂起したらどうなると思うの？ 今の私たちの状況が解っている？

あの事件以来、国もシルヴィエも警戒し、準備しているわ。私たちは、殆ど丸腰で武装した警官や軍隊と衝突するかもしれないのよ。

もつと連携を強めて、組織し、準備し、宣伝して訴え、時には農村出身者や徴兵された兵士を懐柔し、可能な限り凋落して、警察組織にも仲間を増やし、民衆全体が団結して、組織を大きくし固めて……だって、考えてもごらんさい。蜂起すれば、またシルヴィエ帝国軍が介入してくるわ。

見たことあるでしょう？ 戦車よ。あんな、馬もないのに動く鉄の装甲戦車が何千台もシルヴィエ側にはあるのよ。どうやって素手で戦うの？

ねえ、気持ちには分かるわ。でも、まだ準備不足なのよ。蜂起してもまた、十二年まえのよう^{りようりよう}に失敗するわ」

療々^{りようりよう}はブルネットの髪を燃えるようにして嘲った。

「あんた、十二年まえを見たの？ まだ這っていた年頃よ。私だって同じだわ。

シャイラ、御願いだから見たように言わないでくれる？ 解りもしないで、二の足踏んでいてどうするのよ。

聞き飽きたわ！

まだ態勢ができていない、労働者組織と軍の下級兵士らとの結び付きも固まっていない、組織の強化も足りない・・・ああ！

それって本当のところなの？

男どものいつもの理屈じゃない！ 指導部の弱腰じゃないの？ あいつらの言うことなんて、まるで仲間同士で手を繋いで架空した城のようなものよ。

準備ができる頃には親も兄弟も死んでいるわ！」

ナスタリヤが坐ったまま言う。

「蜂起失敗以来、慎重なのよ。それにここ数年の戦争もあつて誰も彼も闘争への余裕がなかった。

徴兵のせいで、工場が人材不足になって、女子供や地方の農民たちが集められて組織も稀薄になったわ。

そのせいよ。まだ状況が不足よ。仕方ないわ」

「まったく北系の連中は冷静だね！ あんた、腹^{りようりよう}が減らないの、ナスタリヤ！」

「民族の相違じゃないわ、宗教の違いよ、療々」

「へええ！ 御宗旨が違つとそんなに違ふものかしら！ 馬鹿ね。上面だけよ。皆同じ人間じゃないの。あたりまえのことじゃない。違つかしら？ 腹が減るし、家族が心配でしょう？ 打たれりや痛いし、おかしきや笑うじやない。私たちが笑うときは、いつも同じでしょう？ 同じ空の下に住んでいるのに何で神様が違ふの？ それとも誰かが間違いで誰かが正しいの？ 私の神様が間違いで、あんたの神様だけが正しいの？ そんなのどう考えても馬鹿らしいわ。皆、自分が正しいって何千年経つても言い張っているだけじゃないの。まるで、こどもの喧嘩よ。

本当は血塗られた歴史の怨嗟と今の自分たちを守る為とじゃない。言いたいこと解るでしょう？

私にも信仰はあるわ。神を冒瀆する気はない。神は偉大だわ。ただ、神様は人間の諍いのネタじゃないってことよ。

ねえ、そう言えば、ナスタリヤ、あんたはシルヴィエ聖教じゃない。あんた、シルヴィエ皇帝に何とか言つてよ、どうせこの国の政權なんて帝国の傀儡なんだから。

そうよ、十二年まえ、シルヴィエの戦車が蹂躪して以来、連邦国家に変わったけれども、私ら工場労働者の不幸は倍増しになったわ！ 王様だってまだいるじゃない。拒否権だって持っているわ！

話が違つわよ！

ねえ、ちよつと。聞いているの！ 蘭茶、あんた、南系でしょう、何とか言つてよ」

静まり返った八十余名の女たちの中で、蘭茶はゆっくり腰を上げて、真面目な表情の笑顔を作った。

りようりよう

「製鉄所の男たちに抗議行動の支援要請をする？ 何がしたいの、燎々？」

「何でもよ！ 明日のパンにありつけるなら全てよ！ 戦争なんてする暇があったら、パンを寄越せつて叫ぶのよ」

りようりよう

わたしは坐つていた布置台のうえから下りて燎々の傍へ寄つた。言つた。

「麦は流通過程のどこかで、価格高騰を狙つた誰かが留めてしまつているのよ。

傀儡政権のせいで政治的モラルは低下の一方、誇りなんてない。搾取だけ。

シルヴィエの監視員に賄賂さえすれば、やりたい放題だからね。昔みたいに民衆が立ち上がつても帝国の強大な軍事力で抑圧されてしまふらうつて、高を括つているのよ」

りようりよう

燎々が喚く。

「だから抗議するのよ、イキリア！ あんた、正統なシルヴィエ教徒で、純粋なシルヴィエ人でしょう。ナスタシヤみたいにガリレオ人じゃない。

ノルデ

どうして、奴らはこの北大陸の殆どを侵略したのに、まだ他人の国にちよつかい出すのよ」

「やめてよ。わたしは、国を捨てた人間だわ。わたしに訊かないで。

それよりもあなたの関心はパンじゃないの？」

「あら、言つてくれるわね。ちよつと綺麗だからつて、つけ上がらないで。

あなたに何か考えがあるつて言うの！」

彼女はいつもわたしを妬んでいる……つて言つたら驕つているかしら。わたしは応えた。

「あるわ。

またストライキをしましょう。

誰か製鉄所の男らへ連絡して。もちろん、事後に報告するのよ。事前に連絡すれば止められるわ。

そして、シルヴィエの監督府までデモ行進をするの。そうすれば、男らも見捨てて置けなくなる。

それだけじゃない。

シャイラが言つたとおり、わたしたちが動き出せば、必ず余所も動く。もう何年もストライキや暴動や弾圧、衝突を繰り返してこの国は一触即発の状態、それは確かよ。

これ以上何かを起こせば大騒乱になる。一気に登りつめて行くところまで突っ走つてしまふ可能性がある。

やつてしまえば、穏健派も慎重派も一緒に動かざるを得なくなる。

だから、男たちは活動を禁じているわけだけど、歴史的な必然性なんて待っていられないわよね、燎々。あなたの言うとおりかもしれない。

りようりよう

だって、誰も現実を掌握なんかしていないじゃない！ そうよ。

本当の事態は誰にも解っていない。

皆それぞれで人間はバラバラだし、勝手に蠢いてどこへ行くのか判らないけれど、ともかくも平衡が保たれるよう、流動しているだけなのよ。

皆が違う気持ちや家庭や悩みや状況の中で、それぞれの生き方をしているわ。誰がそれを把握できるの？

でも、それが本当の現実なのよ。行くべきか、待つべきかなんて、指導部が考えるようなかたちで決められる根拠理由なんて絶対ないわ。

ともかくも皆うんざりしている。

いいえ、絶望に近いわ。子供らは飢えているのに、腐敗した政治とシルヴィエの搾取、形ばかりの民主社会主義を押しつけられてね。

尤もシルヴィエ側はわたしたちの蜂起を待っているかもしれないけれど。

だって、わたしたちが蜂起したなら、一気に弾圧して、国家を完全に乗っ取り、他の国々と同じようにシルヴィエ聖教徒に改宗させ、領土化できるじゃない。

その可能性はある・・・

でも、あなたに捲し立てられて今思っただけけど、わたしたちはやるべきなんだわ、きつと。

だって、どちらにしろ、逃げられないのよ。飢えるか、蹂躪されるか、どつちかしかないのよ。

わたしたちは痩せた野良犬やどぶ鼠じゃないわ。蹂躪されて生きるのは、もう沢山よ。

生きることは生き延びることじゃない。わたしは、聖教を信仰しているけれど、帝国は拒否する。帝国には真実がないわ。

だから、ここにいろのよ！ 再びあの国家の信徒になる気はさらさらない。

人間らしく生きる為に戦う、そうすべきよ。

きつと、今やるべきなのよ

みずく

美淑が叫んだ。「ちよつと、待つてよ。それって、おかしいわ。冷静に考えましようよ。

イキリア、あなたに言われて今、気が附いたけれど、それって結構本当かもしれない。

シルヴィエは蜂起を待っているのかもしれないわ。傀儡政権の腐敗は利用されているのよ。

それでなくたって、敵側は圧倒的な科学技術満載の軍事力を持った超大国なのよ。この大陸の八割を制覇した大帝国なのよ。宗教絶対主義の苛烈な国家で死をも恐れない狂信者の塊なのよ。

彼らは教義全うの為に、残虐行為さえも平気でするのよ。皆殺しで何十万人が虐殺されたか分からないわ。

まさか、イキリア、あなた、スパイじゃないでしょうね。わざと、蜂起させようって導いているんじゃないでしょうねっ！」

「冗談じゃないわ！」

息を嚙む音が場を制する。わたしは慎重に、平静を装って睨み返した。猜疑的な眼差し

りようりよう

で療々が突っ込む。

「証拠があるの？ そもそも何であんたはここ来たのよ」

相手の視線を踏み躪るよう平静に応えた。

「証拠？ そんなものないわ。どんな証拠が出せるって言うの。」

そうじゃない？ でも、それじゃ駄目よね。

いいわ。別に。それに何でこの国に来たかなんてあなたに話す必要なんかないわ。

どっち道このまま冬が来れば、来年の春頃には人口が半減くらいしている筈よ。違つかしら？」
りようりよう

燎々 の烈しい目は動じなかった。

「今日まで、イキリア、あんたを疑ったことはないけれど、今は信じられないわ。はつきり言う。私は疑っている。

でも、あんたの言うとおりで、どっちみち、私は動かなければならないのも確かね。

いいわ、別にあんたがスパイでも。どうせ、私ら十二分に不利なのよ。これ以上、絶望の種が増えても大勢に影響ないわ。ともかくも今はパンよ！ 現実を生きているのよ。パンが必要だわ！

皆、いいでしょう？

やるべきことはたった一つ。州議会と監督府を襲ってパンを奪ってくるのよ。

イキリア、あんたの御託は聞かないわ。現実はまだひとつ。

私たちには、この地上で食べられるパンが真実なのよ！」

「もちろん、そうね」

りようりよう
わたしがそう応えたのは魂魄の奥からの同意であって、皮肉ではなかったのだが、多分

燎々 はそう聞いてはくれなかっただろう。

こちらを見もせず、彼女は皆に言った。

「さあ、行こうよ。

シルヴィエさんの異ならそれもいいじゃない。やってやるわ。もう待てない。ともかく

パンを奪うわっ！」
みすく

美淑が両手を広げて周囲の女工らへ喚ぐ。

「ねえ、止めてよ、皆。私、怖いわ。またシルヴィエの精銳殺戮部隊、あのシルヴィエ聖教絶対主義の狂信者たち、『死屍』しかばねの軍団らが来てしまうのよ！」

多分、またわたしの双眸の碧蒼が凜としたのだろう、燎々 でさえたじろいだように見えた。
りようりよう

言った。

「ならば、シルヴィエ帝国軍の目のまえで八つ裂きになって滅びてやるわ」

おれ

それまでの吾はどちらかとするならば、単に実直で平凡な工場労働者でしかなかった。ただ一点を除いては。
おれ

吾は御袋の為に、他の連中のような過激な行動には出なかったし、穏健派とも付き合っていた。
おれ

吾の家族は民族紛争のせいで離散し、御袋は過酷な難民生活の中で吾を育ててくれた。惨たらしい時代だった。吾たちはただガリレオ人であるというだけで、ヴァルゴ教徒であるというだけで、ノルティオ人の民兵に数千人が虐殺されたのだ。奴らにとって吾たちは普通の人間ではないのだ。奴らと同じように家族がいて、家族を愛し、ささやかな幸せを求め、日々笑い泣き怒る人間であることが想像もつかないのだ。

パリヴォ自治州に来たのは、パリリ人が友愛的だからではない。シルヴィエの介入による事実上の占領は、民主化政策を採り、この国を連邦化した。以来、民族紛争は表面的に

は（表面的にも皆無ではないが）影を潜めた。

だから、連邦政府樹立の時点で故郷へ帰らなかったのだが、ただ、自治州内の強硬なパーリ人分離独立派を弱体化させると云うだけの目的で、吾たちはここへ強制移住させられた。

当然、パーリ人民族主義過激派からは酷い暴力を受けたことも二度三度ではない。

いい職に就ける筈もなく、低賃金で奴隷のように働かされる。同じ労働者でもパーリ人労働者とは頭かに差別される。

仕方がないのだ。どうしようもない。

色彩のない無慈悲な工場は鉄骨のがらんとした下に大きな機械が騒音をあふれさせ、あちこちで蒸気を噴出している。

背後で息を殺した声がある。

「火だぜ、炎。女どもが動きやがった」

しばた

吾は手を止めて振り向いた。熱さを腕で拭い、瞬く。機械は動き続ける。物的に動く機械からすれば、吾たちの苦しみなんて、実体のない、非現実的なものなのだろう。だが、炉で溶ける鉄には苦しみなんかはないとしても、吾たちには在るのだ。

汗まみれになって緊張している妻井从の赤毛の顔へ目を凝らした。熱気で歪んでいるからだ。

「何だと？」

「今、言つたとおりさー」

うんざりしながら、隣の同胞へ告げた。

「アンドレロ、後を頼む。」

もしも現場監督が来たら、適当に言っておいてくれ。

多分、来ないと思うがな。

女工たちが動いたと知れば、こつちも動くと考えて敢えて近附かない筈だ。

どうせ止められやしないと分かっているんだ。賢慮して、何も知らなかったことにするだろうからさ」

歩きながら訊いた。

「うちの指導部の動きは？」

「知るもんか！」

妻井从は怯えているようだった。言葉遣いの荒さから分かる。

「いや、本当に知らねえよ。多分、何もないだろうさ。」

奴らいつもびびっているじゃないか。決断しやがらねえんだ！」

うんざりする。言うのは簡単だ。

「責任があればそうなる。」

で、知らせには誰が来た」

妻井从は大袈裟な身振りで、いかれた奴を気取ってみせる。

「ありや御知らせつてもんじゃねえ！ 単なる事後報告、いや、支援要請だよ！

十五分ほどまにに、いきなり来たんだ。もう既に集会も終えて、ヴィーボルグ街通りを

デモ行進中だつてな。

そのまま監督府のまえまで行つて抗議行動をするつて言っていたぜ」

おれ

吾の表情には、憂鬱な翳りが差していたことだろう。

「ともかく議長のところへ行こう。」

まあ、何と言おうが結局は行かなきゃならないだろうな。

女たちを見殺しにはできないからな。今度、軍や警察が出てきたら、もう女だろうと子供だろと容赦しない可能性がある」

婁平从の野郎は引き攣った喜色を浮かべてみせる。

『どうか。警察の犬どもは駄目だが、誇り高いクルウザフの兵隊らは、俺たちを受け容れづつある』

吾は唇の右の隅だけで笑った。

「それは違う。彼らは終わりのない民衆との闘争と、非難されることに疲弊し始めたんだ。」

『俺たちには関係ない。おまえら好きにやってくれろ』って感じた」

婁平从が唾を吐いた。

「全く、おまえに言わせると何も彼も身も蓋もないぜ」

言ってやった。

「それでいいんだ、充分さ」

そうさ。

聖なるゝだの、民族のゝだの、民衆のゝだのと云う高揚感や崇高感は、実生活からかけ離れたものでしかない。

だが、吾たちは議長のところへは行けなかった。鉄製の梯子に手摺を附けただけの橋が工場内には数十本架けられているが、そのうちのひとつを渡るとき、眼下に議長の姿が見えたのだ。

数名の男たちが一緒にいた。見間違う筈もない。黒い制服を着た特別公安警察だった。

吾は不安を覚えた。

「炎、どうする？」

婁平从は見えた目にも震えていた。当然だ。吾も心臓を冷たい手で締められるような思い

がした。秘匿されてはいるが、連行されてその日のうちに拘置所で拷問に遭い、殺されてしまった労働者も少なくないのだ。全く人間とは思えぬ非道な行為で、その惨たらしさは言語に絶した。

「まずいな。今議長のところへ行くのはまずいだろう」

「いったい何しに来たんだと思う、炎」

「女どものデモ絡みで男性労働者の動きに牽制をかけに来たんだろうが、早いな。まるで機会を窺っていたみたいに」

「ど、どう云う意味だよ」

「つまり、これをネタに労働運動者を締め上げて、あわよくばそのうちのガリレオ人を二人二人、いつものように法の名の下にいたぶって殺して差し上げようと思し召しているのさ」

「冗談じゃねえ」

「ともかくだ。議長は。パーリ人だから危惧は要らないだろう。むしろ、吾たちのような連中だ。最有力候補だぜ。」

婁半从、この場は去った方がよさそうだ」

だが、人生は苛烈で非情なものらしい。

吾^{おれ}たちに気が附いた議長がこちらを指差して警察に何か言うのが、はつきり見えたのだ。保身の為に売られたのだ。
るーじん

「逃げるぞ」吾^{おれ}はそう言うや否や婁半从の背中を押して走った。

場内を滅茶苦茶に駆けたが、無駄な努力をしたようだった。一つの扉のまえに二人の警察官が立っていた。後ろを見たが後ろからはさっきの五人が来ていた。左右は壁で行き場はない。

観念するしかなかった。大丈夫、吾^{おれ}たちは何もしていない。特に今日の女子紡織工らの抗議行動に関しては罪を問われる理由なんてない。

だが、拷問を思うと足が震えた。『そんなことはない』、そう思おうと努力し、自制を試みる。恐怖が収まる筈がなかった。

この世の安全など何とも儚いものか。人の気持ちは測り難く、思いもよらぬ理由で憎悪され恨まれることなどざらなのだ。こうと思ひ込んだ人間はどのような暴虐もやり得てしまふ。

なぜこんな目に合わなければいけないのか、吾^{おれ}は自問した。いったい、吾^{おれ}が何をしたいのか。だが、その問いは虚しい。かつて数千万人の人間が歴史の中で叫んできた叫びであり、哀しいことにそれは今まで全て砂塵に吸われて消えてしまっていた。

或る感情が吾^{おれ}を襲った。それは怖れでもあり、烈しい怒りでもあった。

「貴様に少し訊きたいことがある。署まで来てもらおうか。逃げようなんて思ふなよ。無駄な抵抗だ」

警察帽を斜めに被ってクールを気取った猿のように毛深い男が尖頭で言った。歳は吾^{おれ}と同じくらいだろう。

「どうやらそうらしいでせうね」吾^{おれ}はどうにか言った。丁寧に扱ってもらえるよう、冷静に応えたつもりだった。婁半从は威勢のよさもぶつ飛んで、口が利けないらしい。別に弱さは恥ではないよ、婁半从。本当に強い人間なんていないのだ。ただ、強がっている無知な愚か者がいるだけでしかない。

「ふん。一端の口を利くじゃないか、ガリレオ人」

吾^{おれ}の気遣いは徒勞だったようだ。

彼らは吾^{おれ}を『ガリレオ人』と呼んだ。吾^{おれ}の名は『ガリレオ人』じゃない。炎^{ほの}だ。炎^{ほの}と云う名の人間だ。

諦めずなおも努めて穏やかに、平和的に応えようと試みた。

「返事をしただけです。悪いことを言っただけです」

そいつの背後にいた警察官が鼻でせせら笑った。

「聞いたかよ、エテ公が人間の口を利いたぜ」

警察がどつと笑う。

吾^{おれ}は黙っていた。いや、こんな緊迫した状況の中で、奇妙な空想に捉われていた。この態度からはとても想像がつかないが、彼らにも恐らく家族がいるのだ、愛する人には優しく思いやり、子供がいれば抱いて頬ずりをし、母や父を扶けて暮らしているのだ、と。

それがそう見えないのは彼ら^{おれ}が吾^{おれ}をガリレオ人とししか見ないと同じことで、過ちなの

だ。多くの労働者は警察を『警察』と見て憎んでいるが、同じく過ちなのだ。神は敵をも愛せよと言った筈だ。

だが、今のような状況で、誰が客観的な正しい認知を維持できようか。神の高邁な教えに従えようか。人間にとって、それは余りに過酷な言葉だ。この暴力への恐怖の中で、この誤謬をどう避けたらよいのか。自分の生存が第一の問題だ。だから、人間は御互いに不安定な存在なのだ。

「おい、何とか言えよ。言わないならこのパリヴォから出て行け。ここは貴様ら蛆虫の住む土地じゃない。神聖なるパールの土地だ。」

のこのこと居座りやがって、薄汚い野郎だ！」

吾^{おれ}たちは故郷へも返してもらえず、強制移住させられ、ここに暮らしている。それなのに神よ、こんな馬鹿な誹謗があつてよいものか。

「無茶を言わないでください。」

シルヴィエが強制的に吾^{おれ}たちをここへ連れて来たのです。吾^{おれ}たちもあなたたちも同じ被害者の筈ではないですか」

一人の警察官が憎しみを剥き出しにして言った。

「何だと！ 貴様つ。」

おまえらと一緒にするな、浅ましい物乞いどもが！ 卑劣なガリレオ人め！

泥棒野郎が何を言いやがるんだ。出て行きやがれ、この土地から出て行きやがれ。

さもなくば、屍にしてやるぜ」

本当の敵はシルヴィエの筈ではないか。彼らだって、そんなことは解っている筈だ。

吾^{おれ}は多分無意識に睨んでいたんだろう。

「おい、なんだ、その目は」

吾^{おれ}は焦った。

「いや、別に何でも・・・」

いきなり殴られて吾^{おれ}はその場にしゃがみこんだ。よろめきながら再び立つと、今度は蹴られ倒れた。なぜ？ 御袋は悲しむだろう。そう思うと涙が込み上げた。

「どうしようもない野郎だ、貴様らヴァルゴ教徒、ガリレオ人どもは！」

「動物以下だぜ、おまえら人間じゃねえ！」

「淫乱な邪教、いかれた異教徒が！ 汚らしい異教徒めが！」

吾^{おれ}は壁にもたれて倒れたまま堪えた。奴らは吾^{おれ}が憤るのを待っているのだ。だが、次の言葉が吾^{おれ}の抑制を切った。

「姦淫の邪教徒め！ 薄汚い動物だ、ガリレオ人、貴様を生んだ淫売の御袋の面^{つら}が見てみたいぜ！」

吾^{おれ}は立ち上がった。どんな人間にも我慢のできないことがある。吾^{おれ}の勢^{おれ}いを見て二人の警察官がまえに出た。尖頭の男は薄笑いのままだった。気が附くと吾^{おれ}は二人を殴り倒していた。

「よし。逮捕しろ」

逮捕！ 逮捕だ！ こんな馬鹿なことがあつてよいものか。逮捕だと、こんなに嘲られ、乱暴^{おれ}をされ、御袋まで罵られ、それで逮捕と言うのか！

吾^{おれ}は、吾^{おれ}は！

神よ、これでも敵を愛せと言うのですか。いや、吾^{おれ}はいい。だが、家族は。最愛の者が嘲られても敵を愛せよと言うのですか。

もしも家族の生命を脅かされたとしてもその敵を愛せよと言うのですか。それで家族を見殺しにしても、屠殺の犠牲にされてしまつてでもですか。

^{おれ}吾にはできない！ できる筈がない！

眼で射抜くように警察官どもを見た。

扉のまえに突つ立っていた二人の警察官を突き飛ばす。向かつて来る奴を殴り倒す。扉を開けた。そこは迷路のような機械の群れが列している場所。狭間を疾駆した。職工たちが驚いて見る。誰かが名を呼ぶ。応える暇がある筈ない。手に触れるものを次々倒し、足にあたれば転びそうになりながらも蹴り飛ばし、よろめいては人突き退かして、視覚が追従できぬのも構わず、光景が引き延ばされて網膜に映るほどに速く、ジクザクに走り抜けた。警察は追いつけないようだったが、後ろを見る余裕なんかない。鉄製の大扉を外壁に叩きつけて外へ飛び出した。一瞬だけ、蒼穹が目に入った。

いつか奴らにはつきり言つてやる、数百万人の大虐殺もひとつの民族を根絶やしにしたことは歴史上、一度もないのだと。^{おれ}吾は守衛の制止も聞かず、裏門を越えて街を走った。

灰色と焦げ茶色しかない狭い裏路地を駆け巡った。朽ちた貧民窟を抜けた。

道はひとつしか思いつかなかった。

^{おれ}吾は突つ走りながら、イキリアの双眸だけを思っていた。

^{せいれき}

齊曆二七二七年十月、カタリイナ街区にある自治州警察本部。おれは会議机のうゑに握り合わせた拳を睨み続けている。坐つて説明を聴いている仲間も皆黙っている。

出動を命じられたおれたち特別公安課機動部隊員には発砲の禁止が言い渡された。指令が出るまでは銃に手を触れるなど言われた。あの大畜生以下の暴徒どもを相手にそんなやり方が通じるのか。それで、おれたちの安全はどうなるのだ？ 発砲の禁止など国際的非常難を躲す為だけの政治的配慮ではないか。現場で戦う者はいつも犠牲だ。

^{さぶらう}

「熱くなるなよ、参廊」

隣に坐っている同僚は言つたが、おれには我慢ならない。暴徒どもは警察を憎んでいる。しかもいざと云うとき頼りとすべき軍隊はどうだ。戦争のせいで精鋭部隊はいない。兵役義務で召集された経験の浅い予備隊と、残された守備隊、及びクルザフ人の部隊だけだ。戦争は徴兵を口実に過激な労働争議指導者を前線へさらつてはくれた。だが、事情は軍隊自体に於いても同じなのだ。

不安材料はそれだけではない。奴ら予備隊兵どもは住民との争動に倦み疲れている。クルザフも同じだ。いや、それ以上に恐ろしいことは、下級兵士どもが最近、労働者への同情を示し始めていることだ。連中が時々労働者どもに目配せするのをおれは今までに何度も見た。

何と云う兵士たちの愚かさか！ そして、工場労働者どもの何と巧みなことよ！ 奴ら烏合の衆は一人一人では矮小なろくでなしのくせに、その全体では無数のプランクトンのように海を染めて、全てを懐柔し、呑み込み、丸め込んでしまふのだ。

だが、おれははつきり言おう。狂つた連中には、鉄鎚しかない。人権なんか擁護すべき

ではない。確かに人権は生得権だ。しかし、無制限であってはならない。秩序はどうなる。平和と安全こそ人権の基礎ではないか。

そして、これが最も大事なことだが、人間の価値とは行為で決まるものなのだ。人間とは生物学的な種であってはならない。人間として行為する者が人間なのだ。人間たらしめる行為者に人権を認める必要があるのか。『パンを！』だと？ 奴らは虫けら以下だ。

口髭のフリードリヒ課長が怒鳴った。

「分かったな。こちらは冷静に行くんだ。いいな！

では、状況を説明する。

本日午前七時、工業地区の第二紡織工場の女工らが集会、ストライキのうえ、工場外の道路に不法結集し占拠、進行を始めた。

当初、八十数名の行進であったが近隣工場の女工らがこれに加わり、数百名に増えた。

現時点で街の主婦らを巻き込んで膨らみ、数千名の違法行動となつて旧市街区東駅周辺を尖頭、旧市街門辺りまで連なつて、今も増えつつある。

対して、男子労働者の動きは未だ確認されないが、追従の可能性は高い。最悪の場合、州都を席卷する暴挙へ変じ兼ねない危険な状況だ。

動きはヴィーボルグ街通りから左折、ヴィアドロザ通りへ入りつつある。恐らくはそのままイマヌエレー世通りを行き、テヴィレ川を渡り、監督府へ向かうものと思われる。

われらの今回の任務は惨事を回避する為、これを阻止し、解散させることにあつたと周知せよ。

いいか。重ねて言うが、発砲はするな。これは州政府からの通達でもある。争乱を避け、人命を尊重する、それが主旨だ。

では、詳細は現地での各班長の指示に従うこととするように。各班の出動区域をこれから口述する」

聞き終えろとすぐに動き始める。階下へ降りた。一斉にロッカーの扉が開く音、衣服の擦れる音、手早く防護防寒着と帽子とを身に付け、直径五十cmの盾と長さ一mの警棒とを持った。サーベルはいつも佩刀している。支度は瞬時に為された。誰もが脛当てを附けたスパルタ人のような面持ちに変ずる。

特別公安課は十二年まえ自治州が成立したとき、ユヴィンゴ王国時代の公安部公安第一課と公安第二課とを合併させ、今日のような暴動に備える為に設けられた部署の一つだ。

常時二十名以上が本部に詰める以外に、各区域要所に人員を配し、モスコールだけでも機動員五百四十名がいる。

民衆から憎まれて誰もが嫌がるここへ、おれは志願して転属した。奴らがおれたち警察を憎む以上に、おれは暴徒どもを憎むからだ。

そもそも、こんな騒ぎを起こして何になる。パリヴォ分離独立の弊害、迂回にしかならぬ。そんなことを神が赦すものか。

パリヴォは元来おれたちパーリ人の土地だ。二千年まえに南大陸を移動し始めたパーリ人が数百年かけてこの土地に着いて以来、この地域の住民の八〇%がパーリ人だ。ここは本来おれたちの土地なのだ。歴史的にも正統なのだ。真実なのだ。神の御心なのだ。

かつての大パーリ王国（齊曆一九九九〜二〇二八年）を復活させること、それこそ至高の聖務であることは余りに自明の理だ。

屈辱的な敗北を喫した齊曆二〇二八年のゴルドの戦い以来、ノルティオ人のユヴィンゴ王国に蹂躪され、シルヴィエ介入による王国崩壊後もその地位変わらず、連邦制の下に組み敷かれている。仲介者を詐称するシルヴィエに認められ、自治州へ昇格できたことは一歩前進とも言えるが。

民族を問わず民衆が一致団結するなど、夢でしかない。奴らは今仮初めに手を結んでいるだけだ。大きな共通の問題を抱えているからだ。だが、いざとなれば民族や宗教の差異によって必ずや分裂するだろう。それが最も顕著になるのは、（あり得ないことだが）奴らが勝利を手にして望みを成就したまさにその日に違いない。

とすれば、何と虚しい行為であることか。現実には立ち返れ。人間にとつては、自らの命、家族、民族こそが礎なのだ。それ以上の単位には矛盾が避けられない。

おれは常々思うのだが、これはバリヴォ独立を阻もうとするマイノリティの陰謀ではないのか、無知な下層階級の者らは愚かにも踊らされているのではないかと。

なぜこんなに自明なことが分からないのか。苛立たしさに、はらわたが煮えくり返る。全く愚かだ。目先のパンしか考えない。

ともかくも自治州にまではなつたのに。こんな争乱を起こしては、ノルティオ民族主義者がスローガンとしている、自治州取り消し、完全なるユヴィンゴへの編入のよい口実となつてしまふではないか。

説明後、出て行くこうとするおれらに向かつて、課長が怒鳴った。

「取り敢えず発砲はいかん。過度な攻撃も防衛もだ。分かるな。くれぐれも心得違いをするな」

おれたちは殺気立つて出ていった。廊下で同僚が肩をぶつけて、おれに言った。「よう、やってやるうぜ、参廊」おれは頷いた。当然だ。

「ああ、ぶっ殺してやる！」

北大陸南部地域の大平原を領有するハーグ公国で育つた軍用馬に騎乗しておれたちは発つた。

朽ち崩れかけてもいまだ厳しい中世の旧市門の辺りで、デモの最後尾を見附けた。もうこの場所にはいない筈だと思っていたので愕いたが、事情がすぐに判った。列の最後尾がいつまでもそこにあるのは、後から後から蛆のように、路地裏からわいてきて追従するせいだった。おれたちが来てからもさらに膨れている。まるで巨大なうねりだ。おれたちの誰もが顔を見合わせ、事態が安易ではないと感じ始めた。

「びびるなよ」おれは言つてやつた。「奴ら烏合の衆だぜ」

「おうともさ。参廊の言うとおりだ。見ろよ。殆ど女じゃねえか」

殆ど！ 情報では女だけの筈だった。確かに工場労働者ではないようだが、幾許か男どもの姿も見えた。肉屋の親爺、パン屋の親爺、洗濯屋の親爺、理髪店の親爺、仕立屋の親爺、鍛冶屋の親爺ども等々だ。無論、それで何が違うわけでもないのに、現におれたちは動揺していた。

「ともかくだ」おれは咳払いした。「おれらは担当区域まで行くべきだろう」皆すぐに反応した。「おお、尤もだともー」「無論だ」「決まってるあ」

おれは一同の顔を見回して、慎重に言った。

「では、いざ参ろうか」

大通りを占拠し喚き振りかざし拳を挙げながら、勢いばかりで統率がなくのろのろと進む群集を、おれたちは蹴散らして進んだ。時々足下の顔から憎悪に満ちた怒号が聞こえたが、民衆らはそれ以上何もしなかったし、おれたちも先を急いでいたので無視した。

東駅を過ぎてヴィアドロザ通りへ曲がったところで、おれたちは集団の尖頭を見つけた。周囲が「警察だ！」「サツだつ」「保安課だあ」と口々に叫び騒ぐ。

おれはそれらの声が聞こえない振りをして平然と顎をしゃくった。

「いたぜ。」

あれが尖頭集団だ。

あいつらが恐らく第二紡織工場の女工どもだろうよ。おあつらえ向きにこの辺がおれらの担当区域の筈だぜ。やってやる！」

十二頭の軍用馬で突っ込んだ。

悲鳴が上がる。

「うらあ」おれたちは絶叫しながら、鞭を振るった。「貴様ら、何だつ、解散せい！」

抵抗する者はない。皆散って行くばかりだ。それでいい、人間は全て臆病者なのだ。強さは愚かさでしかない。無知でしかない。おれは溜飲を下げる思いで、騎乗から周囲を睥睨した。

目に附いたのは、一人の男だった。ここではまだ女ばかりだったからである。そいつは遠目にも奇妙な男だった。

一見貴族のようななりをしながら、緋髪で、顔の半分を蒼い色で埋め尽くしていた。

「いかれた野郎だぜ！」おれは大声で罵ったが、届かない。そいつのいる最も尖頭の一群まではいま少しの距離があるのだ。奴らも自分自身の訴える声に夢中で、こちらで起こっている騒乱にさえ気が附かず、氣勢を上げて進んでいる。

おれはああ云った奇態な、傾いた者を許すことができない。いい加減で、社会に対して無責任で、何者かを気取っていて、気概もないくせに二丁前で、真の信条を持たぬスタイルだけの軽薄な連中だ。

間髪を与えず、一気に近付き、馬上からその緋髪を引っつかんでやった。

「おい、貴様！ この馬鹿野郎どもめがっ！」

おれたちが突如現れたので周囲の女どもが一斉に退く。「警察よ！」悲鳴を上げる者らもいる。

男も一瞬は驚いたようであったが、意外にもおれを睨み返してきた。

近附いて初めて、その余りの異常さに驚愕した。顔の左平面を覆う青龍の刺青だ、しかも緋髪は濡れたような滑らかな照りがあつて濃い。

「何者だ、おまえは！ 馬鹿者がつ、恥を知れ、そのような愚かしい無様な姿よ！」

それにしても何と云う異様か・・・とおお、よくよく見れば、パリー人ではないか。おのれはおれの一族だ。何て様だ！ この面汚しめが！

貴様のような、安穩と生きている暇人は仕事もせずに、そんな馬鹿な格好がしていられるんだ！」

心外だとても言わんばかりに、みるみるそいつの顔が激怒の赤銅色に変わった。筋の通ったことを言われて逆上したと見える。苦勞知らずのガキによくあるタイプだ。辛酸を嘗めたことがなく、挫折を知らぬ御坊ちゃんで、堪え性のない態度だ。おれはこう云う性分

の奴を見ると奇立つて我慢できなくなる。

憤怒に任せておれは鞭を振り下ろした。刺青野郎は堪らず倒れた。だが、目だけはこつちを見やがる。おれは怒り心頭でサーベルに手をかけた。

傍で女の叫ぶ声がした。

「見てよ、警察がわたしたちに剣を振るうわ!」

おれは声の方を振り向いた。そして、再び驚いた。

それは信じられないような美しい女だった。白熱する太陽のような眩さを持った金髪で、その瞳と言ったら、まるで数千種類の青いモザイクを重ねて散りばめた大海原のような、凄絶な煌めきの双眸だった。

その双眸が凜々としておれを睨みつけていた。おれは射抜かれた。思わず、緋髪を手放していた。

衝撃でおれは何秒間静止していたのだろう。

別の方から聞こえた叫びでやつと気が附いたのだ。

「皆、相手はたったの十二人よ! どうつてことないよ、警察なんて!」

今度はそつちを振り返った。ブルネットの髪をした、痩せて癪の強そうな背の高い女。おれはこう云う性質の女を見ると陵辱したくなる。だが、女の強がりもそれまでだった。特別公安課の他の班が次々と到着したからだ。おれたちの班長もやつと見えるところを追いついてきた。たちまち大騒動となる。逃げ惑う群集。息せき切った班長が近附いて来て怒鳴った。

「全く貴様ら、ええい、勝手なまねをするな!」

学校出ののろめが。おれはそんなことは億尾にも出さず、敬礼した。

「うむ」班長はそれだけで納得したようだった。育ちのいい奴らは単純だ。「よろしい。

では、作戦行動だ。さあ、連中を囲み込むんだ。ほら、あの班のように動け」

おれはあの金髪の蒼い瞳の女のいたところを振り返った。混乱のさなか、もう見えなかった。目で探した。とても見出せるものではなかった。緋髪の男もいなかった。

吾はどこをどう走っているのか判らなかった。最初は裏路地から裏路地を抜けていたのだが、次々と路地から通りへ、通りから大通りへと向かう人々にぶつかり、かすり、避けようとしてはバランスを崩していた。

吾は婁半从のことが気になり始めた。彼はいつたいどうなつたであろうか。あのまま吾の共犯者のように扱われ、逮捕されてしまったか。婁半从は無抵抗の筈だが、そんなことあてにならないか。と。

吾は後悔した。婁半从を犠牲にしてしまったのだ。身代わりにしてしまった。少なくとも彼を見捨ててしまったのだ。母を謗られた憤りで彼を忘れてしまったのだ、何と云うことだ!

引き返すべきか。だが、引き返してどうなるのか。かと言って、保身の為に逃げてしまふのか。ああ、とても戻れやしない。

そうこうしているうちにいつの間にか群集に押されるように、大通りに出ていた。むしろ、ここの方が安全かとも思えるくらいの人の数だった。

ヴィーブルグ街通りだった。東駅のまえ通り。

と、突然人の流れが逆になって大通りから小さな通りへと押し返すようになった。群集を掻き分けて何事かと背を伸ばした。

特別公安機動部隊員の乗った軍馬数頭が人々を蹴散らして大通りを疾駆していた。

「何て無茶をしやがるんだ！」思わず怒鳴ってしまった。

軍馬の走る尖は^{さき}ぼっかり人のいない空間となっていた。いや、違う。見ろ、何てことだ。一人の幼い少女が逃げ遅れ、恐らく急激な人の移動に追いついていなかったのだろう、或いは逃げ惑う人々によって倒されてしまったのか、疾駆する馬のまえに膝を突いているではないか！

誰も助けに行く者はいない。あたりまえだ。誰に行くことができようか。見ろ、誰もいない。誰も・・・吾が？^{おれ} 吾か。だが・・・いや、そうとも吾が行けばいいではないか。^{おれ} 吾が助ければいいのだ。吾が飛び出せば。吾が・・・^{ぼの} 炎よ、貴様と云う奴は彼女をも見捨てる気なのか？

あたいはいつものとおり、教会の中にいるみたいな日の光の差す路地裏にいた。白っぽくかさかさになった小さな素足の裏には、冷んやりした敷石の古い古い感触があった。まっすぐの壁に寄りかかって、石の凹凸があたいを拒むようにちゃんとあるのを生地越しに背中を感じていた。

皆が慌ただしく往来している。足音が喧騒しい。小さい頃に見た、うら憶えの海の波のように、寄せては返して遠のき、また近附いて高まる、あの感じだった。

誰もが何か喚きながら声を掛け合っていて、小走りだったり、立ち止まったり、氣勢を上げたりしながら、走っては後ろを向いて人々に何か訴え、目を見開いて応え、何も彼もが騒乱だった。でも殆どは女の人たちだった。小母さんや姉さんたちだった。中には老いた人もいて、両手を挙げて、まるで怒っているようだった。

「パンよ！ 訴えるのよ！ デモよ！」口唇の端っこで泡を立てながら、口々にそう叫んでいるみたいだった。

デモって、何かしら？

でも、パンって言っていたわ。パンなんて、もうずっと食べてないわ。

あたいは膝を抱えていた腕をほどいた。

食べられるのかしら、パン？ だから、皆、急いでいるの？ 本当かしら？ でも、死んだ御婆ちゃんが言っていたわ、美味しい話なんて、世の中にはないって。そんなものは罰当たりで、全部嘘だった。

御婆ちゃん、寒い寒い日に薪が買えなくて、死んじゃった・・・

『由伽^{ゆか}はいい子だから、きつと幸せになるよ』そう言っであたいの頭を撫でてくれたのに・・・

御父ちゃんは酔っ払うと神様なんていないんだって騒ぐの、そうすると御母ちゃんがいつも泣きながら怒る。罰当たりな恐ろしいことを言うなって。御父ちゃんは狂ったように嘲り笑うわ。罰当たりだって？ そして、あたいを見るの。だって、あたいは余所の男が御母ちゃんに生ませた子だから。御父ちゃんが教会の普請の為に労働奉仕で留守していた

間に、御母ちゃんは姦られちゃった。無理やりなのか、許したのかなんて、あたいに分かるわけない。

でも、よくある話たわ。あたいは御父ちゃんにそんな目で見られると凄く哀しくなるし、御父ちゃんと御母ちゃんとの喧嘩が物凄くから、聞きたくない言葉が一杯あるから、そう云うとき家を出る。そして、冬はととても寒くて、手が冷たくて、足が冷たくて、涙が出てくる。

妹はあたいについてくるから、風邪をこじらせてしまった。もう三日も伏せている。多分、治らないと思う。毎日毎日咳が出て食べられない。痩せて、顔色が蒼く悪くなって、全然元気がない。

もう一緒に遊べない。まえはあんなに無邪気に笑っていた妹がもう死んじゃうかもしれない・・・涙が出てくるの。

どうして皆、死んじゃうの。あたいもうすぐ死んじゃうのかもしれない。それでもいい。きつと怖くなんかない。

あたいは花籠を置いた。

御母ちゃんが知ったらきつと怒るだろうけれど、だって、もう御仕事なんかする気持ちになれない。御花なんか売っても、妹の御薬はとも高くて買えない。一生懸命貯めたって、また御父ちゃんが飲んじゃう。

どこにも逃げられないのよ。

あたいは立ち上がった。

「パンよ」

あたいはバーリ人。でも、羅教じゃない。ヴァルゴ教徒なの。だから、祈るわ、『ヴァルゴの聖なる処女神様、あたいの魂を御守りください』って。妹の為に、パンを持って帰りたいの。せめて最後に食べさせてあげたいの。御願い、神様。

通りに出ると見たこともないくらい大勢の人たち・・・余りのことで、しばらく立ちすくんでしまった。こんなことって起こるの？　いったい、何が始まっているのかしら。信じられないわ。こんなにたくさんの人たちがどこから出てきたの。あたいたちの街にはこんなにたくさん人がいたって、知らなかったわ。

ただ寄り集まって叫んで渦巻いているようだけれども、よく見れば行列になっている。加わる人たちが路地から家々から溢れ出てきて、それはどんどん大きく、長くなる。

見て。いつの間にか男の人たちもいるわ。お店のご主人や鍛冶屋さんや大工さんやいろいろ・・・金貸しの御爺さんが皆に殴られているわ。またパン屋さんが壊されている。パン屋さんだけじゃない、食料品店は全部よ。洋服屋さんのショウウィンドーが割られている。こんな混乱の中じゃまるで些細なことみたいに見えるわ。皆が血眼で奪って道に挙げて吼えている。

こんな・・・こんなことしていいの・・・皆地獄に堕ちちゃうわ・・・

でも、あたいはもつと広い通りに出た。近いのに殆ど出たことのない大通りへ。ちょうど東駅のまえ辺りだった。

街の建物以外のところを埋め尽くす人間の渦、波、滝。本当に信じられない・・・けれど、驚いている暇はなかった。たちまち人の流れにあたいはさらわれてしまった。あたいは人、人、人の怒涛に呑み込まれ、息が詰まるほどに押されもみくちゃにされ、嵐の夜の

枯葉のようにされてしまった。

足場が保てなくて、倒れそうになったとき、急に周りの人が離れた。あたいは転んだ。驚いて周囲を見回すと、あつと云う間にあたいの近くに人がいなくなっていた。半円形に五十mくらいが空間になってしまっていた。太鼓の乱れ打ちのような蹄の音が入る。振り向くと軍馬に乗った特別公安課の黒い警察機動部隊たちが迫っていた。

「危ない！」

誰かが叫んだ。

十数頭の馬の逞しい脛が近附いていた。あたいは蹄の下敷きになりそうだった。

私たちはヴィアドロザ通りから警察に蹴散らされてここまで退いていた。イキリアたちは逆にイマヌエレ一世通りの方へ避けたようだった。彼女から目を離すのは、不安だけれど、しょうがない。こんなどさくさに紛れて、シルヴィエの監督府なんかと連絡を取られては敵わないが。

どうにかリサを見つけた。

「あんた、大丈夫なの」

「ええ、何とかね、燎りょうりょう々」

彼女は群衆に揉まれてふらつきながら無理に笑っている。

そんな笑みに応えて元氣附けようとする間もなく、反対側からも特別公安機動部隊の軍用馬が迫っているのが見えた。人々はパニックになりつつあった。人の動きは混乱を極めていて押し合い引き合い、思うように動けない。

こんなにもあふれる群衆の中を、あの男たちは馬で割って進んでいる。何て無謀なことをするのだろうか。

あつと言う間に私の数十mまえの人の海が割れて、猛々しい群れ馬の列が迫り突き進んで来た。

そのときだ。何と云うことだろうか。

逃げ遅れた少女が一人、倒れているではないか。私は思わず叫んだ。反射的に飛び出そうとするところを、リサに抱き止められた。

「やめて！ 燎りょうりょう々死んじやうわ！」

私はリサを睨んだ。

「だつて！」

ともかくもあの娘だ。私は少女に目を戻す。

駄目だと思ったその瞬間だった。

尖頭を行く馬の前脚に誰かが太い棒のようなものを投げ附けた。革鞆し職人がよく使う棒だった。

同時に精悍な若者が走って、女の子を抱き上げる。尖頭の馬が倒れて後続の馬が危うく急停止する。

巻き込まれそうになりながらも若者は少女を庇うように転がり、馬蹄を避けた。

間一髪だった。

肩で息をしながら少女を抱きかかえて立ち上がった若者は……

ぼの
炎だった。

肩で息をしている。

蹄が目のまえに迫っても、あたいは動けなかった。驚きと恐怖とで何も考えられなくなつてしまったのだ。目をつぶつた途端、乱暴に身体をつかまれ、あつと言う間もなく引つ張られ、目を開けたけれども何も彼もが速く回つて解らなかった。

ようやく物の位置が定まると、がっしりした腕に抱きかかえられていることに気が附いた。

あたいを抱いたままその人は、ゆっくり立ち上がった。

目のまえには五、六人の黒い警察官が歩み寄つて来ていた。他の二人が馬から落ちた人を起こしていた。男の人の鼻腔から息を髪に感じた。だから、あたいの髪は額で揺れている。汗が匂った。

怖い。警察が目のまえに立った。あたいは彼にしがみついてまた臉をぎゅつと閉じた。でも、怖いのはきつと彼も同じだ。厚い筋肉からも鼓動が伝わる。

けれど・・・この人は怒っている。警察官たちの憤りとは全然違う種類の憤りで怒っている。あたいには分かった。

しがみつきながら恐る恐る臉を開けると、警察帽を目深に被つた一人が言った。

「何のつもりだ？」憤りの感情さえ読み取れなかった。そして、それだけ言うと、後ろを向いて顎をしゃくつた。また向き直つた。こう言つた。

「公務執行妨害で逮捕する」

あたいは男の人の顔を見上げた。決然と緊張した表情で相手を凝視し黙っていた。

無表情で警察がまた言つた。

「聞こえたのか？」

逮捕すると言つた警察官の背後にいたうちの二人が、まえに進み出て来て、男の人の両腕をつかんで抑えた。

彼らは男の人の顔をまじまじと眺めた。

「貴様、ガリレオ人か」

黙つて応えなかった。

「ガリレオ人だな。・・・ほう」

警察は冷たく笑つた。そして、背後の同僚に向かって笑いかけた。

「おい、ガリレオ人だよ」

背後の警察官たちが嘲りを込めて笑つた。両腕を抑えている警察も嘲笑した。

男の人の腕は震えているようだった。だけど、彼は訊いた。

「あなたたちはこの子を踏み潰して行く気だったのですか」

尖頭の警察官が訝しげに片方の眉を上げた。

「何だとお？」

「この子を殺す気だったのですか」

「何だあ、ガリレオ人、その口の利き方は？」

「一端の口を利くな、ガリレオ人！」

男の人が言った。

「まじめに伝えてください。それともまじめに応える気がないのですか。それでも人間ですか。愚弄して話を逸らすばかりで、・・・自分たちの行為に何らの思慮もないのか。貴方たちのような・・・あんたらのような奴らこそ最低だつ！ 人間以下だつ！

聞けい。いったい、人種や民族など関係あるのか。あんたらにも娘や妹が、幼い家族がいるだろう。

分らないのか。同じなんだ！ 想像できないのか。皆同じなんだつ」

笑っていた警察たちが怒気で顔を曇らせた。

「同じだと！ つけ上がるな、卑劣なヴァルゴのくせに。俺たち神聖なるバーリ人と同等だど？ 神は俺たちを選別されたのだ！ 貴様ら無知蒙昧な輩やからに何がわかるか！」

沈黙があつた。

男の人はあたいをそつと下ろそうとした。両腕を抑えられているので、うまく下ろせないらしくて、あたいはすり落ちるように彼の足下に着いた。

その人の顔から目が離せなかった。うまく説明できない。怖いのと不安なのと悲しいのと・・・

「行けよ」

彼はあたいに言い放った。

なぜか分らないけれど、涙が込み上げて止まらなかった。

彼はあたいを見なかった。

そして、両腕をつかんでいる左右の警察官へかわるがわる視線を投げた。

「それが本当のおまえらの気持ちなのか」

両側で警察が怒気を強める。

「ああん、何だど？」

「頭に乗るなよ、貴様、ガリレオ人が」

男の人の憤りの眼差しは烈しい蔑みへと変わり、正面に向き直る頃には凍てついたように決然とした強い表情となった。

まえに立つ警察を見据えた。

周りの人たちは誰もが遠巻きにして固唾を呑んでいる。彼は言った。

「おまえらは真実ほんとうに国を愛しているのでもなければ信仰心すらない。おまえらに民族の何が解ると言うのか。

おまえらは、自分自身の抛りどころを、自尊心を、自己のアイデンティティを、自信を、そう云ったものの確信を愛国心や殉教精神や民族の誇りと云う昂揚感で獲得し、奮わせているだけなんだ。

なるほど、それを全て否定はできない。余りに多くの屈辱を受けた民族や虐げられた人々、不幸に打ちひしがれた魂を、そう云ったものが慰めるからだ。

おれ 吾にも解る。

だが、それが他者を理解せず、すなわち相手が自分らと同じまっとうな人間であることを知ろうとせず、憎悪で人々を討つならば、それは悪魔の行為だ。強制収容所を設け、民族浄化と称して公然とレイプし、背教者と呼ばってこどもらの喉を裂くならば、悪魔でなくて何であるか。

そう、吾も認めよう。本来的にあるならば、民族を尊ぶのはいいことだ、敬虔な信仰は大切だ、国家に身を捧げるのは素晴らしい。また愚かな考えで国家を批判し、信仰を辱め、民族を軽んじるならばそれは忌むべき行為だ。

解るか。国家主義が正しいのでもなければ、反国家主義が正しいのでもない。正しい行為が正しいのだ。そのためには常に批判されることが必要なのだ。批判されぬものは悪魔に陥る。

正しい精神による批判は絶対に必要だし、できることだ。国家や王の行政を、民族に裏付けられた行為を、その都度妥当か否かを批判できる筈だ。神は批判できなくとも、神の代弁者を批判できる。代弁者が常に正しく神の声を聞くとは限らないからだ。

だが、こんなに道理の通った弁さえ虚しいのだ。

なぜなら、おまえら愚昧者は、何も知ろうとしない、解ろうとしないからだ。おまえらに批判精神がないからだ。人間理性がないからだ。ただ教えられたまま、愚かにも他民族を軽んじ、他宗教を蔑み、それを抛りどころに生きている。なぜ、そうなのか。解るか？ おまえらの動機が歪んでいるからだ。

真実に信仰があれば、真実に民族に誇りがあれば、真実に国家を想うならば、他者を慈しみ、融和し、尊ぶことができるのだ。それができず、固陋で蒙昧なのは、おまえらに、真実がないからだ。心が正しくないからだ。違うか。

だが、おまえらは嘲るだけ、憎むだけで何も解ろうとしない。吾の言葉など、まるで聞きもせず、犬が吠えているくらいにしか感じない。

知ろうとせず、全く事実が見えていない。あたりまえな事実、おまえらも吾たちも皆同じ人間だと云う歴然とした事実をだ。

吾はもつうんざりだ！

聞けつ。

革命だ！

あたいは周囲の人たちの間に波が走るのをここからでもはっきり感じた。警察官の目が震えた。怒りとも虞れとも見えた。たちまち警棒を振るう。

「貴様っ！」

警察官が寄つて集つて彼を囲み殴り蹴り叩き打った。あたいは勢いに突き飛ばされた。男の人はめされた。彼の目だけが屈せず黒い警察たちを睨み上げているのがはっきり分かった。

「さあ、今のうちよ、早く！」

茫然自失のあたいを誰か女の人が素早く助け起こして、引きずるように取り巻く群衆のところまで戻してくれた。

私は炎の言葉に核心を貫かれたような衝撃を感じた。

「療々、彼殺されるわ」

誰かが私に言った。けれど、衝撃で私は言われた言葉の意味を理解しなかった。目のまゝで行われている暴行も見えていないのと同じだった。ただ頭の中を巡っていたのは、炎が言った『革命』と云う言葉だけだった。

後になって考えてみれば、彼の言葉の真意はそれだけのものではなかった。けれど、人は自分の聞きたいことをしか聞かない。

まさしくその言葉こそ私たちが本当は言いたくて言わなかった言葉、誰もが心に思っていて目を伏せていた言葉、怖くて意識の外へ忘れていた言葉だった。

そして、叩きのめされても眼差しだけが屈しない彼の表情に、私たちは屈辱を受けて生きてきた者の同じ怒りを痛いほどに理解した。奴隷状態であった者の抑え切れなくなった人間としての怒り。殉教のような昂揚感が、崇高感が、私たちの感情を悲劇のように高めていた。

私は、ようやく炎が烈しい暴行を受け、少女が吹き飛ばされているのに気が付き、我を取り戻した。

「いけない！」

勇気を奮って飛び出し、少女を引きずるように群衆まで連れ戻した。それが精一杯だった。一瞬だけ、炎と目が合ったような気がした。

炎、私たち勝つのよ。あなたは勝ったわ。私たちに負けなんかない。だって、正義だからよ。炎の言葉でその確信が頭かにされた。ともかくもそれだけは、事実だった。

あたいを助けてくれた人は警察官たちに叩きのめされ続けた。鼻から血が噴出し、口は真っ赤だった。髪は乱れ、服は裂けた。

「蛆虫め、蛆虫め、薄汚い泥棒野郎め、異教徒、淫売の息子どもめ、汚らしい奴ら、貴様らの生まれた地獄へ帰れ！」

警察の一人がサーベルを抜いた。

「やめてえつ」

あたいは思わず叫びを上げた。制止する腕の中でもがいた。

警察官がぎらりと光る刃を振りかぶった。

あたいは飛び出そうと足をばたばたさせた。あたいを抑えている女の人在必死で止めていた。でも、その人も悲鳴を上げて駆け寄らんばかりだった。

殺されてしまう！「炎おおつ」女の人喉を裂くような凄惨な叫びを上げた。

療　　々が吾の名を絶叫するのだけがなぜかはつきり聞こえていたのを記憶している。
だが、それだけだ。自分は死んだと思った。それは間違っていた。

吾と警察官との間に、気附かせる暇も与えず飛び込んで来た男があったのだ。そいつが抜剣し、警察のサーベルを受けている。

「ぎえええつ」

汚れた軍用外套をまとった男は気合とともに警察官のサーベルを払い落とした。道路に転がった。

黒い警察の顔に畏怖があった。吾は救ってくれたその男に見覚えがあった。べ裂だ。自治州軍の曹長で、よく酒場で見かけて話をしたこともある、ぼさぼさの髪と無精髭とがトレードマークのような男だ。

いれっ
べ裂が警察官に言った。

「市民に暴力を振るっちゃいかなあ。発砲禁止の主旨は非武装の民衆に対して武装した国家権力が殺傷を行ってくれるなよと云うことだぜ。剣ならばよいと云う意味ではない」

警察は頬を震わせていた。

「治安維持活動を軍は妨害するのか。噂どおりなのか」

いれっ
べ裂は薄笑いを浮かべた。

「何の話だ？」

おまえの為におまえの穿き違えを正してやったんだぞ。それとも警察は名誉ある俺たち自治州軍を愚弄するのか？」

言われた警察官は黙って自分の仲間らを振り返った。警察同士で互いに顔を見合わせる。遂には警察の一人がべ裂などいなかの風で言った。

「さあ、遅れを取り戻せ。配置に附くのだ」

その場を去って行った。

歓声が上がった、警察への野次が飛んだ。御祭りのようにどよめいた。

いれっ
べ裂が吾に顔を向けた。

「無茶をするな、炎。そもそもこの騒ぎは何だ。労働争議は起こさない約束だった筈だ」

「ああ」吾は埃を払いながら応えた。「こうなっちまった。仕方ないのさ」

いれっ
べ裂は鼻尖で笑って見せた。

「仕方ないのは確かだな。どの道こうなったら、あっちこっちで事が起こるだろうな。覚

悟はあるのか、皆は」

「分からない。分からないんだ、べ裂。だが、もうやるしかないだろう」

いれっ
べ裂は剣を鞘に収めてウインクした。

「そうだな」

さふらう

「参廊」

だが、おれは声をかけられても振り返らなかった。

叛逆者炎を置いて去って行く軍の異端児べ裂の姿を目で追いつづけていた。

奴は民衆が「べ裂」「べ裂」と歓呼する中を厳しい表情で突つ切つて消えた。おれにはその表情の意味が解る。

軍には民衆の味方になる考えなんてない。曖昧なのだ。だから、独り突つ走つて群衆に期待を与えたことを苦く思っているのだ。

だが、離れた場所で騎乗からこの出来事を目撃していたおれには分かっていた。この事件は電撃のようにたちまち人民の間に噂となつて広まるに違いない。軍隊が味方して警察から民衆を守ってくれた、と。それは暴徒たちを百倍も勇気附けるだろう。

時代の転換する巨大な音声を聞いたような気がした。大地がぐらりと動いたのを感じた。焦慮がおれを襲った。

そうなったときの自分の居場所を確保するべく本能が働き始めていた。例え叛逆者と交わってでも、パリヴォ独立の為には生き残らなければならない、それが神のおれに与えたもった使命からだ。

この思いは、あの蒼い双眸の女の記憶とともに、おれを湧き立つような気持ちにさせた。

聖なるオーデ教徒にしてノルティオ人、聖下ミックス騎士修道会、聖殉教騎士、私、舎却しゃきやくはここに真実に於いて録す。しる

この瞬間、まさに革命は産声を上げたのであった。後に革命会議議員となった参廊さんろうの推察どおり、噂は燎原の火の如く民衆の間を広まった。折りしも女子紡織工の動きに呼応していくつかの工場でストライキが起り始めた時刻である。十月二十七日、午前九時を過ぎた頃であった。燎々が最初の叫びを上げてから、僅か二時間半を経ない時間である。

工業地区の工場でいまだ行動を見合わせていた労働者組織でも論議が再燃した。そして、ストライキ、抗議集会が全所で勃発し、その数は九万に及んだ。それが当初はパンを求める長蛇の列と同等であったことを思えば、如何にも奇異の念に捉われる。

運動はストライキからデモへ集会へと発展し、旧市街の一般市民をも巻き込んで街頭で警察との乱闘となった。もはや特別公安機動部隊員では制し切れず、一般の警察官も大量動員され、知事は非常事態宣言に踏み切り、軍の出動を要請した。

こうした経過を経るうちに運動スローガンは「パンを！」から「戦争反対」「真の共和制を」と云う声が変わった。

旧市街のネフスキ通りでは一般市民によるデモが起り、隣のラテン地区では学生の抗議集会が決起された。

既に日常的に州都の警護にあたっているクルウザフ人騎馬兵は殆どいるだけで何もしようとはしなかったが、これほどまでに広域に大量の人間が動くとなると、そのサバタージュにも限界があった。この頃になると、各所でクルウザフ兵は群集に襲いかかり蹴散らした。だが、群集はまたすぐにどこからもなく湧き上がるように出て来て、執拗に集会し行進し、訴え、警察を罵倒し、軍隊を諭そうとした。

酔っ払ったノルティオ人龍騎兵が民衆を槍で打ち据えたりもしたが、それだけであった。軍は瞭かに状況を窺っていた。

正規軍のうち、パーリ人らによる精鋭部隊がシルヴィエの侵略に加担させられ、外国で戦争している為に、内地にはパーリ人以外の守備兵や急遽徴兵された予備兵しかいなかったことも大きな理由であろう。

將軍は十年以上まえから、市民の暴動に備え、緻密な計画を練っていたが、民衆の動きは余りに速く、軍幹部は会議の暇さえ与えられず、計画は留保のままであった。

州政府は正午過ぎには州都防衛委員会指令を発動し、発砲を認めている。緊急対策会議が予定されていたが調整の為に開始時刻はその日の午後四時であった。だが、その開催決定の為された午後0時の二時間まえに、州都六区全てに於いて各所各所連鎖的に労働運動組織、一般市民、学生らによる抗議運動が起こっていた。

これに遡る午前九時二分、私は同じノルティオ人で弁護士いさうの彝齋肯いさうの許へとラテン地区カルチエ通りを急いでいた。

彝齋肯は日頃から労働者救済に社会正義の最高意義を見出し、その法的知識を基に彼らを導いてきた影のリーダーであった。私はこの非常事態を鑑みて、彼とよく相談し、場合

によつては聖殉教騎士の仲間内で有志を募つて、人民正義の為に力を貸そうと思案したのである。

カルチエ通りも既に騒々しくなり始めていた。

斯ような状況であるにかかわらず、私は今一瞬すれ違つた男がふと気になった。振り返つた。

全身を白っぽい布で覆つて踝さえ見えなかつたが、靴音で軍用の革長靴であることを直感した。布の隙間から覗かせる深い双眸が奇妙に私を捉えたのだ。

男は私が振り返つたことを察知しているに違いないのだが、背を向けたまま早足で歩き、こちらを向こうともせず、ネブラスコ通りを左に曲がつて見えなくなつた。

「気のせいか」

私は再び先を急いだ。

「あの人が行くわ」

私は窓辺に寄り添つた。いつもではないけれど、彼は必ずここを通る。優しく肩に掛かる柔^{やわ}和らげな真つ直ぐの金髪と純白のマントとを靡かせ、肩に揺れる飾り房、胸襟に華やぐレース飾り、蒼いスウェードのブーツ、金の拍車、鰐広の帽子に羽飾りを附けて、あの聖殉教騎士の御方は、颯爽と街路を行かれる・・・今民衆は煮え滾っている。コギタ王国のような反乱が起これば、私たち貴族は亡命離散の憂き目に遭う。そうすれば、もうあの御方の御姿を見ることもできなくなる。せめて、神よ、そのまえに御名まえだけでも・・・

「シャルル」

「ここに控えております、憂^{ゆう}貴様」

「御願ひ、彼の後を追つて」

家令は目を丸くしたが、恐らく私の素振りを久しく見ていたせいであろう、再び慎ましやかな表情に戻つて、黙礼した。

「承知いたしました」

私は家紋の入った書簡箋に短く文を記してシャルルに託した。

無表情な機装甲戦車。聖教の祖にして一〇三一年まえに生きた真実の聖者イキに因んだシルヴィエの紋章を無言で威厳し、一二〇mm主砲一門を備えて城壁のように列し、監督府を囲む。

素手同然の哀れな市民蜂起ぐらいでは近附けるものではない。メルカル型戦車の特徴はモジュール装甲に因って本体が平べったく見えることと砲台の異様な薄さにあるが、それによって鉄面皮な怪物は余計クールに見えた。

士官執務室に戻って思う。あのような兵器に瞬く間に殺されて物質と化してしまう人間存在とは、いったい、何なのかと。殺伐としてひたすら現実でしかない乾いた事実のまえでは空言にすぎぬ哲学的な問いだ。自分は思い直し、留守のうちに机上に届けられていた子羊革のブリーフケースを手にした。中から書類を抜き出し、閲する。軍曹が銀製の茶器セットを持って入ってきた。

「ありがとう」

珈琲の匂いを嗅ぐ。格子天井の画を眺めた。

監督府はユヴィンゴ王ゆかりの離宮を改装したもので、少佐の指揮の下に大隊の兵士から給仕や掃除夫も含めて全てシルヴィエからの者で固め、総勢七百五十人を擁するが、部屋数は余りすぎるほどであった。

「爽烈少尉、少佐が御探しでしたが、御連絡入れましょうか」

自分は間が欲しくてカップを片手に窓辺に寄った。だが再び、人間の手になる殺人兵器の群れが目に入っただけであった。これを眺めて勇壮の気持ちを鼓舞され昂揚する、兇戯じみた奴らの脳神経系の組成が知れない。

「そうだな。十五分後に伺うからと伝えてくれ」

軍曹は受命の返事をして、さらに言った。

「御出かけだったのですか」

市街を視察することがこの場合不自然であるとは思われなかった。

「そのとおりだ、軍曹。大尉あたりから報告書の作成を言い附かることを考えて先手を打ったのだ。早いうちがよいと思ってな。」

無論、市民らには気附かれぬよう行動した」

ただし一人、カルチエ通りで聖ドミコクス騎士修道会の聖殉教騎士が自分を訝しげに振り返ってはいたが……

「そうでありましたか。……いや、余計な御話をしてしまいました。失礼いたします」

「うむ」

軍曹が扉を閉めるのを確認すると、急いで書類に目を通した。出かけるまえに依頼しておいた様々な事項が要領よくまとめてあった。殆どは本日午前十時現在の内容であった。中には十時三十分現在のものもあった。今十一時一分か二分である。シルヴィエがなぜ世界一の科学技術を持つ国なのかはこれでよくわかる。ガリレオ人である自分は思いに沈みそうになった……が慌てて浮上した。

書類の内容は自分の考えを裏附けるものであった。

デモ行進は既に蜂起になりつつある。モスコールの全地域で民衆が怒号している。ストライキを始めた労働者は二十万人を下らない。商店も営業を止め、職人も店を閉じ、土建屋にも人夫がいない。汽車も馬車も止まった。高等学校以上の生徒らも学生連盟を中心にストライキに合流している。各地で街頭集会が行われ、演説が警察との衝突に中断されながらも、ゲリラ的に出没する。そう、警察は総動員され、鞭や警棒に訴え、取り締まっているが、人々は一時的に解散するだけで、すぐ再び結集する。

軍隊がどう出るかが大きな要であろう。

実際、特別公安機動部隊の出動から、一時間後には、一部の軍が特別任務と称して街に出て行ったが、その態度は全く曖昧なものであった。将校らは下級兵士らを統制できなかった。

工業地区のニエフ大通りではクルウザフ兵の列と労働者の群れとが遭遇したが、将校が騎馬で道を開くと後の兵隊も細い紐のようにその柱廊を分け入ったと云う。しかもクルウザフ兵の何人かは微笑んでいたし、ここでもまた愛想のいい目配せを、意味ありげなそれをする者らがあったと云うことだ。

その目配せは、ただ、兵隊へ向けて、おまえらは仲間だ、と嘯きたいが為のものだ。実際には、そうではないのにあたかもそうであるかのように振舞いたいと云う民衆側の心理によって始まっていた。

だが、友好を示すことは無駄ではなかったようだ。兵士の中にはそれを真似する者が出てきたからである。兵隊たちの中でも、ちよつといかした行為とされるようになっていた。

それは次第に、下級兵士ら、彼らも一庶民にすぎない兵士と民衆との、合図のようなものになってゆき、何の密約もないのに、仲間であるかのような目線で挨拶を交わすようになっていた。これは既にコミュニケーションの始まりと言える。

軍隊はどこもしつこく民衆を追い払おうとはしなかった。やっている振りぐらないものである。民衆は散開しては、二度三度四度と戻った。その繰り返しは兵士と民衆との接触の機会を作っただけだった。

慌てた政府は、軍の投入規模を爆発的な勢いで大きくしたが、結果は同じだった。若い兵士らは群集に囲まれ質問に答えた。いや、話し合いにさえほんの僅かながらも参加するようになったのだ。

或る部隊は横列して道を塞いだが、デモ隊は馬の下をくぐった。隊長は目を丸くしたが、兵士らは民衆を妨げなかったのだ。下級兵や地方出身のクルウザフ兵らは嘶らかに家に帰りがっていた。墮落した政府によって送り込まれ、いよいよに使われて明日も見えず、あちこちで民衆と衝突させられてきた彼らは嫌気が差していたのだ。

自分は書類を置いた。しかしながら、情勢は不透明だ。

現に民衆はこの監督府に向かっていると云うが、警察の阻止とシルヴィエへの恐れとによって、今一歩が踏み込めず、橋のまえには人影すら見えない。

珈琲を啜り終えると、書類を薄いファイルに綴じて少佐の部屋へ向かった。

「レオン・フランシスコ・デ・セヴィーリヤ殿の話は知っているな」部屋に入るなり、少佐の傍らに立つ補佐官から質問をぶつけられた。少佐は厳として腕を組み、坐っている。動揺が烈しく内側から自分を突いた。何か言わなければ。だが、言葉は刹那に

は出す、少々遅れを補佐官が追い討ちする。

「大枢機卿アクトステイウスの長子、レオン殿は、御父君の葬儀後、姿を消された」当然だろう。宗主にして君主である皇帝ジュダスに次ぐ権勢を誇ったアクトステイウス陛下亡き後、陛下の政敵であった若き策謀家イヴィルが筆頭の大枢機卿となり、かつての政敵の息子に対して何を企むか知れぬのだとなれば。「我ら軍人が、一人残らず亡き大枢機卿を敬愛していたことは、少尉、君も知っていよう」そのとおりだ。そして、軍人は皆イヴィルが嫌いだ。「しかしだ。皇帝の勅命がある。レオン殿を逮捕し、帝都へ送還せよ、と。

分かるな、少尉？」

「勅命の主旨は周知しております。レオン殿には謀反の嫌疑がかけられております」「そのとおりだ。誠に遺憾だが、我らが崇拝する大枢機卿の御子息はセヴィーリヤ家の存亡を賭けて、一か八かの行為に出られたのだ。如何せん、現体制下ではイヴィル師の肅清に遭うことを慮り、いつそ国家そのものを転覆し、自ら帝位に即いて活路を得ようと考えられた・・・と云うことだ。そして、反乱の拠点を、この擾乱の地ユヴィンゴに求めた・・・仲介者を通して、密かにこの地の反政府主義者と繋がりを持った。

我々は帝都からそのように聞いている」

自分は黙った。

補佐官が眼鏡を指先で押し上げる。

「ところで、^{そうれ}爽烈、君は最近、不可解な無線信号を帝都へ送っているようだが」そう言って書類の束を差し出した。自分が送った電文の写しであった。「どうか、この意味を解説してもらえないか。一見平凡な文章のようだが、実に暗号のようでもある」心臓が凍りついた。

十五分後に自分は一人の少尉に牽かれ、二人の曹長に挟まれ、廊下を地下の拘留室へ向かっていた。

「馬鹿なことをしたな、^{そうれ}爽烈」

同僚の少尉が言った。彼は生粋のシルヴィエ人だった。自分は応えた。

「変わり者だな、おまえは。イヴィルが好きと見える」

「ふん。好きなわけではない」

「だったら、なぜ従う。おまえは軍人だろう。官僚か？」

「愚かなことを。任務だ」

「間違いは糾されなければならない」

「軍や警察がそんなことをしたら、意味がない。我々は組織であることが命だ」

「だったら、軍も警察も国家も滅びてしまえばいい。間違ったことをしておめおめ生存することに何の意味があるのか。分かるか。自分は存在意味を問っているのだ。本当の正義を、だ。

おまえの言うような大義名分など愚劣だ。国家は偉大だ。だが、本来の面目を失っては、生き恥に等しい。

その為にも冷静で理性的な批判は不可欠なのだ。国民を拷問するような醜怪な国家ならば、国家の名誉の為に潔く自滅してしまった方がいい。

単純明快だ。

千年の繁栄はシルヴィエ聖教を墮落させた。

だが、自分は共產主義も無政府主義も非現実的だと思う。民主・自由主義も巧みな言葉の綾にすぎない。本当の理想はそこにはない」

「御託はたくさんだ。貴様は好きにすればいい。おれは任務を遂行する」

目だけを動かして周囲に他の人間がいらないことを素早く確認した。

「では、そうさせてもらおう。おい、曹長、リシュティン少尉を抑えろ」

二人の曹長は莫逆の友だったのだ。自分はすかさず喉に拳銃を突けて批判能力のない馬鹿な坊やを黙らせた。無知は既に罪である。

「殺しはしない。おまえは、ただ、愚かなだけなのだ。だから、少し大人しくして貰おう」

リシュティンに猿轡をして縛り、倉庫に封じた。自分は言った。

「さて、一刻の猶予もならん。自分らも蜂起する。召集をかける。少佐室を襲撃する。ところで、外の情勢に変化は？」

ルシアン曹長が応えた。

「パリヴォ自治州政府のミロ議長が警察の発砲について報告し、連邦政府と監督府とに同意を求める親書を提出しました。それとパリヴォ自治州軍の全面派遣についてもです。ついでに言えば、連邦政府からもこちらに連絡がありました。

少佐は不干渉の前提を確認しながらも同意し、我がシルヴィエ軍に協力の用意がある旨、回答した様子です」

「まずいな。レオン閣下の到着は？」

「明日中には、と連絡がありました」

「そうか。こちらの動きが露呈している以上、あとはもう革命政府を樹立させて、レオン殿を受け入れる以外にはない。

それを基盤に叛旗を掲げ、全シルヴィエ軍に呼びかけて、クーデターを起こす・・それが構想だからな」

「分かっています」

「普齊子爵を通じて、労働運動家の指導者に情報を入れるよう手配してくれ」

普齊ふせうは自治州の参与議員で自分らと内通しているガリレオ人貴族であった。

「既に手は打ってあります。子爵から、指導者で弁護士の彝齋いさう肯と云う者に連絡が行くようになっています」

「よし。

ともかくもいざとなれば、自分らで自治州軍と戦おうぞ」

「命に賭けて！」

ライオネル侯爵邸を訪問中に火急の用件だと言って従僕そうれが爽烈少尉名義の伝文を持って来たとき、まずいときとは思ったが、内容を確認めて致し方ないことと納得した。

折り返し彝齋いさう肯宛の手紙を渡し、発たせてから、侯爵の待つ書齋に戻って見事な蔵

書の数々を覽し、頃合いを見計らい、暇を告げ、優雅に湾曲する大理石の階段と欄干を巡らせた吹き抜けとで、バロック調を奏でる大広間に見送りされつつ、従僕に外套を羽織らせているとき、侯爵令嬢の憂貴様ゆうきが降りて来られ、ぼくと会うとひどく驚いた様子をされたのには、何かを知られてしまっている予感を覚え、不安になった。が、杞憂であつた。

「普齊子爵ふせう、いらしているとは思いませんでした」

「これは。御令嬢に御拝謁でき、光栄の限りです」

彼女は減多に姿を見せないのだ。強あながち御世辞でもない。白絹にチュールを重ねて霞のよう、同じ素材のフリルとリボン飾り、ドレスの細やかな襞、光栄と言えてしまうのも無理はあるまい。

「御父様、私が子爵を御見送りいたしますわ」

これは、これは。本当に珍しいことだ。気難しい深窓の御令嬢が。ぼくが訪ねても偶然に遭う以外は、意識して姿を見せたことさえ一度もないのに。まして見送りなどとは。

「御嬢様、今日は誠に幸福の至りです」

執事の声でドアマンが開く大扉を抜けて、円柱と石段とを車寄せへ向かう。ぼくの壮麗な、ハーグ公国産四頭立てに乗り込もうとする刹那、ずっと言いたげにしながら無言だった令嬢がようやく口を開く。

「子爵様」

「何でもございましょうか、マドモアゼル」ぼくは疑わしさを秘めて問い返した。

「けてして他意はございませんの」

「何のことでしょう」

「今日、貴方様の御従者が彝齋いさう肯と云う弁護士の御宅を訪ねました。我が家の家令が見たのでございます」

ぼくは少々焦った。

「御嬢様、貴方は、いったい」

「いいえ。けてして何かを詮索しようとしているのではございません。御願いですから、最後まで聞いてくださいませ」

「・・・よろしい。で、何を見たのでしょうか、御宅の家令は」

「何も。ただ、私が知っておりますのは、その御家を私同様、オーデ教徒である、聖ドミコクス騎士修道会聖殉教騎士の御方が、御一人御訪問されたこと、それだけでございます」

ぼくは目尖が見え始めて安堵するとともに、自身の眼差しが優しく、かつ狡猾な色へ移ろうのを感じた。

「なるほど、さぞや秀麗な男子でございましょうな。それで」

「それで・・・私は、さる事情がございまして、何としてもその御方の御姓名を知りたいのでございます」

「ふうむ。困りましたな、マドモアゼル。ぼくは確かに弁護士いさうの彝齋肯と云う者を知つてはおります。さしたる附き合ひではございません、身分が違いますから。しかしながらその彼が附き合っている男ともなりますと、一向見当が附き兼ねますな。誠に

残念ながら」

「後生でございます。よく御考えになつてくださいませ。何か一つくらいは御心に当たることがないとも限りません」

「しかし・・・」

「御願いでございます、子爵様」

「分かりました。調べて早急に御連絡いたしましょう。何、それほど御時間もかかりますまい。すぐに使いの者を遣らせましょう。早ければ今日の夕暮れにでも御知らせできるかと」

「ああ、子爵様、心より感謝申し上げます」

「さあ、それではぼくも急ぐ身ですので、これで失礼いたします。御父上に宜しく」

馬車は颯爽と駆けた。

数分行つてから、車内で待つていた騎士に向かつて、ぼくは懶惰な艶を放つサテン地のクッションに埋もれながら言つた。

「やれやれ、困つたものだ。色恋沙汰とは何と面倒なことよ。あの御令嬢が、まあ、夢中で取り乱すことと云つたら。」

さて、コルドバ君、情勢を教えてくれないか」

寡黙な騎士は眉一つ動かさず応えた。

「御覧のとおりですよ、子爵」

見れば馬車は群集に阻まれ思うように進めない。怒号や物音で凄まじい喧騒であつた。

「おいおい、大丈夫か、この馬車は」

「御安心ください。これでも安全なルートを行つております。ここいらの衆は烏合にすぎません。手を出す者はありません」

「ふん。だが、見込み違いと云うこともある。今日のこの騒動がいい例ではないか。ともかくも情勢を」

「かしこまりました」

一通り聞き終えて、ぼくは指示を出す。

「湖上城のラグナレク伯爵へ連絡を。マールとの協定を急こう」

ぼくらは南大陸の超大国マールと密通している。レオンの叛逆が失敗したときは、虎視眈々と我が北大陸を狙うマール皇帝^{ラベン}羅班の野望をシルヴィエ帝国への対抗力として保身の為に利用するのだ。ただし、逆に食われぬ為には相当の手腕が必要となるが・・・

シルヴィエの流竄の貴人となつて、帝国内叛逆勢力の象徴ともなったレオンとの間を仲介してくれたのもラグナレクだったが、マール皇帝との密約を仲介してくれたのもまた彼だった。底知れぬ男だ。

ぼくはコルドバに念を押した。

「いいか、マールとの件は、彝齋^{いさう}肯らには知られてはならんことだぞ。純粹な男だからな。必ずや猛反対する」

革命勢力を利用して実権を掌握する。単純だが、それがぼくの当面の野心だ。弱小貴族でいることにはもううんざりだった。正直、ぼくなど富裕市民^{ブルジョワ}どもにとっても敵わ

ないのが実情だ。

世の中が顛覆してくれた方が愉快だ。

コルドバへ続けて命じた。

「それから、レオンがモスコールに着いてからのルートを至急、新たに確保するんだ。従前の計画は駄目だ。よし、以上だ。

では、まず彝齋肯の家へ行こう。コルドバ、君はここで別れて何とか湖上城まで行つてくれたまえ」

「御意」

「何だ、気の進まぬ顔だな、君が珍しい。この騒ぎに恐れをなしたか」

「いいえ、滅相もない。ただ、・・私はあの伯爵がどうにも苦手なのです。得体の知れない、あのラグナレク殿が・・」

「ふん」

ラグナレク・ノアイユ伯爵、湖の中央に屹立する奇岩ハンベルのうえに聳える城の主、古き高貴の家系、夢、魔の孕ませた子と言われた貴族・・

ぼくはコルドバを見送ってから思いに耽つた。得体が知れない。確かにそうだ。だが、この世にあてになるものなどない。ただ、あらゆるリスクを想定して保険を掛けておくだけだ。世界広しと言えど、南北大陸の両超大国、シルヴィエとマールに二股かけるのは、ぼく独りであろう。

「到着です」

馭者の声がした。ぼくは素早く降りて玄関の呼鈴を鳴らす。すぐに小さな広間だった。暖炉の傍に彝齋肯ともう一人、帯刀した騎士とがいる。

例の聖殉教騎士だろう。

「子爵」

ノルティオ人らしい白皙の額に青い真摯な瞳でぼくを迎える彝齋肯には昂ぶる緊張が窺われた。ぼくは敢えて穏やかさを強めた口調で言う。

「分かっているさ。計画を早めよう。」

もしも自治州軍が革命側に動くならば、決断のときだ。それまでは、民衆と近附きすぎず離れすぎずにいよう。卑怯なようだが、大願成就の為だ。ときには非情も必要なのだ。ぼくらが碎かれれば、民衆に望みはない。

ともかく何もせぬのでもなく、出すぎもせず、軍の動きを窺うのだ。

それと幸か不幸かレオンは明日着くと云う。もはや計画していたルートでは不十分だ。この非常事態に堪える方法を今至急検索させている。まず問題ないだろう。・・なかなか日にちを教えてくれなかったが、もう少し早く知らせてくれれば、いくらか違つたろうに・・・実際、向こうでも定かならぬものだったのだろう。何しろ、極秘中の極秘事項だ。

シルヴィエ駐在軍はすぐには問題となるまい。しばし当面はな。なぜなら内紛が起ころからだ。最低でも時間稼ぎにはなる。その間にレオンが駐在軍を掌握できれば上出来なのだが。シルヴィエ大枢機卿イヴイルは自国の軍からは忌み嫌われている。余りに権謀術策的な政治家だからね。千年の歴史を誇るシルヴィエは繁栄の頂点にありながら、その腐敗を憂えて原理主義に還ろうと言う声が久しく聞かれているのだよ。

愛国主義者、特に軍人に強い。レオンは風雲急を告げて、たちまちその悲劇的なシンボルとされた。けて時勢は虚しくはない。

シルヴィエは余りに官僚的な時代が続きすぎ、現場の軍人の心は乖離している。原理主義希求の要因はそこだ。人間は人間的な欲望と気高い理想とを混ぜこぜにして生きるものなのだ。全くどちらか一方と云うことは意外に少ないものだ。

斯ように物事とは常に複雑系的にあるもの、絶対に形而上学的ではない。しかしながら、ぼくらは概ね形而上的に物事を認知する。

民族、国家、宗教、いやはや。

家族を虐殺された者はその民族を、国家を、宗教を恨む。当然だろう。だが、指導者や実行者などの当事者に限定されるのが本来妥当だ。ところが、実情は違う。被害者側は相手の民族、国家、宗教を恨む。それは虐殺者が平気で虐殺を行えるのと同様で、相手を自分と同じ一人の人間と見られなくなった状態だ。

現に虐殺にあつた者らへこんなことは言えないが、人間の基本構造は皆殆ど同じなのだ。誰が何と言おうと常にこの事実は厳然と聳えている。

まあ、そこまで言わずとも、常識的に考えれば、その民族が、国家が、宗教が、丸ごと悪辣であるなど云うことがあり得ようか。

非現実的、非科学的、夢、空想、誤謬だよ。民族、国家、宗教などと括られてはいても、事実は人間の複雑系的集合体なのだ！

哀しいかな、人間の感情はそうはいかない。それがまた人間なのだ。まるで、仕組まれたかのようにだ！　そう思えば、警察どもの民族主義的な頭の硬さも案外現実的なのだ。

いやはや。

・・・余談だつたな。

ところで、彝齋肯、その騎士殿は信頼してよいのであろうな」

「聖ドミコクス騎士修道会については御存知でしょう。その聖殉教騎士、我が友にして革命の盟友、舍却です。御安心ください。十分信頼できることは保証いたします」

「舍却です、子爵。御目にかかれて光栄です」

「ふん」

彝齋肯が補足した。

「舍却は聖殉教騎士の有志を募つて、革命勢力へ加担する決意なのです。ただ、今の時点でそれが尚早か否か判じ兼ねていたところです」

ぼくは所見を言った。

「まだだ。」

まず第一に募つては警察側に察知されるだろう。だが、かと言って、彝齋肯、もはや尚早という言葉はない。軍の動きを見定めてから、とは言うものの、今この波に乗らねば、事が成就したときに失墜の憂き目に遭うと云うこともある。表立ってはいかんが、動いていたと云う既成事実が必要だ。

ぼくは舍却には獲物を狙う豹のように有志を募つておくことだけ勧めておこう」

「と言われると、子爵、貴方はこれが革命となり、なおかつ革命が成就されると御思

いですか」

「物理的な情勢は圧倒的に不利だ。だが、何かが違う。この空気だ。民衆の気運だ。これは事が成る事前の徴だよ、彘齋肯。いささか矛盾するようだが、様子を見てと云うのは、全く静観しろと云う意味ではない。今も言ったように藪に身を伏せる獣のように爛々としていると云うことだ。

ときに君は現実があたかも夢であるかのように感じたことはないか」

「と言いますと」

「何か心の織りなす綾ではないかと」

「現実には現実でしかありません」

「だからこそだ。なぜ現実なのか。誰もそれを知らない。ならば、ぼくらは何をして
いるのか」

「子爵、怯まれたのですか」

ぼくはその侮辱を笑みで返した。彼の直情さを内心で笑って。怯むだと？ いつも
さ。だから、ぼくらは全力を尽くすのではないか。

「いやいや、聞きたまえ。」

例えば、君が庶民ではなく、ぼくが貴族ではなく、全く別の付き合いもあり得たわけだ、いや、現にそうなのかもしれない、何の屈託もないただの友人であったとかなふとそう思うのだ。そんな空想が湧くのだよ。だが、ぼくらは今この現実を生き
て。君の言うとおりだ。しかし、ただ、それだけにすぎない」

バリケードを造っていると、誰かが言った。「まるで戦争だな」吾は応えた。

「そうだ。おまえはそのつもりじゃなかったのか。おまえは何を期待していたのだ。
流血を見ずに、この事態のかたが附くとも思っていたのか。

吾だつて死にたくない、だから戦いたくない。平穩無事を願うただの平民だ。だ
から他人も傷つけたくはない。だが、他にどうしろと言うのか。どうしようもないで
はないか。

おい、そっちはもつと高く積み上げろ！」

「あいよ！」バリケードのうえに立って、ハルの奴、元気のいい声を出しやがる。す
っかり有頂天だ。そうかと思うと凄く神経質になっている奴もいる。どちらかと言え
ば、それが普通だろう。そう、殆どの奴らは不安に打ち勝つ為に必死で強張っている。
当然、吾も同じだ。

マクシミリアンが黄土色の髪を乱して来たとき、それはさらに煽られた。

「どうした、マク。そんなに慌てて」

「大変だ、炎！ 今情報が流れてきたんだが」

「何だ、早く言え」

「発砲だ。とうとう警察の奴ら、発砲の許可が下りたんだ」

分かつていたことだが、改めて耳にすると腹の底から畏怖が込み上げる。吾たち
の武器は棒切れか投石ぐらいなものなのだ。

「予想どおりのことだ」

「どうする、炎^{ほの}」

「戦う以外にない。違うか？ 急いで各所のバリケードに連絡するんだ。おまえ一人で行くとするな。手分けして五、六人で行って、それを聞いた奴らがさらに五、六人で伝達に行くようにするんだ。行く者は最初大きな範囲で散るように分けて、最後には小さい範囲になるよう、適当な分担を指示するんだぞ。ただし、重複することには余りこだわらな。それよりスピードだ。多少の無駄よりは速さだ。

併せて高い建物の出入り口はあらかじめ制して置くよう伝えろ。屋上から狙うスナイパーになれちゃ敵わない。

それから各所が馬で走りにくくなるよう、物を散らしてるか、行きながら確認しておいてくれ。足りないところは指示するんだ。機動性を奪うことが、重要だ。

それから、・・・いや、ともかく行くんだ。後は追って指示する。各地域で工夫するようにも言えよ。では、さあ、早く行って来い！」

「分かった、炎^{ほの}。任せてくれ、おまえとならやれる気がするぜ」

マクシミリアンは元気づいて叫びながら駆け出す。少女を助けて警察と揉めた一件以来、妙に周囲に奉られている。いつの間にか指導的な発言をせざるを得なくなった。皆勘違いしている。吾^{おれ}は妻^{るーじん}半^ん从^{じゆう}を見捨てた男なのだ。

もし逮捕されたなら、第一人者として酷い目に遭うことになるだろう。だが、民衆を捨てても置けない。ただ、御袋の身だけが案じられた。駆けつけたい、家がどうなっているのか知りたい。だが、仲間を見捨てることはもうできなかった。

「あなたが炎^{ほの}ですか」

気が附くと一人の少年が立っていた。この混乱のさなか、まるで英雄でも見るように吾^{おれ}に会いたいと言って来る奴ら、または名乗りを上げて面前に立つ奴ら（特に地区地域の労働運動指導者や革命家気取りの連中がこの手合いだ）は多いが、こんな奴は初めてだった。

その顔が凄かった。パリリ人には違いないが、見たこともないような異様な風貌で、顔面の半分だけが青い龍の刺青で覆われている。しかも生々しい緋髪を靡かせていた。出で立ちは貴族のような服装なのに、瘋癲^{おれ}のように着乱れている。

その面で黙って微笑を浮かべたまま、吾^{おれ}を見ている。

「おまえは誰だ？ 何の用か」

そいつはもう一段大きく微笑んだ。

「龍^{りゅう}肯^{けん}です。龍^{りゅう}肯^{けん}と云うのが僕の名です。あなたが炎^{ほの}ですよね」

「ああ。そうだが」

「どんな人か見たかった。それだけです」

「悪いがな、龍^{りゅう}肯^{けん}、見てのとおり緊急事態だ。おまえも戦いたいのか。それなら他の連中を手伝ってくれ」

ところが、龍^{りゅう}肯^{けん}は突拍子もないことを訊いてきた。

「どうして革命を起^{おこ}したんですか」

吾^{おれ}は途方にくれた。

「いいか。龍^{りゅう}肯^{けん}、今はそんなことを話しているときではない。負ければ、これはただの暴動だ。

解るか。

それにこれは吾が起こしたんじゃない。こう云うことになったんだ。発端は女子紡織工だ。民衆の気持ちが生端を起こしたんだ。吾一人でこんな大騒動が起こせるものか」

龍背が大きく頷く。こいつは何に頷いているのか。

「あなたの言う意味は解りますよ。でも、あなたが革命だと叫んだから、流れは革命になったのです。皆そう言ってます。僕も見ましたよ、由伽を助けたところを」

「由伽？」

「あなたが助けた少女の名です」

「知らなかったな。おまえは話をしたのか」

「療々と一緒だったので、少し由伽から話を聞いたのです。ここに来てますよ、どうしてもあなたに会いたいと言ってますね」

「何だって！　ここは危険だ。すぐどこかへ連れて行ってくれ」

すると声が鋭く間を貫いた。

「いやよ！」

吾は声のした方に向いて溜息を吐いた。そこにはもう、あの少女が梃子でも動かぬ表情で突っ立っていた。

「あたいは、炎とずっと一緒にいる。革命の御蔭で、妹は病院に入れたわ」

吾は言った。 「革命の御蔭でって・・・」

療々が現れ代わって説明してくれた。

「炎、彼女の妹は病気で臥せていたけれど、貧しくて薬が買えなかったのよ。けれど、あなたの指示でこの騒動の負傷者用について、強制的に病院と医者とを占拠確保したでしょう。だから、私が口を利用して入院させたのよ」

吾は頷いた。

「なるほどね」

由伽が喚いた。

「凄いわ、革命って！　だから、あたしも一緒に戦うの。炎、あなたと一緒にいたいのよ。あなたが心配なの！」

吾は俯いた。そして、承諾した。

「いいだろう。好きにしる。療々、由伽と一緒に後ろの方で投石用に石や瓦礫を集めてくれ」

「いいわ」

二人は行ったが、龍背がまだいた。吾は言った。

「龍背、おまえは吾が革命と叫んだと言ったな。だが、吾の言った意味はこんなことじゃない。

それがどう云う意味なのか、吾の言葉では説明できない。だが、結局、現実の中ではこうなってしまうしかなくなっていた、これ以外のかたちになりようがなかった、それだけだ」

僕は今でもそのときの炎の表情を忘れられない。恐らく彼だけが、彼こそが本当の、唯一の革命家だったのだ。けれど、そのときにはそれを感じてはいながら、具体的な意識としてはいなかった。その後の彼の悲劇的な死と思い合わせるとき、その感情は余計に強まる。

記憶とは不思議なものだ。まるでそれが最初からあったように感じるのだが、思い巡らせると遡って造られたような気もする。ともかくも過去と云うものが、想起する時点ではもはや存在しないせいだろう。

神はなぜ人間をこのように造ったのか。

僕は彼に言った。

「他者もまた、その行動の如何にかかわらず、自分と同じような基本構造を持った、あたりまえな人間なのだと云う自明な事実が気が附け、それがあなたのメッセージだと思いますが」

彼は応えなかった。寂しげに笑って仕事へ戻ってしまった。

『けれど、人間はどのように寛容には生きられない。親兄弟を虐殺された僕にははっきり解る。』

自分の左頬を打たれて右頬を差し出すことはできるかもしれない。だが、家族の左頬が打たれたときに、その右をも差し出せと言うことができようか。堪えられようか。あらゆる理不尽を超越してまで、全てを擲つことはできない。だから、人間には和解がないのだ。だから、結局は今ののように革命と反動とに分かれて争わずにはいられない、この事態を避けられないのだ』

僕はそのときはそう解釈していた。

息を切らしてバリケードに走り寄ってくる若者があった。見張りが叫んだ。「ゲートを開ける！」その若者は学生連盟の代表者からの使いだと言った。証拠に議長直筆の羊皮紙を出した。彼は報告した。

「イマヌエール世記念碑の傍らで演説を始めたアグレガシオン・コンタミナシオン大学の学生会長が騎馬警察（特別公安課の機動部隊ではなかった）の発砲で負傷したが、群衆がたちまち襲って狙撃者を血祭りにした。警察隊の一斉射撃がそれを契機に起こったが、クルウザフ人^{いれっ}裂曹長の率いる分隊が応酬射撃を始めて警察は退却を余儀なくされた」そう云った内容を烈しく興奮しながら捲くし立てると、他への伝達の為に再び走り去って行った。僕ら一同歓呼の声を挙げたが、炎は冷静だった。

「まだ軍隊が味方になったわけではない。単なるスポッ的な出来事だ。^{いれっ}裂には感謝するが、彼とてただの曹長にすぎない。安易な期待を持つな」

僕は納得したが、興奮が抑えられず、そっち方面に出かけようと決意した。ここはまだ平穏すぎるのだ。

それにあの碧蒼の双眸の少女、イキリアと云う名だと療^{りょうりょう}々が教えてくれた、あの少女への想いが抑えられないのだ。

僕はバリケードの城壁を越えた。

数時間まえまで群衆の怒濤と化していたストリートは今では閑散としている。誰もが息を潜めて隠れ構えているのだ。時々遠くで銃声が聞こえた。気怠い正午の日射しの眩さ。現実感が揺らぐ。

僕はデヴィレ川沿いに出ようと考えて、東に進んだ。

耳を劈く銃撃の乱射音が起こった。僕は愕いた。慌てふためく間もなく、通りの角から逃げ惑う人々現れ、突き倒される。

倒れた僕の襟を引っ張る者がいた。引き起こそうとしているらしい。

「何しているのよ、早く、早くってば！」

身体を捻って見上げると、明るい赤毛で濃い蒼の瞳を持ったそばかすの目立つ少女だった。僕は言った。

「そんなに引っ張っちゃ、立てないぜ」

「だったら、自分で立ちなさいよ！」

「おせっかいめ」

同じ角から警察の一隊が現れた。機械のように正確に前列五人が膝を突いて構え、後列五人が立って構える。一斉射撃を始めた。

「うわあ」僕は脱兎の如く走った。

「ちよっと待ってよ、きやああ、置いていかないでよ！」

「早く来い！」僕は彼女の手をつかんで逃げる。

どこを走っているのなんて考えられない。足下を銃撃の粉塵がいくつも立つ。滅茶苦茶に角を曲がり、勘に任せて行先を決める。

教会のある小さな広場に出た。彼女が叫ぶ。

「馬鹿ね！ 何でこんなところへ出るのよ。狙い撃ちだわ！ 信じられない」

「仕方ないだろう、僕はこの街のことは知らないんだ、うわあ！」

弾丸が僕の額近くの石壁を砕いて小片を飛ばす。「あつ」クルウザフ騎兵の姿を見つけた。

「見ろ、兵隊だ！ あそこまで行くんだ」

「大丈夫なの！」

「行くしか、ああつ！ い、行くしかないだろう！」

伏せていた場所から立ち上がって背を低くしながら壁伝いに駆ける。

騎乗のクルウザフ兵が気が附いて馬を止めた。僕は蹄の下で膝を屈し懇願し、訴えた。

「クルウザフの兄弟たち、僕ら民衆の平和的な要求を、正義の戦いを助けてくれ、警察が、飢えた丸腰の僕ら人民を、税金で買った銃弾で殺そうとするんだ。僕らはパンを訴えただけだ。」

御願いだ。助けてくれ！」

クルウザフ兵たちは目配せし合った。

一人の兵士が僕らを罵った。

「とつとと行っちゃえつ」

僕らはその言葉を聞くと、馬の股をぐぐって逃げた。離れて間もなく兵隊たちが警察の中へ突っ込んで行くのが、見えたような気がした。

数百m走っただろうか。僕らはもう追手がなく、後方の争いの音がかすかに聞こえるだけであることに安心して止まった。烈しく息が切れて、二人ともしゃがみ込むと、しばらく喘ぐだけであった。

「あんた、何て顔をしているの！」今ごろ気が附いたか。僕は言つてやった。

「世の中には、こう云う風俗もあるのさ。僕は龍背^{りょうへい}。君の名まえは？」

嘩然と開けていた口をやつと塞いだ彼女が言う。

「あたしは、ヴァルゴ教だけれど、初めて見たよ。そんな顔」

「ヴァルゴか。ガリレオ人かい？」

「違ふわ。アルレリア人よ。樂夏^{らつか}つて言うの。これでも大学生よ。奨学金だつて貰つてゐるわ」

「どこの大学？」

「A. C. (アグレガシオン・コンタミナシオン大学) よ」

「ああ、学生会長が撃たれたところだ」

「そう。情報が早いわね。やられたのは、叭羅蜜多^{ばらみた}よ。でも、腕に怪我しただけ。もう元氣にあつちこつち行つてゐるわ。今度紹介して上げる。あんたほどじゃないけれど、変わり者よ」

「ここはどこだろう」

「見て分らないの。その石垣の下がデヴィレ川よ。目のまえはサン・ジェロ橋じゃない」

川とは逆方向に逃げていたつもりだったが、どうやら回り回つてしまったようだった。結果的には当初の予定どおりと云うわけだ。川向こうと思われる街並みに、抜きん出て大きな、監督府らしき建物の威容が見える。

「なるほどね。じゃあ、樂夏^{らつか}、僕は行くよ。君も早く仲間のところへ戻った方がいい」

「ちよつと、待つてよ。」

この状況で皆がどこに行つたかなんて分らないわ。あんた、どこへ行くの？」

「決めていない。でも、この辺りに来ようと思つてはいたんだ」

「何よ、それ。いったい、目的は何なの？」

「まあ、様子見と、それから或る人を探している」

「誰？」

「言つたつて分らないだろう。イキリアと云う女子紡織工さ。金髪で凄く青い瞳なんだ」

「どうして、男つて金髪が好きなのかしら。女は容姿じゃないわ」

「そう云うわけじゃないさ。ともかく、僕は行くよ」

「あら、か弱い女を置いて一人逃げるの！」

ちよつと待つてよ、あたしも特にすることないのよね。ただ、騒ぎを楽しんでゐるだけ、……ああ、ちよつと、待つてつたら！」

僕ら二人で行くことになった。

「もう我慢ならん。」

警察の暴力を見たか。非武装の人間に、飢えてパンを求める哀れな人々に鉛の玉を無慈悲にも浴びせかけるのだ。

考えてもみよ、そもそもなぜ彼らが飢えているのか。凍えているのか。なぜ為術もなく、医療も受けられず、寒い部屋で、路上で子や親が死ぬのをむざむざ眺めているのか。

全部政府の不正と墮落、自分たちさえよければと贅を尽くすうえにも吝嗇する政治家どものせいではないか。自分たちに有利なように政治を動かしてしまう、大金持ちどもに腐敗のせいではないか。

神よ、御昭覧あれ、それでも立ち向かい、正統な戦いを戦おうとする民衆、貴方の殉教者たちを。

権力者どもは永遠に地獄に落ちる。それはもはや、既に起こった出来事の如く必ず起こるのであろう。

朋よ、今立たなくていつ我ら殉教の騎士は立つというのか。喩え異教徒であろうとも、その難儀を救い、義を尽くすことこそオーデの神の御教え。いわんや、同胞をや。軍隊の動きなど見ておられるものか。

私は立つ。心同じくする者あらば、私とともに戦え」

斯くして聖ドミコクス騎士修道会聖殉教騎士は蜂起した。民衆を先導し、警察署を襲った。

警察武器庫から銃火器や銃弾を略奪した。人々は歓呼の声を挙げて、蒼穹へ向かい乱射し続けた。

「警察は、とうとうやりだしたな。こうなってくると、軍も本腰を入れなきゃならんわけだ。おい、傷は痛むか」

「傷は問題ない。医者もそう言った。」

それより軍だ。士官以上は基本的に民衆を撃つことに抵抗がない。各地域で実際、小隊単位の銃撃体制はできている。列を組んで構え、撃つばかりの状態だ。動きは晰らかに銃撃実行だ」

「本当に撃つだろうか」

「考えたくないが、撃つだろう。一部地域では、民衆の士気が衰え始めているという噂だ。或る区域の指導部はそろそろ終止命令を出すと言う噂もある」

「噂だけさ。もう誰にもコントロールできんよ。そもそも最初から指導部なんてなかったじゃないか。警察の銃撃にも最初逃げ散っていたが、今では戦いを挑み始めている。徴兵の御蔭さ。戦争のせいで、市民にゲリラ戦の経験者がいるんだ」

実際、軍の解散勧告に対して、民衆は投石や瓦礫で応じた。威嚇射撃にも群衆は動じず、嘲笑で迎えた。実弾射撃を行って初めて市民は動くのだが、すぐ近くの建物に身を隠していて、銃が止むとまた出てきたのである。

「少尉殿、レストフ師団長名義で無線が入りました」

「レストフ師団長だと。機械化装甲師団から何の用だろうか」自分は悪い予感を覚えた。

「現在、モスコールから二十kmの地点に到着したが、州都の状況をただちに報告せよと、少佐宛に連絡してきたのです」

驚愕した。監督府は自分らが制圧したので、少佐は執務室に軟禁されている。無論問題はそんなことはない。

「馬鹿な。第二十四機械化装甲師団は百km先のレジナス川沿岸に駐留中だった筈だぞ」

「レオン閣下が極秘入国される情報が漏洩しているのです。勅命により師団が州都に入城する、そう言ってきました」

勅命、皇帝からの命令だ。しかも一人を拿捕する為に一個師団とは。今となつては大枢機卿イヴイルとの協調を必要とする皇帝ジュダスは、狂気の沙汰とも思えるほどに本気なのだ。

最悪のシナリオだ。シルヴィエの場合、一個師団は約二万人である。仮に自治州軍が民衆側に附いて自分らと力を合わせても、せいぜい五千人程度だ。しかも彼らは殆どが戦闘経験のない予備兵らだ。

「誰か、急いで普齊^{ふせう}に連絡するのだ。州都の市門を閉じろと。そうだ、今すぐだ。すぐに行け！」

わたしたちは、サン・ジェロ橋を渡つて西岸に着いた。

「イキリア、このまま行けば、監督府なのね」

ナスタリヤがそう言う声は震えていた。わたしにはそれを慰めて上げることができなかった。なぜなら、前方に兵隊たちがいて、わたしたちの行く手を塞ぐように横列を為しているのが見えたからだ。

兵士たちは銃を構えていた。けれど、わたしはもう、怯えなかった。その半分は怒りのせいだった。烈しい怒りのせいだった。

一緒に歩いて進んでいた人たちは一斉に悲鳴を上げて、伏せたり、隠れたりする。わたしは構わず歩いた。ゆっくりと。何人かの男たちがわたしの数歩後を恐る恐るついて来る。

兵隊たちの表情はよく分からない。非情に狙いを定めているだけのようでもあり、逡巡しているようでもあり、無表情のようにも怒りに満ちているようにも戸惑っているようにも、そして、怯えているようにも見えた。

わたしは言った。「さあ、どうするの？ 撃つの？」

無表情だ。何も答えない。兵隊の列の、わたしから見て右方に、指揮する小隊長（多分、少尉だろう）がいた。恐らくは彼の声で銃撃を始めるのだ。わたしの喉が息を呑んだ。兵士たちまであと二十歩ぐらいだ。後をついて来ていた男たちは、いつの間にか歩が緩み、随分と離れていた。

「さあ、どうするのよ」

思い切つてまた一步進んだ。もう一步進もう。そして、進む。少尉がわたしに向かって七歩歩いた。

「さあ、どうするの」わたしの声が震えている。立っているのがやっと。

少尉の返答は「通れ」全く無表情で、投げ捨てるようであった。

「え？」わたしは思わず訊いてしまった。

だが、少尉の再度の答えもまた、ただ、「通れっ」それだけであった。

それは不機嫌そうにも見えた。彼らも悩んでいるのだ。民衆らの訴えが核心を突くと彼らは我慢できなくなる。心苛まれ、怒りにも似た感情に捉われるのだ。

後で聞いたところによると似たようなことがあちらこちらで起こっていたらしい。
りようりよう

療々などは歩兵のすぐ傍まで近付き、目を覗き込み、息もかからなければ手で銃をつかみ、こう言ったそうだ。「何やっているんだい。銃剣を向ける相手が違うよさあ、とつとと私たちの仲間に入りなさい」

兵士たちは大概不安げに顔を見合わせ、恥じ入るように動揺すると言う。そう、兵士らは目を覗き込まれると、自信を喪失したように、度を失ったように双眸を素早く動かす。ときにはそれを誤魔化す為に厳然たる無表情を作ると言う。だが、終には事態が変わるのだ。最初の誰かが決意し、二人三人と、そして皆が落ちる。民衆は叫びを上げて兵士たちを囲む。

わたしは通れと言われたので、兵士の列の脇をゆつくりとすぎた。そのときに兵士らの目を見た。兵士らは目を逸らす。沈黙。兵士は任務を放棄し始めていた。それを確かに感じた。

おれは恐ろしくなった。天と地とはひっくり返ったのだ。勝ち誇った暴徒どもの雄叫びが耳の中で響鳴していた。西区警察署の署長が群衆の目のまえで斬り殺された。しかもやったのは、クルウザフ兵で、そいつは民衆に胴上げされている。

幾十人の民衆が射殺されただろうか。蜂起は一時終息するかに見えた。

だが、発砲は無駄だった。市民は逃げるがじきに湧き上がるように戻って来る。彼らは何が何でも訴える。結局は圧倒的な数で警察を倒すのだ。

最初は警察の射撃を恐れ、隠れていた人民は数多の死者を出すうちに、籠が外れたようになってしまった。恐れなくなってしまうのだ。一部軍人の謀反がそれに拍車をかけた。

おれがいるのは橋の近く、カウル広場だ。
さくわう

「参廊、やばいぜ、逃げよう」

既に特別公安課機動隊は崩れていた。おれたちの班は最後までかたちを持っていた方だ。

今まで悪鬼羅刹のように恐れられていただけに、おれたち警察が弱くなった途端、民衆は小躍りして残虐な喜びに打ち震え、人間に対してとは思えぬようなあらゆる蛮行を為した。

裸で木に逆さ吊りにされ、生きたまま焼き殺された奴もいた。民衆はその慌てふためくようにもがく様を見て狂ったように嗤笑し、嘲り罵った。或る警察官の死体の下半身はなくなっていた。人が群がっていたかと思うと、その中心には手あたり次第のもので打たれ刺され突かれ殴られてミンチ同然となった制服の死体があった。その傍らでこどもらが興奮して咆哮する。

警察署は次々と襲われていた。おれは西へ逃げた。監督府へ救いを求めた。

「あの御方が行くわ」

二階の部屋、小さなバルコニーへ出る為の大きな窓に寄りそって、レースのカーテンをつかんだ。間違いなく、あの聖殉教騎士の御方。私はもう堪らなかった。

そう、普齊子爵^{ふせい}は何の連絡もまだくれない。わたしは待てない。今、聖殉教騎士なる彼を追わなければ、永遠に会えないかもしれない。そのとき私は生まれて初めて永遠と云う言葉をリアルに感じ、愕然とした。

私は外へ飛び出した。追った。

騒乱の街をつまずき転びながらどこまでも追った。

彼は剣を抜くと、警察官を斬った。銃声が聞こえた。私は飛び出した。彼の背に食らい着いて、突き倒すように伏せさせた。銃弾は私たちのうえをかすめた。彼が訊いた。

「君は」

普齊子爵^{ふせい}からの連絡が驚愕させた。まさに驚愕であつた。予想はしていたが、こんなかたちで起こると思つてもいなかったのだ。シルヴィエが攻めて来るとしても、当面の敵は駐在する監督府であろうと予想していたのだ。

「誰か、軍に連絡しよう。こうなったら、一刻の猶予もない。待つてはいられないのだ、様子など窺つてはいられない。軍隊の蜂起を促そう。誰か、協力者にあてがないか」

ここはカヴル広場の近くだ。ちょうど、話をしていたA・C・学生会長の叭羅蜜多^{ばらみた}が言つた。

「^{いれつ}ズ裂曹長^ぼがいい。彼は炎を救つた兵隊だから」

「よし。わかつた。」

それから、舍却^{しやきや}にも連絡しよう。聖殉教騎士は思つたより強力な戦士だ。彼らにも市門へ行つて貰おう。誰か舍却^{しやきや}の居場所が分からないか。探して伝えてくれ。

うむ。
^{ばらみた}

叭羅蜜多、では、私自身も門へ行こうと思う。君はどうする」

「監督府の動きを確かめよう。警察どもが集結しつつある。肝心の軍隊も、民衆への銃撃を本格的に行おうとしているらしいと云う情報がある。」

実はな、彝齋^{いさう}肯、警察署から武器を略奪したことで、一部市民が銃を撃っているらしいのだ。兵士にも負傷者が出現しているようなのだ。だから、軍がそれにつられてこちら側への攻撃の契機とする可能性も高い。情勢は流動的だ。俺はまだここにいろよ。状況で動きを決める。

気を附けろよ、彝齋^{いさう}肯」

「ああ、君もな。それでは、幸運を祈る」

「いつでも幸運さ」

群衆からの発砲に対する報復として歩兵小隊が初めてチーヌイ・ヴォール（ネスラコ大通りの中心部にある百貨店）の傍らで市民に発砲を始めた。十三人が殺害され、四十人が負傷した。

その情報は深い絶望感で吾を覆った。軍が敵となった……そのとき由伽が走り寄ってくる。「大変よ、炎！」

「どうした」

「近くで兵隊さんが鉄砲を撃ったのよ。怪我をした人が倒れているの」

「どこだ」

「ボンド街通り、すぐよ」

「その怪我人は」

「今連れてくるわ」

「軍隊はまだいるのか」

「行っちゃったわ、このバリケードを避けたのよ。何でも五人ぐらいだって言ってたから」

すぐにその怪我人は連れて来られた。

「大丈夫か」

「大変だ、……大事な連絡が……あなたは？」

「炎だ」

「炎！ おお、神様、幸運に感謝いたします！ 実は私は犂齋肯氏の使いで、

曹長のもとへ使いに行く途中だったのです」

「何と。それはどんな用件だ」

「シルヴィエが……」

「シルヴィエ！」

吾は詳細を聞いて愕然とした。先に聞いた軍隊の銃撃の知らせよりもさらに深い暗澹とした気持ち囚われた。全く予想していない事態だ。しかも機械化装甲一個師団とは。大海原の怒濤のように次から次へと切れ目なく丘陵を越える自走式装甲戦車の群れが目のまえに浮かんた……

「急いで、犂齋曹長のもとへ使いを！」

「あれだ、あの歩兵小隊だ、犂裂」俺はそつちを見た。確かに撃つていやがる。

「誰か、行って止めさせろ。大声でまず怒鳴れ」

一人の二等兵が行った。コルトだ。いつも威勢がいい。だが、市民の造ったバリケードを奪取占拠して、籠城する如く四方を狙撃する歩兵小隊には近附けなかった。

「空に向かって撃つんだ。こちらの存在に気附かせろ」俺はなおも指示した。

撃った。こちらに気が附いたようだった。が……

「危ない」俺たちは道端に伏せた。撃つてきやがった。收拾がつかなくなっていやがるぜ。

「全員、安全な場所に散開しろ」

激しい銃撃は止まない。「糞っ垂れっ！」イスコフが叫んで、撃ち返した。俺は怒鳴った。「止めろ、撃つな。俺たちが撃ち合えば混戦になるぞ」だが、遅かった。相手は本格的な戦闘体制になって、雨あられと連射する。

「止む得ない」

俺たちは迎撃した。

どうにか、市門に辿り着くことができた。ここに来るまでの間に随分、シルヴィエ帝国軍一個師団接近の流言蜚語を聞いた。徒らに民心に不安を与え革命を減速させぬ為に、衆耳に触れぬよう十分配慮したつもりではあったが、所詮、この情勢では無理であったようだ。

シルヴィエ接近の噂が相当広まっている。多くの人間はレオンのことを知らない。レオンを追って来たとは思っていない。偶然それが革命の日と重なったとは考え附かない。モスコールの騒動を聞いてやって来たにしては、余りに早いこの接近を不自然に感じている。まるで罠のように。この革命自体が仕組まれたものであるかのよう。疑心暗鬼が生まれている。

私は原蛇の紋章が半径1mに亘って浮き彫られた市門を見上げた。高さ10m厚さ1mの鉄製扉を持つ門の上にはさらに、翼のように反り上がった石膏屋根を持つ門楼が広がっている。

門衛がいた。私は叫んだ。

「市門を閉じるんだ」

「何だと？」

貴様何者だ。市門を閉じろだと？ 閉門時間は七時だ。貴様、頭がおかしいのか」

「私は、彝齋肯と云う者、弁護士だ」

「それがどうしたのかね、御若いの」

「非常事態なんだ」

「非常事態なのは分かっている。街は大騒動だ。だが、閉門とは関係ない。わしらはモスコール議会の決定により市門を守っている。尤も今は騒動のせいで、わし独りになってしまったがな・・・

分かるか。閉門時間の変更は、貴様の判断ではない。それとも決定権を持っているとでも言うのかね」

「違うんだ、シルヴィエ軍が迫っている」

「で、なぜ、門を閉じるのだ。」

我々はシルヴィエの指導の下に国家を立て直しておる。門を閉じたら反って、叛意ありとして罰せられるではないか」

「見てみる、この革命の状況が既に叛意だ。街は罰せられる」

「街ではない。革命家どもだ。愚かな労働者たちだ。解ったぞ。わしにも事情が飲み込めたわい。だがな、わしは死んでも貴様らには協力せんぞ！」

大仰な白い口髭を持つこの初老の門衛を説得する時間はなかった。私は不本意なが

ら拳銃を抜いた。

「開けるんだ」

「ほう。殺すか。殺すなら、殺せ。だが、開け方が解るかね」

「冗談じゃないよ、何でシルヴィエ駐留軍一個師団がよそから来てるんだよ。ふざけんじゃない、いる筈がないじゃないか・・・何だって」けれど、私の反駁は止まった。まさか、イキリア、あの女、本当にシルヴィエのスパイだったんじゃない・・・

「どうしたのよ、燎々、急に黙っちゃって」
りようりよう

「ちよつと、私はここを離れるよ、炎に言っておいて」
ほの

「炎なら、どつか出て行っちゃったよ。あんた、どこ行くのよ」

「ねえ、あんた、サリヴオってばさあ。あんた、イキリアって知っているだろう」

「知っているよ」

「シルヴィエ人で、シルヴィエ聖教じゃないか」

「そうよ」

「分からないかい？ あんた、そんな奴他で見たことあるかい？ 駐在軍以外だよ。平民で、この市民で」

「確かに珍しいわ。何が悲しくて自分の国が蹂躪した国の市民になるのよ」

「でしょう？ とにかく監督府に行ってみるわ。確かイキリアはそっち方面に行った筈だから。きっと監督府で連絡を取る為よ」

「炎、とても近附けねえ、いれつメ裂曹長への連絡は無理だ」

リヤドがそう叫んだ。

何と云うことだ、シルヴィエ駐留軍機械化装甲師団が迫っていると云うのに、自治州軍は仲間で合い撃ちしているとは。

「御嬢様、ここは余りにも危険です。何とぞ御父上の許へ御帰りください」

彼がそう言つても、私は自制し切れずに首を振った。

「嫌です、舍却様。その御名まえを伺うまえは御名まえさえ知ることができたならと思っておりますけれども、今は・・・」

「御願いでございます。私も一緒に」
しきせき

舍却様の端正な御顔が憂いの面持ちを形作る。

けれど、愕くべき光景が私たち二人の諍いを中断させた。一〇〇mと離れていないところで、バリケードから一人の市民が引きずり出され、民衆によって射殺されたのだ。

そのときの恐ろしい罵りの言葉を私は今でもはっきりと憶えている。「裏切り者、

ガリレオ人め！」

舍却様は電撃のようにその群衆に近附いた。

「何と云うことをするのだ、君たちは。同胞に向かってこのような暴力を振るうとは。革命の精神はどうしたのだ！」

「黙れっ。薄汚いガリレオ人は裏切り者だ。炎も裏切り者だ。貴様は知らないのか。シルヴィエ駐留軍が、機械化装甲一個師団がすぐ近くまで迫っているのだ。どうしてこんなことがあり得ようか、裏切りでなければ。俺たちは炎に騙されたのだ。唆され、シルヴィエの思う壺に嵌まったのだ。奴らは俺たちを蜂起させて、それを口実に皆殺しにするのだ。」

ガリレオどもは、いつも一番差別されているから、俺たちに復讐したのだ！」

私はそのときの舍却様よりも深い哀しみに満ちた威厳ある表情を知らない。

「君たちは何と云うことを言うのか。我々はいったい、何の為に命を賭けて立ち上がったのか。」

民族や宗教を越えた永遠の平和と、二度と虐殺の起こらぬ我らの世界を築く為ではないのか、神の国へ近附く為ではないのか。

私はオーデ教徒だ。それを誇りとする。だが、ヴァルゴ教も羅教もシルヴィエ聖教も蔑みはしない。全ての民族や宗教は自らを誇りとして欲しい。唯一の真実など必要がない。平和と全ての人々の幸福、それこそが必要なのだ。どうして、神がこの崇高な、広大な、無比なる真理を御認めにならぬ筈があるのか。

斯ような諍いは人間の心が小賢しくも造り出した幻影なのだ。あたかも失われて久しい指尖に痒みを覚えるように。実際、そこにあるかのように感じられてもそれは、心脳で造られ、技巧されたものののだ。

そうだ。まことにそうなのだ。本当にそこにあるように見えながら。これは是非のない事実だ。現にここに在って、触ることのできる、本物の真実だ。

痒みは指に在るのでも、指で感じているのでもない。心脳で初めて痛み痒みとなるのであって、刺激としての差異すらない。刺激でさえない。指尖に於いては無ですらない。無でさえもないものが伝達され、心脳に至って初めて刺激としての資格を与えられ、存在し、信号としての意味を為し、記号として扱われ、解釈を附与されて痛み若しくは痒みとなるのだ。

愚かな『真実』、愚かな『差別』を、それを越えよと叫んだ、炎の叫びが君たちには聞こえなかったのか。どうして、このような真意ある言葉が我々を騙し、策略する者の言葉である筈があるのか。

耳ある者は聞け！」

けれど、舍却様の言葉は全く虚しく、モスコールのあちらこちらで異民族間の猜疑心による信じられないような残酷な殺戮が起こってしまった。それは抑制されていた歴史的背景を持つだけに、本当に残虐だった。『真実』とは、とても残酷なことができるもののだと、私は悟らずにいられない。

いた。

あの女だ。美しい金髪、碧蒼の双眸がここからでも煌めいて鮮やかに見える。監督府はもう目のまえ。コンチオーネ通りを進んでいる。あの脚を見てください。スカートか

らでも分かる。すらりと伸びて、生き生きした臍、愛が疼くぜ。だが、何とあの醜い龍の刺青の男も一緒だ。おれは滾った。何としてもあそこに加わらなければ。隣で同僚が喚く。

「参廊、あの女子紡織工じゃないか。畜生、あいつらのせいだぜ。死ぬまえに殺してやる」

イサカスは拳銃を構えたのだ。おれも瞬時に銃を抜いた。イサカスはおれに撃たれて死んだ。これでおれも革命側の英雄だ。実際、そうなった。おれは、あの美しい女の命の恩人となったのだ。

そのとき遠く南の方角に、黒煙が見えた。

やつとイキリアへ辿り着いた。僕は幸福感に満たされた。

楽夏が言った。

「好きなんでしょう、龍背。名乗っただけでいいの？ この激動の瞬間に告白しちゃえば。結構、いいかもよ」

でも、彼女の目が全然本気ではなかった。僕だって、この緊迫した中で言えやしない。そのときだ。

まさかの銃撃が轟き、イキリアの足下で弾けた。楽夏の悲鳴。僕は驚いて、イキリアの顔を見たが無事だった。撃ってきたと思われる方向へ視線を遣ると、僕らの後方斜め左側にある、坂になった路地で、途中から階段が設けられているところがあつたが、その上から警察官が狙ったらしかった。だが、そいつはもう一人の警察官に撃たれて倒れている、少なくともそう云う状況であるように見えた。

撃った警察官は僕らに近附いて来た。

「君らの勇気に敬服しよう。民衆の高邁な理想におれは目を開いたのだ。だから、敢えて同僚を撃った。仕方なかった、君らを狙っていたんだ、彼は。」

おれも今から、君らの同士だ」

誰もが猜疑の目であつたのは当然だ。そいつは東駅の附近で僕の髪をつかんだ。パリ人民主義の強硬な男だったのだから。だが、事実、イキリアの命を救ってはいいる・

思考は中断された。南で黒煙と炎上とが見えたからだ。

「民族同士の虐殺が起こっているだろ？ それでは、いったい、何の為の革命なのだ」

吾は心臓を抉られるような衝撃を受けた。信じられない。状況は絶望の度合いをますます深めている。

「ああ、いざとなりや、頼れるのは、他人よりは家族、異民族よりは同じ民族だからな、炎よ」

「吾たちはその愚かしさを訴えたのではなかったのか」

「あんまり思いつめるな、炎」

人間は弱いのだ。おまえが言っていたとおりではないか」

そうだ。その弱さも愚かしさも認めていかなければ、結局それは多くの専制的な改革者と同じ愚行を繰り返してしまうのだ。数々の虐殺を。

ヨハンの視線が吾の頭を越えて通りを眺め、言った。

「あれ、あれは、オーデ教の聖殉教騎士御一行じゃねえか。何でえ、女連れだぜ。坊主も落ちたよな。・・変だな、貴族の御令嬢みたいだが。貴族どもはぼちぼち逃亡し始めているって話だぜ」

「事情も知らんで、下司な詮索をするな。さあ、こちらのバリケードに入って貰おう。向こうは^{いれつ}裂曹長らの銃撃戦で危険だ。

おいっ！ こつちだ」

幸運だった。辿り着いたところは、炎の^{ぼの}陣地であった。私は民族抗争の状況をかいつまんで話したが、ガリレオ人への悪口については、彼のまえでは言えなかった。そして、炎から^{ぼの}この状況を聞くと、思わず宣言した。

「ならば、我ら聖殉教騎士が、命を賭けて^{いれつ}裂曹長にシルヴィエ機械化装甲師団の接近について知らせ、軍部の一斉蜂起に御尽力いただけるよう話してまいりましょう。

ついでには、憂貴様の身の安全を宜しく御願いたします」

「舍却様、嫌です、私は」

「正直に申し上げます。斯ような激戦区域で貴方様は足手まといです。身動きままならず、失わずともよい命までもが失われてしまう可能性があります。

何とぞ御了承ください」

そのとき南の方から爆煙が黒々と上がった。

「何ごとだ！」誰もが叫んだ。

炎が呟いた。

「あれは、吾の家の方だ・・まさか御袋の身に・・」

俺は相手の歩兵小隊に奇襲をかける為、二人ばかりを引き連れて迂回していた。背を低くして小走りに、小刻みに進みつ、相手の包囲網を欺くのだ。壁にびたりと附いて、そつと建物の角から顔を出し覗く。やった。うまい具合に相手の斜め後方だ。俺は仲間に知らせようと後ろを振り返った。

二人は数人の兵士に抑えられ、額に銃を突き附けられていた。シャロン少尉が立っていた。

「おまえの勘が鈍るとはな、^{いれつ}裂。初めてだろう、後ろを取られるのは。運の尽きだな。命令違反で貴様を銃殺せねばならん。それとも今から叛逆者どもへの攻撃に協力するか？

非常事態だからな、特に罪を見逃さぬこともないぞ」

嘘だ。軍では、俺の行動は筒抜けだ。協力だけさせて、あとは軍法裁判にかけるつもりだ。そうでなくとも、イエスと言うつもりはない。俺は瞬時に十通りの考えを

過ぎ^よらせた。少尉^{こめかみ}が俺の顚顚に銃口を附ける。
「どうした、^{いれつ}裂。死にたいのか。早く答えろ」
だが、死んだのは少尉だった。聖トミコクス騎士修道会の聖殉教騎士らが重装歩兵隊の兵士たちを次々斬った。

「炎、心配するな。ここは大丈夫だ。行つて来い！」

あたいが見上げると、炎は真つ蒼だった。

「済まない」

一言だけ言つと、彼は南へ走った。

「待つて、炎、あたしも行くよお」

けれど、追い附けなかった。

追い附きたかった。

信^{おれ}じない。吾は信^{おれ}じない。燃えているのは吾の家だった。吾の家だけが業火に包まれている。晰らかに、狙つて火をつけられたのだ。なぜ。

壁が残っていた。釘打たれて磔られた人間が黒焦げになっていた。凄絶な苦悶の表情から生きたままやられたことは確かだ。

「御袋……」

嗚咽で言葉にならなくなった。吾は泣き崩れた。慟哭した。こんなに酷いことが許されてよいのか、吾は……

『裏切り者の母親』、壁にそう書かれていた。吾は舍却^{しやきや}が何を言いよんどんでいたのかを理解した。焼跡から男たちが現れた。

「来たな、裏切り者め、シルヴィエの犬が！」

吾は見た。パーリ人、ノルティオ人、アルレリア人の十数人だった。獵銃^{おれ}が吾に向けられた。

「死ね！ 薄汚いガリレオ人めが！」

激烈な衝撃。真つ暗になる。吾は死んだ。

やっと探し出した。炎^{ほの}が出てから、舎却^{しやきや}が洩らした言葉がずっと心の中で繰り返されていた。そう、あたいが見たのは炎^{ほの}の屍骸^{しかい}だった。驚かなかった。なぜなのか分からないけれども、あたいはそうなっていることを知っていたから。それでも多分、泣き叫び続けていたのだろう。長い時間が経って、夜になって、朝が来た。明るくなると、屍骸^{しかい}がそのままあった。それでもどこか近くに別の炎^{ほの}がいてくれるのを感じていた。炎^{ほの}は死んだ。あたいは壁と階段^{かだい}だけが残った建物を見た。屋根も床もなかった。その階段を昇った。あたいは臉を閉じた。ねえ、炎^{ほの}、あなたは本当は戦いたくなかったのよね。でも、仕方なかった。そして、ガリレオ人^{ガリレオじん}だったから撃ち殺された。あたいは飛び降りた。

療々^{りようりよう}は後にこの件について述懐^{じゆわい}している。

『数日後、私が見つけたのは、由伽^{ゆか}の亡骸^{むしかい}だった。炎^{ほの}の遺体は後々革命会議の主催によつて、厳かな葬儀に瞞^{はなむけ}られたが、彼女の身体はこの騒乱の中で誰にも顧みられなかったのだ。』

炎^{ほの}の死はとても悲惨な事実ではあるが、それでも彼は歴史に名を残す。けれど、

由伽^{ゆか}

は忘れられ、永遠に消えてしまうのだ。

尤も彼女はそんなことを気にはしなかっただろうが』

アンダルジョ・ヴィコ・エクスプレスはロレアル・アンダルジョへ向かって南下の途中、ユヴィンゴ連邦ユヴィンゴ共和国ムスタ郡のリユプリユ駅で停車したまま、発車の時刻が過ぎても動かなかった。

同じプラットホームの向かいには、モスコクールから逃げて来た貴族や金持ちを一杯に乘せて北上する列車が着く。そして、出発した。動かない南下列車の乗客らは騒ぎ始めた。謎はすぐ氷解した。

ステップを跳ぶように次々侵入して来たのは黒い鋼鉄の鎧で装甲したシルヴィエの重装歩兵であった。機関銃を抱えて各コンパートメントを回って喚^{よは}わった。

「車内を調査する。乗客全員そのまま各室に留まって、移動してはならない。動いた者は叛逆者と見なし、何人であろうとも銃撃する。以上」

五人の中尉が少尉や軍曹若しくは曹長を伴って、1km以上に渡る車輛全てを入念に調べ始めた。

ジョルジュ中尉は典型的な北方人らしい薄い金髪を憂い垂らし、鬱々たる表情で巡っていた。哀しい予感はいつも当たるのだと言う吹きか癖の若者は、その言葉どおりレオン・フランシスコ・デ・セヴィーリヤがモスコクール産の革ソファに埋もれ寛ぐ、特等車輛の個人用サロンの扉を開けたのだ。

顫える声で、ジョルジュは告げた。

「閣下、誠に遺憾ながら、私、ジョルジュ中尉は閣下の身柄を拘束し、我が指揮官の許へ御同道願わねばなりません」

レオンは物憂げに一瞥を遣っただけで、動く気配がなかった。

「君の指揮官とは、誰だ」

「サ・パティオ少佐であります」

「そうではない。この作戦の最高責任者は誰かと訊いているのだ」

「レストフ少将であります」

「第二十四機械化装甲師団か。まあ、イヴィルがせめて頼れる軍人と言えば、実直謹厳な鉄の老將軍レストフぐらいなわけだな。よろしい。君の捕虜となって少将に会おうじゃないか」

レオンは立ち上がった。

漆黒の髪を背に波打たせ、傲岸不遜な眼差し、蒼白で厳しい表情を刻む長身の若者を、ジョルジュは畏敬を以て眺めた。

「ところで、俺に随行した者たちはどうなる？」

「こちらで身柄を預らせていただきます。御安全を保証いたします」

「なおさらよろしい。少将はよく心得ているな」

レオンは王者が侍者を後に従えて玉座へ向かうように、絨毯の廊下を歩んだ。

純金とマホガニーとで壮麗された四頭立ての馬車が迎えに来ていた。整然して見守る軍列は、静まり返ってこれを見守った。

馬車が進むと、レオンは変化に富んだ野原の風光明媚を愛でた。

駐屯地はザブレック村に近い丘陵地帯にあった。

レストフ師団長の帷幄は直径一〇〇mを越える大天幕で、深い黄昏にその威容が黒く揺らいでいた。既にモスコールから一五kmの地点である。

三時間ほどの馬車の旅でも全く様子が変わらぬレオンは、馬車を降りた。ここでも数千の軍人が息する音さえ立てず微動だにせず、レオンの一挙手一投足を凝視している。レオンは、この主であるかのように、緋色や紺碧、黄色の裏地を開いて幾層もの襞に見せる大エントランスから天幕へ入った。

迷宮の如きいくつもの幕を捲って、その心臓部へ到達する。

レオンが入ると、そこにはおよそ野戦には似つかわしくない古典調の大机があり、老少将が坐っていた。

「閣下、誠に遺憾なことですが」レストフは席を立った。「御身を我が手に掌握し、皇帝陛下の御許へ御連れ申し上げねばなりません」

だが、レオンは決然と言い放った。

「ならん」

「しかしながら、閣下・」白髭を胸元に広げ、哲学的風貌の老少将は、表情に苦悶を浮かべた。「勅命でございます」

「レストフ、おまえはただちに我が指揮下に入り、第二十四機械化装甲師団は、このレオンの起こすクーデターの最初の軍隊となるのだ」

「おお、閣下、そのような謀反の御言葉を口にされてはなりません。いよいよイヴィルの思う壺となり申しますぞ」

「それはおまえたちがイヴィルの言葉に従えばそうなる。だが、俺の言葉に従えばそうはならん。ただそれだけのことだ。なぜ、君主の言葉には拘束力があるのか。権力とは何か。哀れな圧倒的多数の民衆の思い込みにすぎない。その実体は実在しないのだ。」

少将よ、おまえが俺に従うか、イヴィルに従うか。ただ、それだけだ。決断せよ」

「何と云う、国家の基盤をも侵し兼ねぬ、余りに恐ろしき御言葉。我ら軍人が生命を賭して戦うことの意義を根底から覆す御言葉でありますぞ」

「それが何ほどのものか、老レストフよ。おまえは何者だ。俺は何者だ。我々は真実に於いて何者なのだ。それを知らずして、レストフよ、いったい、どこへ行かれようか。どこへ至れようか。生きていと言えようか。屍だ。死をも畏れぬ我が軍の精鋭部隊を称して、死屍の軍団とはよく言ったものよ。」

我が国家はシルヴィエ聖教の国だとぞう。だが、勲あり誉れ高き將軍よ、崇拝すべき聖祖イハは、はたして皇帝を、帝国を認めたのか。枢機卿職を置いたのか。レストフよ、この世は余りに欺瞞に満ちているではないか。

誇り高き戦士よ、おまえはそのような虚しき幻影に命を賭すのか。哀れ、軍人とは。そうであるならば、兵士とはけして戦士ではない。

目醒めよ、レストフ。俺は今こそはっきり言おう。真実を生きよ、と。おのれの実存に還って、自らを問い直せ。我々に見えている国家は虚像にすぎない。俺とともに、真実へ立ち帰れ。帰れ、レストフよ。俺とともに真実の国家を築くのだ」

龍背は焼け落ちた家々の多い街区を歩いていた。道端に落ちていた黒いものにぎくりとした。紛れもなく人間の頭皮で、こびり附いた体液とともに道路にへばり附いていたのだ。

ユヴィンゴ連邦パリヴォ自治州の州都モスコールに於いては、市民が民族で分裂し、虐殺し戮つていた。特に龍背のトラウマを刺激したのは、一部で行われた民族浄化であった。彼の過去の記憶が、悪夢が甦っていた。茫漠と独り離れて夢遊病者のように街を歩いていた。

人種の見分けさえ附かぬほどにされた屍が積み重ねられているのも、目にした。女性には全て下半身が曝され剥かれ、性器には棒が突き刺されていた。若い女は無論、老婆も母も少女も、幼子さえも躊躇なく。

彼は姉の屍骸に嘔吐慟哭したことを生々しく思い出した。妹の死体も。可哀そうに彼女は散々追い駆け回され、逃げ惑い無残に陵辱され、裂かれ死んでいたのだ。

龍背は路傍に泣き崩れた。彼には人間が信じられなかった。人類全てに怨嗟を抱いて何の不思議があるう。彼の心を支えるものはや何もないのだ。この世にあるのは、ただ、底知れぬ深淵だけであった。

「龍背っ、ここにいたの！」

楽夏であった。「探したわよ、ここはまだ危険だわ」

「危険？ 僕にはもう、危険などない。いや、違う、この世はどこもかしこも危険ばかりだ。安寧すべき場所などない」

「何、似非ハムレットみたいな、わけの解らないこと言っているのよ。あんたみたいな呑気なパリリ人に報復の矛先を向ける連中も、まだいっぱいいるのよ、この辺には。たまにはまともなことも言って頂戴」

「まだいっぱいいるって？ それはどう云う意味だ？」

「ほら、何も知らないじゃない」

「僕は全てを知っているさ」

「そうね。でも、異民族や異宗教の間の争いを、軍が停止させようと駆けずり回っていることは知らないでしょう」

「知らないな。軍、つてのは、^{いれつ}分裂の分隊のことか？」

「馬鹿ね、五、六人の分隊でどうしてこのモスコール中の騒動を抑えられるのよ！ 何だか、あんたには興醒めしちゃったわ。思っていたよりも頭悪いのね」

「別に、君に好かれる必要はないね。で、分隊じゃないってことは、どう云うことだよ？」

「もちろん、自治州軍の一個連隊ぐらいはそれの為に奔走しているわ。

あとは、いまだに旧政府側に味方する軍部残党を討伐している。ただし、士官クラス以上は殆どが皆、地位を剥奪されて、市壁の外に追放されているわ。貴族の子弟だからよ。

解る？ ねえ！ 解らないんでしょう。教えて上げる。

監督府が開城したのよ。どう云うことが起こったと思う？

革命側の勝利よ。

民族同士の虐殺も、軍隊同士の分裂内紛も収束しつつあるわ。知らなかったでしょ

う？ シルヴィエの監督府内部でクーデターが起こったのよ。クーデター側はモスコール駐在軍を完全掌握して、革命側に附くと宣言したのよ。分かるでしょう？ 勝ったのよ。革命側が勝利したわ。信じられる？ ああ、信じられないわ。こんなことがまさか本当に起こるなんて。

貴族や王族、金持ちたちは取るものも取り敢えず命からがらモスコールを脱出しているわ。私たちはそれを止めもしないし、拿捕も攻撃もしないわ。ただ、嘲り罵って見送ってやるだけ。民衆に嘲笑されながら、貴族たちが一斉に面を伏せてこそこそ逃がっているのよ。痛快だわ。

分裂して戦っていた軍隊も、それまでは、あなたも知っていたとおり、民衆側に附いたべ裂が少数派で圧倒的に不利だったけれど、形勢が全く変わって、殆どの部隊が革命側に附いたのよ。

当然よね。あのシルヴィエの戦車が革命側に味方するんだから。腰抜け政府も自治州軍も抗えないわ。攻撃される一方だったべ裂は快進撃よ。

軍隊は今、べ裂の下に再結束し始めている。信じられる？ 今じゃ、あのべ裂が軍隊の最高権力者なのよ！ これが革命なんだわ。将軍も隊長も権力を喪失したのよ。政府が倒れたから。政治家や議員は可能な限り捕縛されて革命裁判にかけられる。貴族を逃したのは、余りに苛烈にやると民衆側貴族側で分裂して国家がまとまらなくなるからだって、誰かが言っていたけれど、中途半端ね。徹底してやればいいのに。

ねえ、どうしたの、龍背。元気がないわ」

龍背は黙っていた。かたちが変わったただけだ、かたちが変わっても基本構造は変わらない。

彼は次のように思案する。

『右の頬を殴られても左の頬を差し向けるようでなければ、人類に真の安寧はない。』

これは永遠の真理であり、絶対の真実だ。おのれを超えて敵をも愛し、自己への執著を離れるならば、眞の平和が訪れるだろう。

だが、それは畢竟、姉を陵辱殺戮されたのなら、妹をも差し出せと云うのと同じなのだ。妹の喉をも裂かせて、姦られるままにさせなければならぬのだ。多くの人はこの考えを神聖な言葉への冒瀆だと感じるだろう。彼はこの聖なる至高の真理を否定して言うのではない。紛れもない真実であると感じている。

正当な理由もないのに、自分の右頬を殴られて敢えて左を差し出す。それほどまでに敵をも愛する。それならば、やはり同様に、如何なる仕打ちであろうと無条件に愛し、犠牲と放棄とを徹底させ、妹をも差し出さざるを得ない。彼女の気持ちをも無視し、犠牲にしなければならぬ。

これは紛れもない真実の言葉、真理だ。

だが、人間はそれを完うできない。理不尽に堪えられない。僕は神の真理を貶めているのではない。左の頬をも差し出すべきことは永遠の平和へ至る最高の真理である。僕はこの言葉を最も崇拜している。嘘はない。ただ、僕が言っているのは、永遠の平和は余りにも遠い、と云うことだ。地上のパンを顧みず身を捧げる、この崇高な行為は余りに遠い、人間の実存からは絶望的なほど遠すぎると嘆いているのだ』

俯いて虚空を凝視しながら、そう考える。

龍肯りようのそう云った思案の間にも、樂夏らっかの言葉は続いていた。

「でもね、龍肯りよう。まだ安心はできない。連邦に駐留しているシルヴィエ軍一個師団が近附いているのよ。およそ二万の機械化装甲師団だって言うわ。こっち側は自治州軍と監督府駐在軍とを合わせても、四千超ぐらいだって云うのに。

ともかくあと一五kmぐらいのところまで来ているって言うのよ。まるで、革命のことが分かっていたみたいだって、皆言っているわ。でも、そんなことってあり得るかしら。やっている側さえ予想もしていなかった出来事なのよ。裏切りなんてないわ。きつとね。

龍肯りようったらあ。

ねえ、市壁まで行きましようよ。皆、市門の上に集まっているわ」

龍肯の眼差しは没陽に照らされ、暗く移ろっていた。

「いいよ」

モスコールは周囲十六・五四kmを高さ平均二〇mの石壁で囲まれている。旧市街に残されている旧市壁の三百年後に造られたもので、基底部直上の厚さが五mを越えるこの組積造を破壊できるのは、唯一シルヴィエの砲撃だけであった。

真紅の夕焼け空が一本の線にしか見えない狭い路地。その谷間を曲がりくねっているくつも折れ、行くと唐突に壁は現れる。

三階、四階建ての家屋と三m以上は離れていない。破風のある切妻屋根の頂上か、若しくは煙突から、市壁の上へ飛び移れそうであった。

龍肯は門楼がとも高いところにあるように思えた。その下の巨大な門扉は軍隊によって閉ざされている。傍らの門衛詰所の入り口に一人の老人の亡骸があった。

それを跨いで詰所に入ると、湿っぽい空気が黴臭い。室内の奥にある木製扉を開けると、黴臭さはさらに強くなる。そこが壁の上へ昇る、狭くて暗い螺旋状の石段であった。

石段は途中、物見用に張り出した小部屋があるのを除けば、始終真つ暗であった。壁の上に出ると、洞穴から抜けたような感じであった。

そこは思ったよりも立派な歩廊をなし、龍肯の目のまえには巨大な東屋のような門楼が四方に向かって反った石葺屋根を聳やかせている。

皆は楼閣の中で思い思いに坐り、市壁の外である黄昏深き平原を遠望していた。

皆、龍肯が来ると声をかけた。

彝齋肯が立ち上がって龍肯に握手を求め、「さあ、坐りたまえ」と勧めた。彼とは初対面であったが、あたかも旧知の如く扱ってくれた。普齊ふせうが坐ったまま微笑んだ、「君が龍肯か。一目瞭然だな。僕は普齊だ。宜しく」

平原を睨んでいた白い軍服の爽烈そうれつが近附いた。「自分が爽烈そうれです。宜しく」
叭羅蜜多は視線を向けさえしなかった。

太刀を佩いた舍却しやきやが黙礼する。破れたドレス姿の憂貴ゆうきも合わせるように辞儀する。参廊さんろうは渋面を作っただけであったが、思い直したように握手を求めてきた。「いっつぞやは、悪かったな。龍肯」

べ裂いれつは大きく頷く。

燎々りょうりょうが言った。「龍肯りよう、炎が死んだのよ。聞いた？」それは龍肯にとって非常

なショックであつた。「まさか・そんな。いったい、なぜ。どこでなんだ。・・どうして」

燎々が手短に説明してくれた。瞠目したまま龍肯は聞き入っていた。深淵が轟音を立てて、彼を呑み込み始めた。

聞き終えて茫然とする龍肯には、由伽のことまでは思い至れていなかった。イキリアが燎々の話終わるのを待つて声をかけた。「どうしたの？ 元氣ないわ、龍肯」

炎の死を聞いた直後だから鬱暗として当然だが、イキリアの問いはそう云う意味ではなかった。周囲の誰もが感じていたことを言つたのである。ここに入つて来たときから、龍肯に覇氣は皆無であつた。状況の激動昂ふりと空氣が異なつていた。

「いや、別に・・」

彼女はなおも青碧の凜たる双眸で龍肯を見続ける。凜々と燦めく瞳は青く光を鑲めてちらつく南洋の海、だが、その揺らぎ何か不安を孕んでいた。龍肯は予感に襲われ、不安を覺えた。

そのとき参廊が射抜くような視線を投げたのを耳に感じ、意識が舞い戻つた。自分の位置を確かめるように、周りを見回す。

愕然たる状況だつた。四方に開かれた高き楼閣は、あたかも世界の中心のように見える。

左手となる西には今、滾り沈まんとする黄昏、市壁の伸びる彼方に見える。正面の北には深き夕景の不安を孕んだ大平原。右手東の穹は暗く、南に市街の翳りが底知れぬも数多屋根は濃いオレンジに燃えている。

若者たちは、皆それぞれに東西南北の背景を持つて、楼閣の中心を囲むように、立ち、坐り、膝を抱え俯き、歩き、或いは半ば寝そべるように凭れかかつていた。

イキリアへ対する舍却の崇拜の眼差し、普齊の興味深げな視線、爽烈は常に彼女に対しては瞠目を新たにしている表情を隠さない。裂、叭羅蜜多の想いは読めないがどうだろうか。燎々の猜疑に満ちた目と、憂貴の憧憬と嫉妬との複雑な唇・・

今まさに龍肯へ話しかける為に偶然、楼閣広間の中央にすくつと立つたイキリア、このショットそのままに、彼女が全てのベクトルの向かう中心にいるように龍肯には思えた。

「何でもないんだ」

龍肯は彼女の視線を振り切るように、欄干へ移動してそこに肘を突いて寄りかかり、平原の光景を眺めた。一瞬の彼の耳に鳴った交響曲の高まりは、消えた。

「レオン殿からの音信は途絶えたまま、今に至っている」唐突に話したのは、爽烈だつた。龍肯は振り返つた。イキリアの眼差しの揺らぎは波瀾となつていた。

龍肯は予感の的の中を感じた。レオンと云う名は初めて聞いたが、この中では既に周知の話題らしかつた。爽烈の言葉は続いていた。

「レストフ少将の師団が全ての道路、交通機関を検閲しているらしい。最後の連絡ではレオン殿は意表を突いて豪華列車で来るとのことでしたが、例えばサウス・サウザンド・トレインやアンダルジョ・ヴィコ・エクスプレス、オリエンタル・エクスプレスなどは全て厳しい調査を受けています。

自分の想定としては拿捕された可能性が強い」

レオンについては、らっか楽夏がりよう龍肯に説明してくれた。今ここにいる殆どの者が彼同様今日ここで初めてふせう普齊やそうれ爽烈からこの話を聞き、知ったのである。

ふせう普齊が訊いた。

「君の考えでは、レオンさえ捕らえればレストフは撤退する、と云う可能性はないのか。飽くまで革命を潰そうとするだろうか。

いや、・・・無論そうだ。これを見逃しておいて統治などできる筈もない。彼らの当面の方策である、融和政策にも限度があるだろう。何しろ、最終的には領土化する肚なんだからな」

そうれ爽烈が憂いを含む目をまつすぐ向けて頷く。

「そのとおり。レオン殿を目的としての南下であるが、モスコールでの革命を耳にすれば、無視する筈もない。必ず来る。いや、現に監督府へは何度か状況を知らせるよう無線連絡が入っている。無線にしろ、有線にしろ、電信システムを持っているのが、世界で唯一シルヴィエだけなのは、せめてもの幸いだ。自治州政府が現時点でようやくレストフ師団の接近に気が附いて、救援要請の使者を送り出したかどうかぐらいのところだろう。

恐らくは明日、レストフは来る。しかも彼らは未明若しくは早曉からの活動を善しとするから、明日の朝にはこの平原を黒き装甲兵士が埋め尽くす」

いさう彝齋肯が口を開いた。

「ともかく、ここにいる者たちで話し合おう」

いれっべ裂が応えた。

「そうだな。黙ってシルヴィエを持っていってしまうががない。当面の戦略が必要だ」
しやきや舍却も賛同した。

「私もそうすべきだと思う。幸い、子爵や曹長、監督府のそうれ爽烈少尉など、革命に有力な人物がそろっている。

臨時の革命会議と言ってもいいぐらいではないか。

いさう議長は君が務めてくれ、いさう彝齋肯

ばらみた叭羅蜜多が顎に手をあてて言う。

「まさにそのとおりだな。ならば、今ここにいるメンバーが議員だ。緊急非常事態であるがゆえに暫定的な代表者で行うと云うわけだ。後には正式に民衆の選挙によって議員を選出するとしても、現状はすぐにも方策を決めなければならないわけだから」

ふせう普齊は訝しげな面持ちを造ったが、敢えて言うのを止め、「賛成だね」と片眉を上げて『同意』を示した。

いさう彝齋肯が切り出す。

「では、当面の課題はレストフ率いるシルヴィエ軍への対応だが」

間髪入れずいれっべ裂が応えた。

「戦う。それ以外ないだろう。市壁の外へ打って出ては物量的に不利な俺たちの負けだから、籠城するしかない。自治州軍や監督府の駐在軍では足りない。全モスコール市民の協力が必要だ」

イキリアが言葉を挟む。

「でも、それが今は難しい状況だわ」

叭羅蜜多ばらみたが言葉を繋いだ。

「そうだ。レストフ軍接近の知らせが民衆に猜疑心の種を蒔いた。それが芽生えて恐ろしい民族紛争の悪夢が復活した」

普齊ふせうはここぞ出番と言わんばかりに喋る。

「そう、ぼくらは多民族多宗教国家で、長い間抗争し続けた歴史を持つ。歴史的な猜疑心の呪いが今最悪のかたちで甦っている。この呪縛をどう解くか。これは革命が無事に達成された場合でも、後々必ず噴出する問題だ。明確な指針が必要になる。

結局、民族・宗教間の諍いを平和へ導くのは、友愛の精神以外ないのだが、それは原理として真実ではあっても、現実的ではない。誰しも聖者ではないのだ。

歴史的には言うが、もしも現状に於いて不公平な取り扱いを受けたり、差別されたり、仲間や家族を虐殺されたりしなかったならば、つまり現状が十分平穏で幸福であつたのなら、敢えて歴史を顧みる者は少なかった筈だ。つまりはそう云うことなのだ。

精緻な自己批判と、平等な社会正義とがあれば、民族紛争は苛烈にはならない」

叭羅蜜多ばらみたが言った。

「俺はパリ人だが、ここパリヴオの出身ではない。もともとは海鳥島の生まれで、難民としてここへ渡つて来たのだ。両親は島で原住民の民族主義者の民兵に虐殺された。そのときは、俺の家族ばかりではなく、数千人のパリ人が憂き目にあつたのだ。大量虐殺だつた。子爵の言うとおり、奴らを赦せる気持ちには自然な状態ではなれない。知識を得て、広い視野を持ち考えるときに初めて、理性の力でおのれの感情を抑え、平和へ赴くことこそが大義だと、辛うじて意識できる。意識だけは」

龍肯りょうけんは驚いたが、黙っていた。叭羅蜜多ばらみたが龍肯りょうけんの刺青をどのような目で見ていたかを思つと、罪悪感に近い思いを抱いた。

参廊さんろうは苛立いらだちたしげであつたが、言いたいことを抑制している。

舍却しやくが言った。

「私たちノルティオ人も連邦の他の地域や北方では有力だが、ここ自治州ではパリ人に抑えられ、差別されてきた。だが、叭羅蜜多ばらみたのような例もある。我々は全ての事情をよく知らなければならぬのだと云う思いを今、改めて強く持ったよ。我々は何か間違つた不幸の中にいるのだ」

普齊ふせうが目を細めてゆつくり頷き、言葉を続ける。

「諸君、ありがとう。ぼくは貴族に生まれて比較的苦労は少ないが、モスコールの貴族社会でガリレオ人としての低い扱いを受けてきたし、また平民の同胞は多くが貧しく、炎ほののように不当な、酷い目に遭っている。

平等で平穏で豊かな暮らしがあれば、民族や宗教の紛争の八割ぐらいはなかったのではないだろうか。余裕なくしては思い遣りなど生じないのだ、多くの普通の人間は。相手の苦痛に同情し、他者への理解を示す譲歩の精神は、全て余裕から生じる。聖人でない限りは。

生存の不安や生活の動揺が起これば、人間はより近いもの同士を頼りとし、就労や待遇などに不満があればその捌け口を他者へ向ける。それが常だ。

そのときに民族や宗教が都合よく利用されやすいのだ。全ての人々はその心理作用を客観的に観照しなければならない。いみじくも叭羅蜜多ばらみたが言ったとおり、知識がそれを支える。育てる。目醒めさせる。

機会の有無を考慮しなければ、無知はそれだけで罪悪だと断言しても差し支えないだろう。はつきり言えるのは、豊かな社会に生まれながら、世界を見ようとしないうる愚か者は例え手を下さなくとも虐殺の共犯者だと云うことだ。

とは言え、知識だけで憤りや悲しみや憎しみ、恐怖を超克できるわけではない。人間の現実存在を理解した上で、具体的に一つ一つの事例に応じて、諸問題を潰す以外に実地的な手段はない。

今の状況に照らせばこうだ。

まず人々の不信の理由。なぜこのように余りにも早くシルヴィエが来たのかと云うこと。

誰もが考える、これは畏ではないのか、と。我々を蜂起させて、それを口実に公然と強大な軍事力を振るい、一気呵成に侵略する計画なのではないのか、誰か裏切り者がいるのではないか、とね」

黙って聞いていられず、龍肯りゅうけんは重い口を開いた。

「実際、その説は理由が十分ではない。晰らかにレオンが目的なんだ。尤も僕らはレオンの件を今聞いて知っているから、そう言えるのだが」

普齊ふせうが頷きながら龍肯を促した。

「ふん。では、君が理由が十分ではないと言い切るわけを聞こうじゃないか」

「数だ。今回シルヴィエ軍は二万に足りない。と言うことは、自走式装甲戦車もせいぜい千台に満たない筈だ。

十二年前には五千台が来たと言うじゃないか。いくら二度目で、モスコール民衆の力を見極めているからと言っても、あの物量主義のシルヴィエがいきなり五分の一と云うことは絶対にあり得ない。確かに非武装の民衆二十数万に対しては千台でも十分かもしれない。だが、前例から言えば余りに極端な削減だ。

むしろ、増大していても不思議はない。なぜなら、シルヴィエ側は当然、こう考えるべきだから。モスコールの民衆は一度敗れている、シルヴィエの軍事力を知っている、それでいて再び行動を起こしたならば、狂気か、さもなくば余程の用意、若しくは覚悟があるのである、と。シルヴィエ側はそうに想定するべきなんだ。

つまり、軍備を増強させて、二度目の騒動に臨む、それが正常な思考だ。

それなのに、事実全くの逆。そこから導き出せる答は、ひとつ。今迫るレストフの軍隊は革命潰しが当初からの目的ではなかったと云うことだ」

普齊ふせうは韜晦的な微笑を浮かべた。

「まさにそのとおり。同感だね。

これは根本的な解決ではないが、取り敢えずは、それを説いて回り、結束を促すのだ、非常事態だ、争っていることはできない、と。そして、必要に応じて交換条件を用意しよう、事態収拾後は虐殺問題を正当に裁く為に中立的な真実査問審判委員会を設け、犯罪的行為を行ったと認められる者を裁くから、と。

どうだろうか」

彝齋肯が議長として採決を取った。

「では、子爵の意見への賛否を聞こう
爽烈が発言した。」

「基本的に問題はないでしょうが、平行して軍備も進めるべきだ。やっと結束した頃
白々と夜が明けてレストフが到着してしまったのでは間に合わない。

自分らと自治州軍とで準備は進めて、同時に誰かが説得に回り、納得した者らが我
々の下に集まると云うのが良い」

叭羅蜜多が言った。

「誰が説得役だ？」

普齊が言う。

「ぼくがやろう。各地域の代表者とも繋がりがなくもない。あとは龍肯、君が手伝っ
てくれ。それとイキリア」

なぜイキリアか、龍肯にはそれが妙に引かかる。

参廊がいきなり発言した。

「ならば、おれが子爵らを警護しよう。けて安全な仕事ではない。おれの警察とし
てのキヤリアが適任だ」

龍肯は参廊がイキリアに近附こうと計っているのでは、と疑う。

燎々が言った。

「さあ、それはそれでいいけれど、不十分だよ。子爵自身の長話にもあつたけれど、
御飯が大事なのだ、分かる？ せっかく革命側勝利だから、当初の目的を遂げなくて
は」

普齊が額を打った。

「うまいな。それだ。食糧倉庫を開けて分配しよう。それだけでかなり主導権が取れ
る。よい案だ」

彝齋肯議長が自薦した。

「ならば、その役は私と舍却とでやろう。子爵も分裂も役があるから。触れを出し
て食糧分配場所に人を集め、対レストフ軍戦の為に軍部の下へ集合するよう併せて呼
びかけよう」

普齊が眉を顰めて賛意した。

「いいだろう。せいぜいぼくらの活動を宣伝してくれ。説得がし易い」
彝齋肯が儀式めいたよく通る声を挙げ、両腕を広げる。

「では、意見は出尽くしたようだ。一括採決としよう。以上全ての案件への異議は」
誰もが諾意を示すと思われたとき、燎々が破った。

「ちよっと待って。そのまえに、はつきりさせたいことが一つあるわ」

イキリアが強い眼差しで燎々を見た。

構わず燎々は言う。

「イキリアのことよ。

ねえ、イキリア、あんたはシルヴィエ人よね。爽烈みたいにガリレオ人で被征服民
族なら、シルヴィエの人間であつても納得するわ。

でも、あんた、シルヴィエ人でしょう。純粋な、代々のシルヴィエ聖教徒でしょう。

何で帝国に敵対するの？ 何でここにいるのよ。あんたみたいなのは、他で見たことがないわ。

ねえ、皆もそうでしょう？ あるの、見たこと？ ないでしょう。

はつきり言うわ。ここで疑惑を残しては置けない。

龍背は尤もらしい説を言ったけれど、だからと云って絶対ではないわ。ねえ、イキリア、あんた、シルヴィエのスパイじゃないという証拠があるの？ 男たちはあんたの色香に迷っているけれど、私ら女は違うわ。

あんたが噂の裏切り者じゃないと云う証拠をはつきり見せてくれないければ、安心できないわ」

露骨に非難された『男たち』は一樣に困惑の表情を浮かべた。彼らは『嫉妬』と云う言葉を同時に思い浮かべたが、燎々りょうりょうのように身も蓋もなく言ってしまう者はいなかった。

怒りで一瞬赤くなったイキリアが急激に寂滅の表情に冷め、そして口を開いた。

「いいわ。

今さら話したくなくなかったけれど、仕方ないわね。こんなことで揉められ、分裂されても困るわ。話しましょう。言うだけは言うわ。それで信じるかどうかはあなたたちの勝手よ。

もう、レオンのことが周知の事実となった以上、どこにも迷惑はないでしょうから。さほどにはね。

そう、この話には、レオン・フランシスコ・デ・セヴィーリヤが関係するわ。一言言えば、わたしはレオンの恋人だったのよ。

で、どうなったかって言えば、よくある御決まりの話。身分違いってこと。わたしは平民だし、レオンは大枢機卿の長男だし。

レオンは帝国のシルヴィエ聖教に懐疑的で、原理主義者の集まりに隠密で顔を出したりしていて、家族ともうまく行かないから、殆ど家出状態。自暴自棄で無頼な、半ば放蕩的な生活だったのよ。あの頃はね。

それでどう云うわけかはわたしもはつきり知らないけれど、ふと入った場末の教会でいつもの祈りを捧げていたわたしと出会った。で、二人は恋に落ちた。それだけよ。あなたたちは知っているかどうか分からないけれど、シルヴィエではね、大枢機卿と呼ばれる人間は五人しかいなくて、もし現皇帝が崩御するか退位した場合は、五人の互選によって、次の皇帝が決まる制度なのよ。そんな家柄の人と付き合っているのだったって分かったときのわたしの驚きを想像してみて。

わたしにだって、絶対に実らない恋だと云うことぐらい、分かりすぎるほど分かったわ。でもね、レオンは一途だった。少なくともわたしはそう信じている。

この中で、わたし以外にレオンの気性を知っているのは、爽烈そうれつだけだと思うけれど、彼レオンはね、身分だからとか、しきたりだからとか根拠の曖昧な束縛に納得するタイプじゃないのよ。いつも何か違うものを観ていて、常識だからって言って通じる人じゃないの。

だから、わたしは自分から身を引いたってわけ。

レオンの手の届かない世界へね。少なくともわたしにはそのつもりだったわ。ここ

に彼が来るなんて思ってもみなかったから。

それで話は御終い。

どう？ 納得できる？ 信じてもらえるかしら。証拠なんて言われても出しようがないわよ。彼からの手紙も全部焼いちゃったしね。

信じられないのなら、好きにして」

一同哑然とした。龍肯は予期していたとは言え、言葉ではつきりさせられ、烈しい衝撃を感じる。爽烈そうれなど開いた口がふさがらないようであった。参廊さんろうの口元が陰しくなる。

沈黙の後、彝齋いさう肯が言った。

「では、・・非常に遺憾ではあるが、ここで真実を査問し審判しよう。

だが、裁決を下すまえに訊こう。

今のイキリアの話への異議及び質疑はあるだろうか。燎々りょうりょう、君はどうか」

燎々りょうりょうは考えていた。

「無理ね。信じられないわ」

困った顔で彝齋いさう肯が続けた。

「それはもう裁決じゃないか。異議にも質問にもなっていない。まあ、いい。燎々りょうりょうの意見への反論は？」

舍却しやきやが重たげに口を開ける。

「だが、嫌疑の立証も十分ではない。ここまでのイキリアの行動は革命側として崇高なものであったと認められるが」

爽烈そうれも補助した。

「レオン殿の名譽にも関わることで言葉遣いが難しいが、自分はそのイキリアの言うような事実に関する噂を聞いた覚えがある。確かに・・だ」

また沈黙が起こった。

樂夏らつかが言った。

「それなら、猶予が必要よ。こんな状態で断罪できないでしょう。冤罪だったなら大変なことよ。革命の結束に罅が入るわ」

憂貴ゆうきも言う。

「皆、イキリアの目を見て。嘘が言えるようには思えないわ」

燎々りょうりょうが囁みつく。

「馬鹿ね、あんた。そう云う問題じゃないでしょう。いいわ、皆の意向は読めたわよ。無実の罪になつてはいけなから慎重に取り扱おうって言っただけでしょう。

でもね、そう云う悠長なことを言っていたら、きっとこの革命も今日じゃなかったわ。それだけは、言っておくわよ。

全民衆の命にかかわる重要な問題は、疑わしきは罰するの原則で行くべきだと思うけれどね、私は。

まあ、いいわ。好きにして」

彝齋いさう肯が咳払いした。

「では、裁決を取ろう。本件に関してイキリアを無罪とするか、有罪とするか、或いは猶予として扱うか」

療々が「有罪」を發した。「無罪」と叭羅蜜多、龍肯、ベ裂、憂貴、爽烈、参廊、舍却らが声をそろえる。普齊と樂夏とが「猶予」言つた後で、彝齋肯が躊躇いがちに「猶予」と言い添えた。彝齋肯が続ける。

「無実七人、有罪一人、猶予三人、よつて無罪とする。真実査問審判の審議はこれにて終了とし、先に革命會議で提案された事項について採決を行う。よいかね」

議案全ては決議された。彝齋肯が宣べる。

「それでは、以上決定された事項に基づいて、一同速やかに決議内容を実践行動すべし」

斯くして第一回の革命會議は終わった。

一同は散つた。

ベ裂と爽烈とは至急に自治州軍と監督府駐在軍との混成軍を編成し直し、配備し、準備にかかった。

普齊は各労働組合や高等学校以上の各学生連盟（叭羅蜜多が会長を務める学生会は当然除かれた）、或いは地区の代表者らを集めるか、または赴くかして、自治州軍を改めて革命軍とすること、またシルヴィエ駐在軍とともに共同戦線を張つてレストフ率いる連邦駐留のシルヴィエ軍と戦うことを正式に通告し、民族の融和と戦線への全面協力を呼びかけ、シルヴィエ帝国に内通した裏切り者の存在のあり得ないことを説き、民族間の虐殺は不幸な誤解であつたと言つて、異民族・異宗教間の融和に熱弁を振るつた。

そして、複数の地域に於いて、事態收拾後には虐殺の真相と断罪懲罰とを明確にするよう要求され、真実査問審判委員会の構想を披露するのであつた。

彝齋肯らは各地域に食糧配布の知らせを走らせながら、集まつてきた民衆に市門に近いデ・コンストラクシオン広場で対シルヴィエ第二十四機械化装甲師団戦略の集會を開催する旨、布告していった。

これらは数時間で実施された。

集まつた市民は軍とともに夜を徹して武器を集め、配布する。投石機や巻上機などの軍事機具を自治州軍工廠で急遽増設した。市壁の上に築いた特大の台座へ、巻上機を使って投石機ばかりかシルヴィエ監督府の砲台付き装甲戦車までも載せる。

隊列を組んで夜明けに備える民衆と兵隊たちとの緊張に満ちた表情。革命直後の士気は高く、悲壮な覚悟に満ちていた。

「自由か、さもなくば死を！」人々の多くはそう叫んだ。

事実、状況は絶望的であつた。

龍肯が疲れ果てて門へ戻ると、既にベ裂がいた。

「駄目だな」ベ裂は楽しそうに笑いながら龍肯へ言うのであつた。「物理的に、とても太刀打ちできまい。これは嘶らかだ」

軍人らしい明晰な認識、龍肯はそう思つただけだつた。余りに疲弊していたのだ。「もしも二ヶ月もつたならば、見込みがなくなるはない。敵の兵糧が尽きてくるからだ。ただし、その場合、補給路は当然絶つておかなければならぬ。相手側の燃料が尽きる見込みはまずあるまい。殆ど動かないからな」

夜明け近くなつて、再び一同が市門の上の楼閣に集まつた。地平を眺める。

平原の曙光とともに黒いものが地平線から籠れ上がるのを認めた。

「来たぜ」

そう言ったときの、^{いれっ}ズ裂は爽風に颯られ、頬を暁に染めて毅然と立っていた。

平原に塊が見え始めた。

粉塵を上げてそれは次第に広がるように、大きくなってくる。

唸り叫ぶ機械がキヤタピラを回して、平原のわずかな起伏にピッチングしながら、その異様な姿を現し始める。たちまち大地は覆われてゆく。

門の上では誰もが息を呑み、声すら出ない。

シルヴィエ第二十四機械化装甲師団は終にモスコール市壁の北面を領し、陣容を整え居並ぶ。

重装騎兵や重装歩兵とともに、圧倒的な脅威を剥き出しにする機装甲戦車。聖教の祖に因んだシルヴィエの紋章を附け、モジュール装甲と薄く平べったい砲台、一二

〇主砲を備える。

^{いれっ}ズ裂が言った。

「あれがメルカル型戦車だ。見ろよ。あの主砲にかかっちゃあ、この市壁や扉なんてたちどころに崩れ去るぜ」

そのとき、イキリアが「あつ」と小さく叫んだ。同時に^{そうれ}爽烈も身を乗り出す。

漆黒の鎧に身を包み、真紅の裏地をもつマントを翻しながら、鋼鉄で荘厳された黒馬に乗った黒髪靡かせる男が一人、軍列の中から疾走し、こちらへ向かってきたのだ。

「開門しろつ、^{そうれ}爽烈はいるか。俺だ！ レオン・フランシスコ・デ・セヴィーリヤ、ここに約束どおりやって来たぞ！」

「レオン殿！」^{そうれ}爽烈が声を上げる。イキリアも「レオン・・・」と洩らした。龍肯の^{りよう}胸に痛切な苦味が滲んだ。

なおもレオンは雄叫び続ける。「開門だ！ 恐れる莫れ。レストフの機械化装甲師

団は我が手に下ったのだ。安心せい！ 速やかに開門するのだ」

^{そうれ}爽烈が慌てて叫んだ。

「開門だ、すぐにレオン殿を御通しするのだ！」

^{ふせう}普齊と^{いさう}壱齋肯とは顔を見合わせた。「これは一概に信じてよいものか」

^{さぶらう}すぐに参廊がそれに反対した。「もっと状況を確かめてからだ。うかつに開けるな」

^{りよう}療々も賛同した。「そうよ。馬鹿みたいにすぐ信じちゃ駄目よ」

イキリアが異を唱える。

「何を言うの、あなたたちにレオンの何が分かるって言うの！」

^{しきや}この言葉は一同を硬化させただけであつた。

^{しきや}舍却ですらこう言った。「これは余りに尋常ならざること。もっと慎重に対応するのが常道でしょう」

^{りよう}龍肯は頷かざるを得なかった。「そうだね。開門した途端、モスコールを占拠されたら終わりだ」

^{そうれ}爽烈が厳しく言った。

「ならば、代表を出して会見すべきだろう。もし根も葉もない疑いで門を閉ざしたと

したら、大変な問題だぞ」

燎々りょうりょうが鋭く言う。

「そうかしら？　そもそも爽烈そうれ、あんたを信じ切る理由自体がないのよ！」

「これは異なことを！」爽烈そうれも感情的に反駁した。

「待てよ」叭羅蜜多ばらみたが苦々しい表情を作って笑った。「さつき、いみじくも不裂いれつが言ったようにあの主砲でやる気ならば、簡単に壁も門扉も崩れ去るのだ。ここは一つ試みてみるべきではないか。つまり、彼らのところまで行って真偽を確かめるのだ」

彝齋いさう肯も頷く。

「ううむ。どうやら、それが至極妥当のようだな。・・・私が行って来よう。爽烈そうれ、君も来てくれ。シルヴィエ語がそれほど得手ではないのだ。今さつきレオンはアッシューラ語を使っていたようではあるが」

アッシューラ語とは世界共通語で、その起源は太古に南北両大陸を跨ぐ世界統一国家、アッシューラ・アスラ・アーク帝国に由来していた。

「わたしも行くわ」イキリアは強く言ったが、普齊ふせうが制止した。

「いや、イキリア、君が行くのは少々軽率だろう。それにこれは恋人同士の再会の場面ではない。第一に現状では、危険を伴う可能性がある。

気持ちには分かるがね。だから」

燎々りょうりょうが皮肉を込めて話の腰を折った。

「あら、もうイキリアの話はすっかり既成のことになっているのね。さつき辛うじて無罪放免になったばかりじゃないの。もうすっかり信じ切っているのね。

私はイキリアに行ってみて欲しいよ。それで真偽も判るわ」

普齊ふせうが顔を顰めながら続けた。

「だから、彼女は行くべきじゃない。代わりにと云うわけではないが、彝齋いさう肯、ぼくも行こう。何、万が一、犠牲になったとしても構わんさ。どうせやる向こうがその気なら、壁を崩され、死ぬ運命なのだ。同じことさ。

諸君にこう言うのも何だが、レオンは身分の高い人間だから、相手の身分をも気にかけるかもしれない」

爛々と眼を青碧に濃く燃やしてイキリアが言い放つ。「レオンはそのタイプじゃないわ」

い

普齊が陰悪な表情を瞬時したが、すぐに取り澄ました顔に戻った。燎々りょうりょうが眉を上げる。「今日はまた随分と熱いわね、イキリア」

イキリアは憤然と睨んだだけで、それ以上言わず黙った。

「さあ」彝齋いさう肯が嫌気の差した顔で言う。「ここで争っているときではない。速やかに対応しよう。レオンへの嫌疑が濡れ衣である場合を考えたまえ」

そのとき、唐突に龍肯りょうけんが言った。

「いや、僕が行くよ」誰もが驚いた顔で龍肯りょうけんを見た。思ってもみなかったことを言われて。彼自身、余りに驚かれていることに驚き、戸惑っているようであった。言った。「いや、彝齋いさう肯も普齊ふせうもこの革命の為に必要欠くべからざる重要な人物だ。どこの国でも国王や皇帝が使者に立つ国はない。それならば、通りすがりの旅人でしかない僕が行くべきだと」

療々が言った。

「どこの国でも通りすがりの旅人を使者に出す国はないわよ。まあ、あんたをそんな他人行儀に思っではないけれど・・・龍肯、あんたは私たちの仲間よ。でもね、龍肯」

「僕ではこの大役に役不足だと言っただろう、療々。でも、そうでもないんだぜ。何より僕はレオンに会ってみたいと思っっている。それが最良の条件だ、会見に臨む者としてね。そう思う」

一同何と応えるべきか、迷っているようだった。反対に龍肯の方は明るい爽やかな表情であった。彼にとつて、あの異様な戦車の群れの待ち構える中に、名もなき刺青者が丸腰で、天晴れ勇壮なレオンと対峙することが何とも快かつたのである。民族紛争で鬱々としていた彼は、刹那の清風とでも言わんかのようにであつた。

ズ裂が嗤笑した。

「いいじゃないか。行かせてやれよ。モスコール市民の運命を預けてやろうじゃないか。尤もそれほど大變なことはないのかもしれないが。レオンが本当に当初の予定どおりに俺たちの味方ならば」

イキリアは口を開きかけたが・・・止めた。

普齊が反論し、彝齋肯は心から憂慮して止めたが、他の人間が納得してしまった。舍却が言った。「龍肯の意見に賛同ならば、私が伴うことにもまた同様賛同を戴ける筈だ。龍肯の衛護として随行しよう。そして」その言葉を持たず爽烈が応える。

「無論、自分も行く。理由は明白、彝齋肯に同行する筈だったときと同じだ」憂貴の目が心配そうに揺れていたが敢えて言うことはしなかった。療々が声を上げる。

「さあ、行つといで！」

決定した。

三人は縄梯子で下りた。レオンが騎馬で独り走り寄る。

龍肯はその無用心すぎるほどの傲放さに舌を巻いた。モスコールが彼の思っているような情勢でなかった場合、不用意に市壁に近附くことはレオンにとって危険な筈なのだ。

龍肯は目のまえに聳える、騎馬の人を逆光で見上げた。

これがレオン、イキリアと愛し合つた男なのだ。

レオンは緊迫した空気をものともせず、快活に声をかけてきた。

「久しいな、爽烈よ」

「閣下！」爽烈は泣き出さんばかりに喜びを浮かべて馬蹄に跪いた。レオンは爽烈から視線を外し、舍却と龍肯とを見下ろした。舍却は片膝を突いて辞儀をした。龍肯は突つ立ったままだった。レオンは会釈する。彼は龍肯の刺青に動じた風もなく、眉も脛も寸毫動かすこともなく、騎乗から言った。

「諸君らは、革命モスコールの偉大なる市民らの代表だな。俺がレオン、レオン・フランシスコ・デ・セヴィーリヤだ。」

偉大なる決起を遂げた諸君らの勇氣と行動とに最大限の敬意を捧げよう」

だったら、馬上で言うなよ、と思つてしまった龍肯は、多分、自分がイキリアのことで嫉妬心を抱いているのだらうと気が附いて目を伏せた。舍却が応えた。

「レオン閣下、御名まえは以前より久しく聞き及んでおりました。私は聖ドミコクス騎士修道会の聖殉教騎士、しやきや舍却と申します。

閣下・いや、されど、レオン閣下、我らがモスコールは昨日より自由と平等との土地となりました。ゆえに誠恐れながら、閣下と呼ばせて戴くことは、これより後は控えさせていただきとうございます」

「無論だ。そうしてくれ」
しやきや

舍却が続けた。

「それでは、レオン殿、実にここに於いて我々は御伺いしておりました情報との余りの差異に戸惑っておるのです。見る限りは夥しいシルヴィエの軍団。これは、いったい、どうしたことでしょうか」

「尤もな言い分だ。実はな」レオンはレストフを『口説き落とす』た顛末を簡略に話し、号令一つで全軍の武器を下ろさせる。戦車からはハッチを開けて中の人間が出てきた。

「それから」とレオンは言った。「レストフの一個師団は市壁の中へ入れない。一部士官のみだ。街へ入れれば、軍隊の緊張は緩むし、所詮、無骨な職業軍人、気を使っても市民を怖がらせるだろう。兵隊は悪意がなくとも自然、街を荒らすものだ。師団を四面の壁の外に陣営を作って防壁にあたらせる。それなら異存はない筈だ。

さあ、今の俺の意見を持ち帰って合議してくれ。俺は待つ。

なるほど、これほどの軍を連れた外国人を簡単に街へ入れる国民など世界のどこにもいはしない。だから、俺の言葉を君ら以外の代表者ら全てか、若しくは全人民へ宜しく取り次いでくれ。レオンに他意はないとな。

そもそも一般市民らは俺の存在すら今日初めて耳目にすることとなるのであろう。

不信を抱くも止む得まいが。どうか頼むぞ。
そうれ

爽烈よ、おまえは既にモスコール市民の信頼を得たようだ。全てはうまくいっているようだ。
そうれ

ならば、爽烈よ、俺の分も宜しく頼むぞ」

そのときである。りよう龍肯とレオンとがふと目を合わせた。刺青などに気を取られなかったレオンが、今、りよう龍肯の眼差しに深い情感を読み取って、複雑な表情に顔を曇らせる。りよう龍肯もまたそれに気が附いて再び目を逸らせた。

「名を聞いていなかったな」レオンが言った。
りよう

「龍肯」

そう応えた。

「で、問題は市民らにどう信じてもらったらよいかだな。唐突に彼らシルヴィエは味方です、と言ったってなあ。取りようによつては、レオンとの密約は純粹な市民たちからは裏切りとも取られかねないしなあ」
はらみ

叭羅蜜多が両腕を後頭部にあてて背もたれに仰け反った。

誰もがそれぞれの思惑で、一様に困惑の面持ちをし、楼閣の中で額を突合せるように囲みを為している。りよう龍肯としやきや舍却との報告を聞いて、一同考え込んでしまったのだ。

りようりよう

療々が烈火と喚く。

「何でもそんなやましいことになったのよ。私たち何も悪いことはしていない筈じゃない。少なくともレオンなんて昨日までは知らなかった者たちは特にね」

苦々しげに普齊が応えた。

「まあ、ぼくの計画には一面的に陰謀的な性格がなかったかと言われれば、否定はしないけれどね。

革命の為に戦略的な密約や、裏の手内があったって何ら不思議はないだろう。

美辞麗句的な精神では事は成らんのだ。この世は飽くまでも現実でしかない。単なる現実でしか。そうだろう。

君らにも説明したように、圧倒的軍事力を誇るシルヴィエと最終段階で戦うのだから、相手を分裂させ、またその分裂した一方を味方にと云うのは、可能でさえあれば悪い手ではない筈だ。そして、現にそれは可能となるべく手筈を整えることができた・・・」

普齊はここで少々口籠った。眼尖だけで同胞らの表情を窺った。どうやって？と訊かれるのを畏れた。ラグナレク伯爵のことは絶対に言えない。さらにそれでマールとの密約が露見すれば、彼の立場は最悪となる。唾をゆっくり飲み込んで、彼は再び慎重に、言葉を紡ぎ始めた。

「だから一も二もなく、ぼくは爽烈と手を結んだ。彝齋肯、君にだって以前からそう話していた筈だろう」

彝齋肯は思慮深く目を細めた。

「そう、確かに私は聞いていましたよ。

子爵、いや、普齊氏の言うとおりで、実態としてこの件に本質的な問題はないのだ。ただ、レオンの来るタイミングが問題であっただけだ。誰しも昨日今日で革命がなるとは考えていなかった。平時であれば、いくらでもやりようがあったのだ」

叭羅蜜多がいみじくも言う。

「だが、こうなってみれば、レオンをモスコールへ迎える必然性から問い直した方がよからう」

爽烈、再び怒る。

「何と、無礼な言いようだ」

叭羅蜜多、平然と応ず。

「革命によって、我々は飽くまで科学的な理性、実態実践主義的に語るのだ。繁文縟礼な辞儀など不要だ」

「人倫の道はどうなるのだ」

真つ赤になつて口角に泡を飛ばす。

療々が疲れ気味に言う。

「そうね。少なくとも人間味に乏しい接遇よね。人の感情と云うものを配慮しないことが現実的かしら」

彝齋肯が言う。

「まあ、落ち着いてくれ。諍いにしても、無為に時が過ぎるだけだ。レオンを迎えることに何ら疑義はない。彼が我らと同じく、真の人間の理想を求めてここ革命に身を

投じようとするならば」

重い溜息が流れた。時間はない。選択肢は皆無だった。眼前の機械化装甲師団を無視はできない。民衆への説明は必要なのである。

事はいとも簡単に収まるべきへ収まった。

普齊はモスコールの聖人、聖モンターニユの柱像が聳える広場で大衆を面前にして、苦し紛れにこう謳った。

「シルヴィエ側から我々の革命行動に感銘し、また彼レオン自らの理想との合致を見出して、流浪の貴公子であつた身をも畏れ顧みず、一個師団を説伏し率いて、我々が革命に参加を申し入れてきたのだ」と。言いながら普齊は思ったものだ、「ぼくなら、こんな話を聞かされても絶対信じない」

だが現に、モスコールの民衆は歓呼を以て迎えた。レオンの師団に対する処遇を聞くとさらに信頼を深めた。燎々があつさり言つてのけた、「要するに、御祭り状態なのよ」

紛れもなく、そう云うことであつた。だが、犖齋肯は、普齊が幾許か負い目を感じながら恐れつつレオンの紹介を行つたその同じモンターニユ広場で、革命勝利宣言の壇上から高々とこう宣言した。このとき普齊と犖齋肯の力関係は逆転したのであつた。「民衆こそが国家の実体である。王権は実体ではない、政府は組織にすぎず、すなわち架空のものである。民衆こそが真実なのだ」

市民の歓呼はまさに怒号であり、怒濤であり、身を裂かんばかりの狂気に近かつた。燎々は壇の傍らに隠れるように立ちながら、炎がこう云う状況を侮蔑していたのを思い出した。

思ひは龍肯も同じだつた。だが、誰も無味乾燥なる真実に依つては生きることができない。偽りの夢に酔い痴れずには。生存が人間に与えた畏に絡め取られずに生きることなどどうしてできよう。執著、何人も自分を肯定してくれる何かを、自己を肯定するに足りる要因となる何かを、鬱屈の苦しみから解き放ち飛翔させてくれる何かを、狂おしく求めざるを得ないのだ。異性や美食、権力や金、正義や真理を。

「だが、炎よ、君はそれを如何にして革命せよと言うのか。僕は構造にすぎない」

龍肯は独り呟いた。

夜は宴となつた。破天荒で無礼講な乱痴気騒ぎで街は覆われた。酒と歌とが流れ、氣勢や踊りであふれた。無鉄砲が横行した。誰もが先を競つて無茶をした。

「当面の危機は去つた」

犖裂は言つた。

急設された祝賀の席上で（そこは市街戦によつて覆された某高級レストランの大広間で、壊れかけたシャンデリアがかけ直されていた。今日集まつた人々は誰もがかつて一度として足を踏み入れたことがないような場所であつた）、乾杯の盃を挙げた。「だがしかし、いずれは離散した貴族や拿捕されなかつた一部政府要人らによつて、連邦政府が軍備を整え、やつて来るであらう。またそのときには、シルヴィエ帝国も

非情なる鋼鉄の軍隊を送ってくるであろう。

そのときは例え滅びても、俺たちは戦い抜こう。諸君らの勇気と正義、そして、革命の勝利に、いさう乾杯」

そのとき、彝齋肯が雰囲気を一身に奪うように立ち上がって声を挙げた。

「まさしく。いや、滅びようとも、我らの正義と真実とは、永遠だ。自由と平等とを求めて身を捧げた我らは。太陽に近附こうとして灼熱し墜ちるイカルスいさうの翼のように。

天のように我らは不滅だ。我ら民衆は。

ならば、公然と哄笑のように、動することなく、今一時の平和を楽しもうではないか。明日、再び我々は苛烈な戦いへの支度をするにしても。

重ねて杯を尽くそう。乾杯！」

鳴り響く乾杯の叫び。

厳肅な面持ち、悲愴を湛えた蒼白で過酷な表情を崩さぬレオンはこの場の氣勢にそぐわぬ、異様な威圧を漂わせていた。イキリアはいつもどおりであった。微かに唇が、時々顫えた。

イキリアとレオンとは、この席上で、イキリアが帝国を出奔して以来、初めて顔を合わせるのである。

爽烈そうれの配慮によって、帝都から伴った腹心の従騎士を通じ、レオンは彼女のいることを入城の直前に知らされていた。

レオンはイキリアの姿を目に留めると、杯を口に附けるのを止め、爽烈そうれとの会話を途切らせ、何かを言おうとしたが、気が附いたイキリアが蒼凜たる眉を以て毅然とした態度を示し、許さなかった。

レオンは厳かに臉を伏せて黙礼だけをした。

傍らで眺めていた龍肯りょうけんは、抑えることが反って氾濫させるその余情の場面に、心を疼かせた。

参廊さんろうがイキリアに近附いて、杯を合わせた。

「イキリア、あなたは美しい人だ。おれは、あなたの美しさに目覚めさせられ、革命的民衆を弾圧することの非を悟ったのだ」

イキリアは隙のない微笑で参廊さんろうを見据えて応えた。

「東駅で会ったのが初めてだったわ、参廊さんろう。まるで別人のようだけれども。理解してもらえてうれしいわ。それでは、また」そう言って、そそくさと居場所を変えてしまった。

参廊さんろうはゆっくり微笑みただけで見送ったが、それで終わる様子ではなかった。またすぐにイキリアへと近附いた。

「イキリア、恐らくあなたはおれを誤解しているのだ。おれは、常にその時点でおれが信じたおれの真実を貫いてきたつもりさ」

「ええ。分かっているわ」

そこへ普齊ふせうが割り込んできた。

「いや、実に参廊さんろう、君のような有力な人物が革命側に附いたことをうれしく思うね。当初からこのことに心を砕き、身分を危険に晒してきたばかりとしては」

それはことさらイキリアへ聞こえるように言っているのであった。

龍肯は目を叛けた。そして、敢えてレオンに近付き、話しかけた。「僕は君の考えが聞きたいのだが・・・」樂夏が頬を膨らませて、龍肯の肩を後ろから叩く・・・樂奏が始まった。

燎々が柱に寄りかかって杯を傾けながら、舍却に言う。

「革命なんてこんなものね」

だが、舍却はその哀しみの湖のような眼差しで、彝齋肯と・・・そして、イキリアの動作を追ったまま黙っていた・・・傍には憂貴がいる。彼女は家族が無事にモスクールを脱出した知らせを受け取ったばかりであった。「舍却様、父母も無事です。いつか私の家族も解ってくれるでしょう」「そうです。必ずいつかは。憂貴御嬢様・・・」けれど、その舍却の表情は捉えどころがなかった。心ここにあらずである。

爽烈はズレの肘を肘で突いた。

「本当に美しい。レオン殿が心募らせたのも不思議はない」

「けつ。くだらねえこと言っているなよ。軍人なら、次の展開に腐心しろ。民衆を護るのが、俺たちの務めじゃないか。イキリア、イキリアって」

燎々を引っ張り込んで、彝齋肯がイキリアのところへ来た。「君らは革命の発火点だ。さあ、乾杯をしよう」燎々は横を向いた。イキリアは言った。「いいえ、あなたが主役よ。彝齋肯」

一方、

「龍肯、シルヴィエは腐敗したのだ。いや、今や世界が腐敗している。我々は世界革命を起こさなければならない」と長身のレオンが言う。王威のような輝きがあった。神の像のように、崇拜と犠牲とを生む類いの莊嚴であった。普齊が無意識に舌打ちをし、彝齋肯が繊細に眉を蹙めた。

革命の夜は更けた。

龍肯は独り貧民窟を歩いていた。もともと酷かった場所がさらに荒れていた。足下はぬかるんでいる。解体市場から捨てられた動物の内臓がそちこちで臭っていた。女たちは裸足だった。ぼろでない服を着ている女たちは街角に立つ娼婦だった。皆が最悪の顔色だった。若い男女らは数人が一枚の布に包まって素足をすり合わせている。時折りパートナーが交換された。もし慈善院の僧侶がそれを咎めても、痛罵され、嘲笑されるのがおちであった。「童貞ちゃんはお呼びじゃないのよ!」

酔っ払った男は女房をぶん殴った。彼らは威勢がいいだけで女々しい不満の塊だった。

こどもは路上で寝た。小さい身体をいいことに煙突掃除の仕事をさせられ、怪我をする子が絶えない。

貴族たちは利己的で悪徳に満ちていたが、庶民がどう違うと言うのか。皆人間は同じ構造を持っているのだ。貴族だって貧民に生まれればそうになっていただろうし、貧民だって王侯貴族に生まれついていれば絶対に同じ事をしたのだ。龍肯はどこにも行き場のないあてのなさを抱えていた。姉妹の死と、イキリアへの切ない思いとを。

晩秋の日が差し込む教室。

黄金色の光が斜めに空間を区切って、異なる画面を繋いだように埃を燦めかせている。

自席の机上に置いていた書籍を手を取って、龍肯は普齊に向かい言うのだ。

「ファルコ・アレハンドロ・オステロの小説。『ラグナレク・ノアイユ伯爵』って言うんだ。聞いたこともないのか？」

「知るかよ」

そう言いながら普齊は龍肯の手から奪って頁をめくった。

「ふん。大したことないね。何だ、こりゃあ。『MARIEは兵士の額を左手でつかんで持ち上げると、右手を相手の顎にかけてそのまま胸元まで裂いた。血飛沫が烈しく噴いた。それをまともに受けても、この殺戮者は眉一つ動かさなかった』スプラッターものかよ。おまえ、ただでさえ陰気なんだから、読むもの考えろって。」

大体、何だよ、このMARIEって。女じゃないのか」

「全然違うよ。ブラッディ・マリーって云うカクテル名から来ているのさ。分かるかい。血塗れのメアリーのもじりだ。」

血塗れの殺戮者と云うことさ。非情な殺し屋を敢えて女性名で仇名しているところが、仇名のひねりなんじゃないか。

彼が非情冷血な人間になったのには、わけがあるんだ。御託ばかり言っていないで、おまえも読んだらどうだよ」

「本なんて、子どもの頃にもうぼくは読み飽きたよ。暇じゃないぜ」

「子どもの頃ね」

「で、何がMARIE君を変えてしまったんだい？」

普齊ふせうの従騎士コルドバはカルパチアン山脈の末裔であるコロセウムス山の街道を登っていた。大狼二匹を剥いだ毛皮を防寒具の両肩の上に羽織っている。無骨ではあるが、麓の獵師から買い求めた実用品であった。

「荒れそうだな」

従者サントモレが曇天を仰いで呟く。そのとおりとなった。

吹雪が起こつて忽ち馬の膝が埋まる。日暮れまで幾刻か猶予があるが、この天候では山小屋への距離には及ばない。

「どこか人家はないものか」「近くに伯爵の狩獵用の休憩小屋があったと聞いておりますが・・・」「それがいい。どの辺りだ」「恐らくは・・・」

一時間後には四苦八苦の末、槍持ちのパテロも含めた一行三人は玄武岩造りの厳しい館についた。窓の少ない組積造はロマネスク調で、陰鬱な感じを与えた。

「ひどく古い感じだな」

「何しろ、古代から連綿と続く御家柄でございますから」

「誰かいるだろうか」

「おそらくは管理を任された者か、守衛がいそうなのですが・・・」

サントモレは使用人通用口と思われる扉の鉄輪を打ち鳴らした。反応がなかった。

「無人だろうか・・・残念ながらそのようだ」

「窓を破って入ろうか」コルドバは言ったが思い直した。「いくら何でも無茶であるな・・・せめて厩くらいには入れぬものか」

三人が引き揚げようとしたとき、どこから現れたか鎧で装甲した戦士が五、六人で彼らを囲った。コルドバは慌てた。「何者か」

無言で戦士は抜剣した。幅広で両刃の剣であった。見かけない造りだ。

「名乗れ、貴様らは何者だ。我らラグナレク伯爵へ火急の用務ぞ」

だが何ら変化も見られず、過酷なる戦士たちはじりじり近附く。その隙のない気迫にコルドバは圧倒された。

「待て！」別の方角から鋭い声がした。コルドバは振り向いた。

そこに立っていたのは、黒い鎧で装甲された長身の戦士であった。コリント風の兜で殆ど顔を蔽っていたので、表情等は全く窺えない。コルドバは警戒を解かず訊ねた。

「諸君らはいったい、何者だ。なぜ、我々を襲うのか」

「貴公を襲撃するつもりはない。当方は防衛の為に構えたただけだ。先手こそ必勝の要と心得る。貴公は今、ラグナレク伯爵の名を言ったな」

かすれた少年のような声であった。

「さよう。そちらはもしや、ラグナレク伯爵殿下の御手の者か」

黒騎士は全身を覆っていたマントを開いて、鎧の胸の部分にある紋章を見せた。

「うっ」コルドバは唸った。自らの尾を咬む原蛇像の浮き彫り、それは南大陸の大帝国、マールロの紋章であった。

「貴殿はすると、マールからの使者・・・」

「如何にも。そして、貴公らは普齊子爵ふせうの使いと見た。如何か」

「恐らく貴殿が」

「察するがとおりぞ。私はマール帝国皇帝羅班陛下らはんより使わされた近衛騎士団機甲部隊隊長、アイリツシュ・ティラノだ。貴公の名は」

コルドバは片膝を突いて、礼を執った。

「普齊子爵ふせうの従騎士、コルドバと申します。火急の特命を受けて、ラグナレク伯爵を御訪ね申し上げる途中にあります」

「ならば、我が意を得たり。実に伯爵はな、貴公らの訪れを予知されて、御配下の者を迎えにやらせようとされたのだが、当方こちらへ滞在以来全くの退屈の身、礼にあたらぬとは思いながらも、徒然の慰みに御身らの出迎えと衛護との役を引き受けたものよ。何とならば、最近頻りとこちらへ忌むべき殺戮者の徘徊する旨、伺っておれば」

「何と。伯爵は我が来訪を察知されていたと仰せられるか。何の前触れもなく突然に、訪なうたものを」

「それ、そこが伯爵の摩訶不思議よ」

「まさしく・・・して、アイリツシュ殿、その危険なる殺戮者とはいいたい・・・」

「知らぬのだ。いや、詳細を知らぬと云う意味だ。ただ、MARIEと云う名のみ。噂では、百人の武装せる戦士も一晩で屠ると言う・・・現に伯爵の兵士が巡回の折りに幾人も惨殺されておる。それは、凄まじくも見事なものよ。バラバラに、どうやら素手で千切っているようであった」

「恐ろしい。だが、面妖な。MARIEとは・・・女性であるか」

「否。ただ、そう云う通称であるらしく、本名も正体も不祥だ」

「何と・・・」

「さあ、それよりも火急の用務であろう。ささと行こうぞ。湖上城へ。それとも吹雪に気も殺けたか」

突如、ばさりと物音がした。枝の雪が落ちたのだが、全員が驚いて振り向く。コルドバはそのとき見た。アイリツシュが佩いていた剣を抜いたのを。それまではマントと雪とのせいではつきり見えていなかったのであるが、今、その恐るべき全貌を現した。いわゆる斬首剣と言われるもので、首切り役人が使う両刃の剣であった。一度切り振り下ろすことだけしか考慮されずに造られた大振りの剣であり、およそ戦闘向きではない。ただし、確実に相手を真つ二つに裂く。

それにしても如何に斬首剣とは言え、見たこともない大きさであった。刃幅が最大部分で一五cm以上、長さは柄から測れば優に一七〇cmを超えるであろう。とても人間の振る大きさではない。だが、抜剣したスピードは常人の動体視力で捉えられる速さではなかった。それも片手だ。さらにコルドバの驚きはそこで終わらなかった。

「ふふつ。これは粗忽をしたな」そう言ってアイリツシュは剣を鞘に収めると、兜を外し、笑顔を見せた。

彼は、いや、彼女は褐色の膚を持った女性であった。黒髪が一気に腰まで垂れて、雪風に棚引く。コルドバは血の気が引いた。

吹雪の行軍は過酷であった。

だが、過酷さに慣れた南大陸の騎馬民族戦士たちは慣れぬ雪路をものともせず隘路を登るのである。コルドバは舌を巻いた。

道はまさに狭き難関で、馬を下りて牽きながら、這いつくばるようにしなければならぬ。烈風が引き剥がそうとする。息も吐けぬ。やがて夜が開けて、コルドバは吹雪の止んだことに気が附いた。

突然に視界が開け、頂上にいる。

曙光差す眼下には下りの急斜があり、足下には湖畔の都市、広大な静寂の湖、その中央に立つ峻厳な城。壮観に苦痛を忘れた。

これが天下に名を響かせる湖上城。想像を絶する景観であった。

夢魔の子と伝えられるラグナレク伯爵の居城は、無表情な城砦の中心に行けば行くほど、尖塔群が高さを増し、天空を突き進むようにも見える。湖周辺を囲む山脈にも怖じぬ森厳さで見る者を畏怖させる。人間の造型物とは思えない。

光が差すだけで、未だ太陽の姿の見えぬ時刻。湖面は深い紺色と薄い蒼、幾許かの燦めきを呈している。木々は湖に近いところに疎らにあるだけ。樹木たちは言葉を忘れたように静寂を木霊させていた。切り立つ山々は湖から直截に聳え、銀色の岩膚を深い陰翳に眠らせつもまた、凸部を薄い黄金に浮き上がらせている。莊嚴の一言に尽きた。

「さあ、行こうぞ」

アイリツシュは非情に促す。

現実に戻って、登り同様険しい岩場の隘路をしがみつくように下る。こうなると、山脈も岩や土くれの連綿にすぎない。

ようやく終えて辿り着いた麓にはわずかな平地すらなく、すぐ眼前がもう空を半ば覆うほど高く垂直に聳える市壁であった。壁は荒々しい玄武岩でできている。

難攻不落の街の名はラスコーと言った。

半円形の壁に一方を囲まれ、また一方が湖であり、湖畔に沿って広がっていた。港があつて、そこから湖上城へ渡ることができるのだと言う。

アイリツシュら一行は市門に向かう。コルドバらも続いた。

巨石を用いた門に近附くと、王城の近衛兵のように壮麗な武具で満艦飾の門衛が厳しく長槍を立てて八人構えで屹立していた。平時にあつても、戒嚴令の物々しさである。

アイリツシュの従者の一人である戦士が符を見せると、門衛は黙したまま通す。ここに至るまで、全てが寡黙に執行されている。

入城すると、風景は一変した。赤や黄色のファサードを持つ四、五階建ての商家が並び、屋根瓦を日照に輝かせている。市参事会館、ギルドの会議場や政務庁舎、裁判所、警察署に商工会所有の大倉庫郡、図書館に大学院、芸術アカデミー院、歌劇場、公会堂、公衆浴場、円型競技場、遠くに見える煙突は鉄工場、製糸工場、そして、これほど高い建物ばかりなのに、大聖堂の鐘楼がいくつも抜きん出て見える。

広場に人々や馬車があふれ、服飾も豊富だ。

コルドバは街の様子に強く惹かれた。いったい、このような難所にどうしてと言う

ほど、華やかな国際都市なのである。

街は晰らかにそれと分かる外国の人々や物資であふれ、アイリツシュらもさして人目にかかるものではなかった。珍しい食糧の氾濫する市場は色鮮やかに賑わっている。喧騒と街頭音楽、見世物小屋の群れ。カフェを忙しく廻る給仕。ショーウィンドーが大通りに列する。

「四方を湖や峻峰に囲まれ、なぜこのように交易や交通の要所の如く富栄えているのであるう」

コルドバが呟くと、アイリツシュが応えた。

「貴公らは北西の街道から来たせいだ。湖の向こう側には古代の地殻変動によってできた溪谷があり、そこが東南の街道につながっているのだが、そちらからは航路も取れて人や物資の輸送が容易なのだ。」

ただし、軍勢は溪谷で伏兵による弓矢の雨を浴びることになるのだがな」

ゴシック様式の尖塔を持った古い教会に入った。ひっそりしていたが、白い装束に赤い肩飾りをつけた一団が無言で待っていた。

アイリツシュが言う。

「あそこにいるのが、伯爵の御迎えた。さあ、湖上城へ渡るのだ」

教会内に馬寄せがあり、一行はそこから五台の四頭立て馬車に分乗して、港を目差した。夕闇が急激に深くなったかと思うと、優しい雨が落ち始めた。石畳の市街を抜けて、港に着く。湖上に聳えて天を衝く湖上城の偉容がくつきりと穹を分割していた。

船は喫水線が浅く、外板が鎧張りで、反り上がった舳先が龍の形をなし、精密な紋様が彫られていた。聞くと舳先職人は他の船大工より倍の賃金を貰うのだと言う。

左右併せて十六本の長大なオールが高く挙がって動くとき、俄かに雨が強まり雲の動きが速まった。

アイリツシュが舳先の傍に立つて、屹然、湖上城を凝視する。城は次第に大きくなる。近附くにつれ、畏敬の感は遠望したときの比ではなく、脚から力が抜けるような感覚さえ覚えるのだ。湖の中央に聳える大磐のうえに、さらに檣の穂矢のように上空を突き刺す城を建て、世界に名だたる奇観と呼ばれた城が今目前に迫っている。天穹を半ば塞ぐ偉容が我が身を脅かす。

「恐ろしいものだな」コルドバは思わずにいらなかった。モスコクールでラグナレクと初めて会ったときにも、これほどまでとは想像し得なかった。

モスコクールの翌日は祭典の日ようであった。

無論、革命の勝利を記念した祝典があるわけでも、御祭り騒ぎが続いたわけでもないが、市街の意気軒昂は霽天の如くであった。

普齊は憂鬱に机上に肘を突いて、作成中の案文を放っている。彼がいたのはかつての自治州政府があった建物で、元はと言えば、七百年以上もまえにバリヴオ王が住まわって政務を執ったリイリユイー宮殿であったものだ。尤も数回に渡って、歴代ユヴインゴ王が改築を施し、往時の面影はない。

亜麻仁油で磨いた美しい木目の楓製の執務机は、十二年まえまでユヴィンゴ王がこの地域に関する公文書に署名した机であった。

「普齊、何を悩んでいるの」

燎々が入ってきた。彼の応えは素っ気なかった。

「別に」

再び案文に向かうと、擱いてあつた鷺鳥ペンを手に取る。

燎々が言葉を続けた。

「彝齋肯は盛んなのにね。外に出回って休む暇もないわ。物資の搬出入統制局や食糧管理局なんかを創ってね。物資の流通を一本化して管理すれば、搾取や買い占め、値の吊り上げをチェックし易いわ。

適正な供給体制を作って、民心を捉えている。郊外の農民も作物を高価に買い取られて、革命側に与し始めているって話よ。噂だけだね。だって、私たち外に出られないじゃない、今は」

普齊は応えた。

「ああ。

しかも彝齋肯は、造幣廠や塩の専売所を抑えて、財政基盤をも作りつつある。

通貨発行収益金や塩の専売収益は馬鹿にならないものだ。また食糧や物資の出入りを管理すると云うことは、それに伴う税の徴収も管理することができる。

無論、彼の性格は知っているから、損得を図っての行為でないとは思うがね。彼は理想を実現する為に、急激に彼自身の下に権力が集中するよう、あらゆる基盤を意のままに創ろうとしているのだ」

燎々が鼻尖で嗤う。

「さすが彝齋肯は法律の専門家よね。

財政基盤って言えば、大学教授や学者なんかの有識者を集めて私設諮問機関の財政委員会を設けたって話よ。

貧民窟から富裕市民層まで彼を支持しているわ。ギルドも職人組合も労働組合もインテリもブルジョアも市民共同体も無政府主義の学生たちも、彼の新しい税制案に一応の共感を示している。

直接参加型の議会制を設ける案もぶちまけているけれど、大丈夫なのかしら。まだそんなことをするよりは、革命体制を堅固に整えて安定を図ったり、民情を慰撫したり、次の戦いに備えて軍備を拡充したりするべきじゃないかと思うけれどね」

「軍事に関しては、裂がレオンを顧問としてうまくやっているよ。裂の人氣も大したもののだ。奴は炎に次ぐ英雄だからな」

「彝齋肯の速さは驚嘆に値するわ。尤も彼の使う労働組合やコミュニティへのネットワークは元々あんたの作ったものらしいけれどね。

ねえ、普齊、あんたさあ、爵位を捨ててから、元氣ないみたいね」

「爵位など妄想なのだ。ぼくには初めから興味が無い。革命の第一の必然、人間の平等だ」

「高邁な思想よね。でも、庶民は大して関心を惹かれないみたいね。感動していた市民も多かったけれど、まずはパンよ。私たちもそうであったようにね」

「当然さ。それで良いのだ。それが健康な状態であり、それを肯定せずして人間的な幸福はない」

燎々りょうりょうは可笑しそうに微笑した。

「で、あんたは今何しているの？」

普齊ふせいは案文をひらひらさせた。

「見てのとおりさ。憲法の案文を作っている。革命の理念を確固たるものにするのだ。

革命評議員の仕事さ」

「深遠な仕事よね。でも、民衆の人気は取り難そうね」

「庶民を馬鹿にしてはいけない。関心を持つ者も多い。人間は一樣ではない。国家単位でも身分階級単位でも人種民族単位でも性別単位でも生まれ年単位でもね。今は時代が滾っている。革命の理想はまだ高く、かつ熱いのだ」

「馬鹿にするわけがないでしょう。私も庶民中の庶民よ。この世のことは実際には理念や主義では動いていないのよ。そんなもの、形骸だわ。ただの理論武装や方便よ。自己正当化の戯れだわ。

違っ？」

「そうとも言える。

いや、そうなのだ。だが、そう割り切ってしまうえば身も蓋もない。政治はそれでは成り立たない」

「ねえ、そう云う弊害を打破するのが、炎ほのの革命魂だったのよ」

「革命は炎ほののものではない。民衆の訴えだ。

ええい、やめだ。今日は気が乗らない。燎々りょうりょう、食事はまだかね。よかったら、昼食でも一緒にどうだい？」

「残念ね。私はこれから炊き出しの配給でイキリアと各地を回って食材の確認をしなくちやいけないのよ」

龍肯りゅうけんはどうしているかな」

「あなたが知らないの？ 多分、仮設住宅を作るためのボランティアの職人を探しているわよ。彼には憲法作りなんか、現実的と思えないみたいね」

「らしいね」

湖上城に於いて、ラグナレク伯爵がコルドバの為に用意した部屋は一従騎士にあてがわれるものとしては、破格の上室であった。

晚餐を終えて、執事に案内されたコルドバは、一步踏み入れて驚嘆した。純白の壁布、漆喰の浮き彫りに金細工を施し、家具調度類は華麗な寄木細工で、大理石の暖炉に赤々と火が燃える。その上に金の置時計。

天蓋付きのベッドには羽毛の掛け布団が柔らかに載せられ、房飾りを四隅に附けて絹地をあしらった枕、清潔そうな寛衣が用意されている。

アーチ型の大きな硝子窓に寄ると、遙か下に湖面の生地目のように細密な波が、月光に照らされているのが見える。見渡しのきく明月だった。山容が時の静止のように幻想的である。

見下ろしながら、コルドバは湖上の大磐のさらに上に建つこの大建築に文字通り登城するときの奇異を思い出した。それは大磐の垂直絶壁の部分を利用して、突き出した巻上機を使い、四点を吊るした箱に乗って引き上げる方式であった。強風のときは用い不了と言いが、横揺れによる断崖への衝突を避ける為に距離を設定してあるのは無論で、併せて箱の下部にも四点綱を付けて下から一定の引張りを加え、左右されぬよう工夫してあった。尤もそれでも相当揺れて、恐怖を覚えたが、通常経路の中ではこれが一番速いのだと言う。

他にも大磐を螺旋状に廻る登り道も削岩して造られていて、馬でも行けるらしい。昇降機の中からコルドバにもその一部が判別できた。他にも非常用の道があるのだろうが、当然分からなかった。

謁見の間では、それ以上に驚かされた。

格子天井にフレスコ画を繁縷させ、両側を百数十本の円柱とアーチとが列し、側廊を為していた。その外側はバルコニーで、怪獣を刻んだ欄干の上にずらりと数十の実物大の神像、英雄像、聖人像などがポーズをとる。左右の列柱アーチを通して、室内から両湖畔が遠望できた。湖の風が身に染入る。

コルドバが口上を述べるまでもなく、銀製の龍神が数十匹巻き附く上座に着くと白金髪が床に垂れんばかりになる伯爵ラグナレクは、氷の如き薄青の眸を凍てつかせて、怖気を催させずにおかぬあのかすれた声で言う、モスコールは革命だそうだな、と。呆氣にとられたコルドバはようやく我に返って答えたのだ。

「閣下、御言葉を返すようで恐れ多き次第であります、現状騒乱は起きておりますところではあります、未だ革命までは至らぬ状況にて・・・」

だが、伯爵の王党は冷笑的ですらあった。それは騎士よ、そちらが州都を出たときの様子であろう、と。コルドバは愚弄されているのではと云う念を起こした。

「何と仰せられます、閣下。あたかも御覧じられたかのように、仰せられます」

コルドバにはラグナレクがゆつくりと微笑したように見えた。言った。この物語は私が著者なのだよ、騎士よ、と。

「何のことか・・・しかと判り兼ねる次第・・・」

貴人は高らかに笑ったのだ。それでよい。知れたからと言って、何の甲斐もなきこと。宜しい。普齊の親書を閲せたまえ、そう言つて十秒余りで羊皮紙数枚を一瞥し、もうよい。騎士よ、退がつてよい、明日、再びアイリッシュと見えて普齊とマール側との会見を調整するがよい、それで終わりだった。

コルドバは幾つもの疑念を湧き上がらせながら一言も発せられず、疾くに控室へと案内され、葡萄酒と葉巻とを供された。蓋微大理石を使用した一室であった。暖炉は暗緑色の縞目であった。

深紅の礼装に房飾りの侍従が呼びに来た。

「晩餐の御用意が整いました」

祝祭の間と呼ばれる賓客公式儀典用の部屋で行われた。出席者は主宰者であるラグナレク伯爵、アイリッシュとその筆頭従騎士、そして、コルドバの四名だけであったが、百席は設けられそうな場所で、四十人掛けの長テーブルに腰掛ける。卓上の青銅製大燭台は、後で聞けば八百年以上前のものであるという。中でも一番古いものは一

千年以前に及ぶと言う。

部屋自体は、バロック全盛期の司教座教会礼拝堂内部のように黄金と色大理石と彫刻、フレスコ画等々で荘厳されているのだが、蠟燭の灯かりのみで薄暗く、天井は闇に包まれ、壁の高位に十幾つかを列し架けた先祖らの肖像画上半分が視認できなかった。

器やグラスが寸分の違いもなく整然と配置されている。

メニューは、ホタテのソテーに温製の牡蠣、蜂蜜を塗った仔鴨の胸肉、蒸かしポテト、チーズ、アイスクリームだった。飲み物は、白葡萄酒、赤葡萄酒、最後にマグナムボトルでシャンパンが振舞われた。

そもそもアイリッシュ相手である。鎧を正装として食卓に坐るような人物である。無骨、寡黙。また主人を差し置いて筆頭従騎士が喋ることもない。ホストであるべきラグナレク伯爵は語るものの常に冷笑的、コルドバはその都度緊張させられる。それ以外はただ、優美な純銀フォークやナイフの音がするだけ。給仕たちもマニエリスムの派手さを持った衣装で振舞うが、動作優美で足音なく、黙礼のみに言葉少なく、皆幽霊同然であった。

食事も終わりデザートを待つ間になってようやく堅琴奏者と吟遊詩人とが現れ、古代の英雄叙事詩を謳い始め、コルドバ安堵する。

『髪麗しきアヴィスの子、苦き怒りを噛みしめる。さはれ、その誓い、ついに破られん、革楯を撃ち合わせ、槍を、青銅の胸あてを鎧う戦士ら、絶叫と名乗りとが怒号する戦場、

母アルディオンがミナルの河畔で産み落とした子、ついに親への恩を返すこともなく、肋骨脇腹を切り貫かれ、青銅の穂先、膀胱まで至り裂く。両眼を漆黒が蔽い、その身に附けた物の具は伽羅伽羅と音を立て転がる』

アイリッシュがデザートを断り、自前の大山羊角製杯を出させて、さらなる赤葡萄酒を所望した。

旋律は忙しく切なげで、心を加速させる。コルドバは曾祖父の参じた戦役の話等を幼少時代頻りに聴かされ、また自ら義勇兵として隣邦のクーデター鎮圧の為の多国籍軍に志願した経験からも、自己犠牲や悲壮、命を惜しまず大義の為に殉じて死を選ぶ烈士らの物語に強く揺さぶられる。アイリッシュにしても感興は同様のようであった。帝国マールは勇壮の国であると聞く。元来、荒々しい騎馬民族から出た国家だけに、武に対する思いは信仰のようなものだろう。

ただ、ラグナレクは・・・琴の旋律と奏者の唱声と詩人の為すカンテ・フォンドとの美しいハーモニーに浸り耽りながらも・・・相変わらず凍てた薄青の晴、冷笑的であった。大理石の彫像よりも不動で、頬に人差しと中指とを添え、親指を顎にあてている。

コルドバもデザートは断り、シャンパンを頼んだ。カットされたリユートグラスの中で、泡沫が煌きながら翔け昇ってゆく。

拍手で労われた詩人らが下がると、ラグナレク伯爵が口を開いた。君ら武門の者たちには喜ばれると判っていたよ、と。

不惜身命、正義に殉ずること、または殉教、そのような悲壮な感情は多くの人間を

崇高感で酔わせ、裂帛の気迫を以て奮い立たせ、恍惚と或いは潔癖な決意で死へ向かわせるものだ。

それも生き甲斐のひとつのかたち、畢竟、幸福のひとつのかたちだ。言い換えれば、ひとつの欲望であり、執著のひとつのかたちであり、生存への衝動の一端だ。

不信な顔をする莫れ、壮士らよ、所詮、綺麗ことは歪みしか生まぬものだ。実態を精緻克明に認識することも別段、悪くはあるまい。私の嗜好がそれを求めるのだよ、諸君。

いったい、人間が生存を離れて生きられるものだと思ふかね。愚かしきことだ。人間は欲望が創り上げた現象なのだ。経緯のない架空なのだ。諸概念のひとつであり、諸概念の一切はそう云った理由で、・・・でない、ですらない。

君らだって苦痛に耐えるときには筋肉に力が入ろう。目薬を差すときに目蓋が微動すらせぬ人間はまずいないだろう。そのように生存は硬く我らと結び付き、離れようがない。

幼い頃、私は自分が生きたいが為に両親さえ惨殺したのだから。

そう語って、伯爵は贅沢な御世辞でも言ったかのよう微笑した。

コルドバは悪寒が走るのを覚える。

斯くして、晚餐を終えて、コルドバはあてがわれた部屋にいた。赤々と燃える暖炉に安楽椅子を寄せて坐っている。非常な疲れを覚えていたが、眠る気になれなかった。扉をノックする音がし、召使が何か御入用なものがございましょうかと訊くので、ブランデーをと頼んだ。

夜景を眺めながら、世界最古の鎮静剤を舐め、コルドバは寢床にもぐった。窓を少し開けていれば、暖炉は消さずとも大丈夫と言われ、そのとおりにしている。窓には小さな留金があつて、風などによつて大きく開かぬよう、工夫がされていた。よもやこの高所絶壁を登つて賊が窓から侵入するなど考慮外である。コルドバは目を瞑った。寝附けない。置時計の秒針と暖炉の火の微かな音がしている。

いつしか意識が睡眠に吸い込まれ、午前二時、寝苦しい夢を観ていた。が、ふと意識が戻る。なぜだろう。コルドバは何かに気が附いて目を覚めたのだが、自身それが何であるか分からず、半ば夢の中の如く横たわり続けていた。

おかしい。

明確な意識が呼び戻され、コルドバは異変に気が附いた。部屋を暖炉の明かり以外の光がぼうと照らしている。上半身を起こし、あつと小さく叫んだ。

部屋の中央に一人の少年が立っている。だが、床に足を着けているようには見えなかった。白金色の髪を垂らした少年が全身から光を放っていたのである。コルドバはそれがラグナレクであることを明晰に直観していた。その少年が自らを以て自らをそう示現している。その薄青の双眸と目が遭った途端、コルドバの存在する意識世界が縦に大きく歪んだ。大きく歪み、伸び切る。伸び切つて千切れ裂ける。事物の形状は失われ、色彩が入り混じった。

気が附くと目のまを画面のように次々場面が展開している。

齊曆二七〇六年十一月、トラヴァニシチリア、屋敷の一室、生まれたばかりの赤子に産声、ベッドには産後の若き母が瞠目、古剣を振るい赤子を殺そうとする初老の父、

が、男は突然心臓をつかまれたかのように胸を抑え苦しみ、斃れ、即死。妻が叫ぶ。フランソワと名附けられた子は、母によつて隠蔽されるようにして育てられた。だが、領内の農村で家畜が理由もなく変死したり、蝗が大量発生したり、日照りや洪水が数年の間に立て続けに起こると、人々は領主の不信な死と併せて、噂がいつしか流れる。

住民の頻りな訴えに、ついに教会が調査に動く。ヴィラニッチ司教は、ついに夢魔の子であることを母に告白させ、当時五歳のドリアンを幽閉するよう勧告した。

人里離れた堅牢な古い教堂に少年は封ぜられ、毎日母が食べるものを運ぶ。

だが、それでも異変は止まず、フランソワの処刑を求めて民衆の暴動が起こった。教会は苦慮の末、処刑を決めたが、皆畏れて執行者がいない。ヴィラニッチ司教は母へレネスに剣を渡し、命じた。烈しく泣いて母は拒絶する。とうとう司教に諭され、ヘレネスは自らも死ぬことを赦されるよう条件を附して受諾す。

明月の晩、母は教堂の鍵を解く。驚くフランソワの表情が照らされる。母は彼女の存在を見て歓喜し、「ママン！」と叫びながらすがろうと走り寄つて来る我が子に胸が裂ける思い。近附く子に向かつて、剣を振りかぶる。

フランソワの信じられないと云った絶望の表情。

フランソワは叫んだ。「やめてっ！　お願い、やめてえっ！」その言葉は母親に対して言ったものではない。自分自身のちからに対してである。例えば苦痛を堪えるときに筋肉に力が入るように、目薬を差すときに目蓋が動いてしまうように、フランソワ・ノアイユ少年の生きたいと云うちからが、強烈な念となつて母へレネスを生きたまま八つ裂きにした。後にラグナレクと名乗った少年は身の毛もよだつ声で絶叫する母を見て、魂を裂かれ崩壊した。

蒼白な顔で、コルドバはベッドから微塵も動かず、湖上城での朝を迎えた。

二日後に再び燎々りょうりょうが普齊ふせいを訪れた。

「これから第二回目の革命会議よ。彝齋いさう肯けんから招集があつたのよ。それであんたを呼びにきたのよ」

「いったい、いつ決まつたんだ？　それに議案書も貰っていないぞ！」

「あんたは自治州議会の参与議員だったから、そう言うけれどね。彝齋いさう肯けんは事前に議案を配るなんて茶番だと言つてやらないのよ。その方がいつでもどこでも速攻で会議できるでしょう。彼はそう云う主義

だから、議案書なんて配りはしないわ」

「殆ど暴力だ」

その頃、同じくリイリュイー宮殿では、アーチの並ぶバルコニーには龍肯りようけんが独りでした。イキリアが来た。

彼女が訊く。

「こんなところで何をしているの、龍肯りようけん」

物思いに耽っていた龍肯は、憂げに応える。

「いや、別に」

「炎の死がショックなのね。あれ以来、元気がないわ」

「うん。」

それもあるけれど・・・」

「何？」イキリアは龍肯の憂いに浸された双眸を慈しむように見つめた。そうされる
と、龍肯は余計に何も言えなくなる。

「何でもない。それより僕に何か用かい？」

「そうよ。呼びに来たの。革命会議よ」

「今からかい？」

同じ頃、憂責は宮殿内の一室で、清書を終え、舍却に渡した。今回、彝齋肯が提
議する法案の原稿だった。舍却は素早く羊皮紙の内容を読むと、言った。

「いいね。よし、早く彝齋肯に見せよう」

それは二時間まえに彝齋肯から舍却へ内容のチェックを依頼されたもので、革命
会議で使用するものだった。

彝齋肯は執務室で受け取ると、目を通し、黙って頷く。

そして、「さあ、行こうか」と言うだけであった。

三人が廊下に出ると、叭羅蜜多と行き合った。叭羅蜜多が肩をすくめる。

「おい、彝齋肯。随分と急だな」

「革命には問題が山積している。これであたりまえさ」

四人が大会議室に着くと、既に樂夏が坐って待っていた。まるで、大学の講義に出
ている学生のように頬杖を突いて足を組んでいる。

「何よ。あたしが一番なの！」

普齋と燎々とが別の扉から入ってきた。その後から、イキリア、龍肯、参廊が
来た。十人が着席すると、ベ裂と爽烈とがどやどやと入ってくる。まるで、現場帰り

の作業員みたいで、漂わされている空気が他の者と違っていた。

ベ裂が開口一番

「おいおい、いい加減にしろよ。こっちはてんでこ舞いなんだぜ。危難は去つても、
急造の防御体制を完成させなきゃならないし、市民で編成した軍隊をかたちにしなきゃ
やならんし、大忙しなんだぜ。」

ちつとは考えろよ、彝齋肯！

彝齋肯は、全く動じることなく言った。

「さあさあ、君らも席に着きたまえ。重要な案件があるのだ。」

いいか。皆、よく聞いてくれ」

爽烈が陰しく主張する。

「貝方は、ニコレオン殿の同席を要求する。それは、当然のことだろ。我々は革命の栄誉の大
きな勢力の一つだ。」

終局的には、我々はシルヴィエ全軍をこちらの革命側へ寝返らせようと思え、目論
んでいるのだから」

彝齋肯も同意した。

「いいだろう。まさに君の言うとおりだ、爽烈^{そうれ}。至急、レオン氏を呼んでくれたまえ」

時を奪^とることなく、鮮やかなブルーの装いでレオンは現れた。彼が姿を見せると、場内を汗威が覆った。誰もが色褪^あせる如く無言、圧倒^{いさう}される。

気を取り直したように襟を正して彝齋^{いさう}肯が宣言した。

「火急な用件とは他でもない。実は民族問題の再燃だ。これは革命の維持結束にかかわる案件だ。保安問題、それから防衛問題にも深く絡む。

参廊^{さんろう}、状況を説明してくれ」

参廊^{さんろう}が席を立った。彼は話すまえに一同を見回した。龍肯^{りよう}にはそれが心なしかイキリアの上で止まった気がした。参廊^{さんろう}が咳払いとともに、報告書片手で喋る。

「まず、事実を話そう。

問題は二昨日の革命当初のことが発端だ。すなわちレストフ將軍率いるシルヴィエ駐留軍が迫ったとき、疑心暗鬼によって民族間の虐殺事件が各所各地域で起こった。だが、周知のとおり、監督府の開城及び革命への参加、また自治州軍の蜂起が続ぎ、民衆はシルヴィエ駐留軍への対決の気力を呼び戻し、必然に迫られて結束した。これによって民族間の紛争は一時、小康を得たのであるが」

参廊^{さんろう}は効果を確かめるように再び一同を見回す。

「事実はそのではない。概略的な視点からすれば、民族間紛争は収まったとも言える。各代表者は諍^{しやう}いの停止に同意した。ところが、個々の事情は全く別で、それぞれの職場や街区^{ストリート}、通りの単位では各々小地域ごとの異なる事実や状況があり、民衆はそれによって行動していた。

すなわち虐殺、報復、差別、暴行は続いていたのである。

忌憚^{こは}なく言えば、民衆は愚かである。彼らは大局的に判断できない。常におのれの事情で、おのれの立場で感情を膨らませる。不満を募らせ、憤り、暴発する。それがどんなに全体的な視点から見れば愚劣であるかを想像すらできない。個々の単位では正当性があるように思えることも、全体では收拾がつかなくなることを理解する客観性を欠如している。

例えばだ。

マルリー街区では、肉屋に委託されて回収業を営むガリレオ人一家が同地域のノルティオ人五家族によって惨殺された。ノルティオ人家族らは『七百年まえの裏切りへの報復』と称しているが、直接的な原因は以前より近所で腐臭に悩まされていたことであると推定されている。

イアウエル地区では、貧窮するガリレオ人に物資を個人的に供給していたパリー人の老人が、ガリレオ人過激派の青年に銃殺された。奇しくも殺害の場所は、その老人が資金援助して、食料品店を再開したガリレオ人のその店内に於いてであった。葬儀には多くのガリレオ人も参列し、涙した。ガリレオ人青年は逮捕されたが、事件の一週間まえに起きた他地区でのガリレオ人らに対する暴行事件の報復だと言う。

また五十二番街ではアルレリア人の少女がレイプされたが、その親族らが近隣のパリー人の中年独身者を捕らえて、約十五分間の宗教裁判の末、ヴァルゴ教的見地から異端者と審判し、その者の家の壁に四肢を杭で打って磔刑して殺した。

またロマネ通りではガリレオ人労働者が篤志家のアルレリア人老商店主夫婦の出した奉仕用の大鍋スープが腐っていたとし、人種的偏見者喚ばわりの上、屠って食らったと云う報告もある。後の確認でこのスープには地方特別の味附けがしてあつて、酸味が独特である旨、確認された。全く問題のないものであることが判明している。老夫婦は奉仕用の炊き出しにありがちな粗末な味付けを避けようと配慮した結果であつたらしい。

これ以外にも数多のことが報告されている。次には」

延々と読み上げ続ける。わずかの期間に、参廊は徹底した情報収集の網を巡らせ、数多の事実を集めたのである。誰もがこれには舌を巻いた。

参廊は最後にこう付け加える。

「以上はほんの一部である。だが、これ以上、語つても仕方あるまい。詳細は後ほど報告書にして配布予定である。なお、問題はこれ以外にも多々ある。

特に治安の紊れが著しい。警察機構が壊滅したからだ。民衆は様々な抑圧から解放された反面、規制を失つて抑えられていた感情が噴きあふれている。また相変わらず物資に乏しいことも大きな原因だ。

第一にレイプが頻繁である。革命の意気軒昂な世情に見えても、多くの者は不安を抱いている。自己存在の不安に駆られる者にとつて、これ以上の捌け口、慰めはない。次に破壊された家からの略奪だ。パンの支給は十分には至らず、目先の生命が保証されたにすぎない。不安材料はいまだ多い。取り敢えず生きるだけのものは得られ一時の安堵を得たとは言えるが、人心は満たされず、獲れるものは盗つてしまおうとする賤民意識は顕在だ。

見方を変えれば、シルヴィエ駐留軍が迫っていたときの危機感が薄れ、当座のパンと安全とが獲得され、或る種余裕が生まれたのだとも言える。

ともかくも極小地域単位の報復合戦、これは歴史的な憎恨をも併せ、これに乗じて噴火するだけに、深刻な問題である。

人間的感情からすれば、今回革命時の虐殺被害に遭った家族からは復讐の行為が現れて何ら不思議はない。抑制できる方が摩訶不思議なくらいだ。と言つても、これを放置すれば、後の連邦政府軍やシルヴィエ軍の襲来以上に、革命にとっての危機となることは、絶対に間違いないこと。

革命は民衆の勝利だ。だが、民衆とは何か。一人一人の様々な感情や欲望を持った人間が集まっているにすぎない。我々は革命に対して全的な幻影を抱くべきではない。有効なシステムが平和維持には必要なのだ。

以上、いくつかの例を挙げたが、これは事実の一部である。そして、おれは早急な保安体制及び、私刑を避ける為の正規の審判を公正に公的に行うべきことを提言する」

苦悶に満ちた沈黙。民族・宗教がモザイクのように入り組むこの地域一帯の、最大の問題がここに指摘されたからだ。

彝齋肯が高らかに声を挙げる。

「さて、諸君、これについて、御意見を伺いたい。

民族問題は昔からこの国全体を覆っていた根深い問題である。私は革命を機に、こ

れを一気に解決へ向けて、転換させたいと考えるのだ。

永遠なる真実の世界を築く為に」

永遠なる真実。だが、その高邁な理想主義的発言は余りに人間的な生々しい事実の

まえに、空々しく響くのであった。

ばら蜜多が手を挙げた。

「俺自身、難民キャンプの暮らしを体験し、また家族を虐殺された経験を持っている。状況は非常によく分かる。

民族・宗教問題は複雑で、且つ深刻なものだ。これはモスコールやパリヴオだけではない。

肉親が殺されると言うことは、非常に複雑な意味を持つ。悲痛な記憶であり、また自分自身の存在や人間存在の不安をも掻き立てる。他人は何のあてにもならない存在であると言う恐怖や、人間が物体であることを強制的に認識させられる衝撃や、どこにも行き場も解決も見出せない問いにも苛まれ、苦しむ。

せめて復讐以外に心の遣りようが、慰謝があり得ようか。

俺には、これを法制度によって乗り越えることは無理だと思える。

あるとすれば、他者がそれを行った個々人的な経緯を客観的に理解するか、若しくは、その一人の犯罪者の為にその宗教、その民族全体を憎悪しない叡智を育てること、虐殺を行ったのは、その民族ではない、その個人、その一部集団だと云う認識に立つこと、実際、それが当然の事実なのだが、このような視点に立つことは現実問題として殆ど不可能なのだ。

理屈で言うほど簡単ではない。民族的な怨恨が底にある殺戮の被害に遭った場合、当然、憎悪の対象はその相手民族だからだ。宗教の場合も同じだ。だが、異民族や異教徒を憎悪するその認識は、間違いなく事実に基づかないものなのだ。飽くまでも罪過はその行為者に属すると認識すべきだ。

逆に虐殺や暴行を加える側についても、相手を個人として見ていることは少ない。大抵、何々民族、何々教徒、或いは女だ、とか云う目でしかない。そうでなければ平時には普通の人間であった者たちが斯くも恐るべき行為を為せる筈がないのだ。

それに気が附いている人間も少なくはない。だが、いざ諍いが起きたときにその思想を实践することは様々な理由で困難だ。そう、社会的現象となってしまうせいでもある。個々人的な繋がりが失われるか、或いは元々それがない関係者同士対峙するとき、人間同士の虐殺が起こる。

宗教的に煽られた怨嗟、民族的に煽られた怨嗟と言うのは、事実に基づかず、全く架空に等しいのだが、個人的な体験・感情、またはその社会での常識や雰囲気から離脱・超越してまで、事実在即した行為実践を求めるのは、人間的見地から過酷だとも言える。

民族単位・宗教単位に裁くのではなく、直接的・間接的行為者に限定して裁くことは、事実に基づいた当然の行為である。平時の法律下での裁判を行うのと同じように当事者に限定し、その行為を裁くべきなのだ。そのこと自体は晰らかな真実だ。全く晰らかなことだ。諸悪の根源は事実に対する厳密な分析の欠如だとも言える。だが・

だが、真理とは言えない。

人間にとつて余りに狭き門だから。俺は十億人のうちわずか一千万人しか実践できないような真理を真理とは呼ばない。呼びたくないし、呼ぶ必要もないと思う」

参廊さくらうがすぐに異論を唱えた。

「叭羅蜜多ばらみた、君の意見は全く以て正しいと思うが、現情勢下で斯ような論議は、抽象論でしかない。何の足しにもならない。問題は、もっと具体的な、君が言うように、一般に実践のできる、実際に実施できる政策等をどうするかなのだ」

「だが」叭羅蜜多ばらみたが反論する。「本質を見失つては、官僚的に墮する」

舍却しやきやが言う。

「叭羅蜜多の意見には基本的に賛成だ。だが、私には、怨嗟は解決不可能だと云う見切りも、事実仕方ないと思う。それを諦めた上で、最小限に食い止める施策を取るべきなのだ」

普齊ふせうが言つた。

「實際問題にこだわるなら、ぼくは、衣食住の物資と世情の安定とがあれば、自ずと人々は保守に走ると云う原則を利用して、流通機構のさらなる改革を取るべきだと思う。搬出入統制局や食糧管理局の組織作りで、彝齋いさう肯が既に様々にその問題に取り組み、多くの成果を上げていることは知っているが。

流通の改革で、従来に比べればこちら側は廉価な金を出し、売る農家側は高価に買い取られると云う良い連鎖が生まれ、一部農家から大量の穀物を買ひ附ける契約に成功したとも聞いている。だが、しかし。

恐らくは足りないのだ。もっと大きな規模で、そう、市場の復活が必要なのだ。物資を売りたいと外部の人間が広場や通りに氾濫するような、かつての盛況が必要なのだろう。

結局は革命で破壊された経済・財政の機構を、革命流儀で復活させなければならぬ。基本的に工場等は無傷だし、ハード面では従前のシステムが殆ど使える。破壊略奪された商店には再建の為の補助金を出そう。

銀行の活動を全て停止し、金庫の金をばら撒くんだ。当分、銀行なしで金融を支えなくてはならないだろうが、今は暴動が起こらないよう、経済・流通・供給のシステムを動く状態に維持しなければならない。

当分は旧自治州政府の金庫から使わざるを得ないだろう。

それから保安維持の為の警察機構についてだが、強化も当面必要だが、余りに強化しすぎれば、結局、民衆の心を失う結果を生む」

普齊ふせうの発言のうち最後の部分を、参廊さくらうへの牽制であると皆が感じる。

ズ裂いれつがぶつきらばうに言つた。

「結局は、兼ね合いと云うわけだな。飴と鞭みたいな
爽烈そうれつが反駁する。

「だが、それも止む得まい。民衆が欲しているのは、高邁な理想の実現ではない。もっと具体的な、生活世界的な、地上のパンなのだから。

むしろ、理想は空論とさえ彼らには聞こえるだろう。念仏や御託の類いだ、と」
「なるほどね」燎々りょうりょうが言う。「だから、こうやって政治は民衆から離れてゆくの

ね。

要はあんたらの言っているのは、頓珍漢な理想論か、或いはその場主義的な方便論じゃない。違つかしら？　それが民族・宗教融和の真実の世界なの？」

参廊が苦い顔で睨んだ。

「あら、参廊、あんたがそんな顔したって、もう怖くないのよ。革命は勝ったわ。

国家権力は壊滅したのよ。あんたがどう云うつもりか知らないけれど、私はあんたを信じていないからね。ちやつかり私らの仲間になったって。東駅のまえであんたがどんな仕打ちをしたか、あんたにどんな仕打ちをされたか、忘れやしないのだからね。ねえ、そうでしょう、龍肯？」

ますます参廊は憤りでどす黒い顔になった。

彝齋肯が顔を顰め、無視するように問う。

「他に意見は？」

楽夏が言った。

「ともかくも革命の原理を忘れるべきじゃないんじゃない？　革命は、パンを、と訴えた女子紡織工の行動から始まっているのよ。だから、安定したパンの供給があればいいと云うようなことじゃないわ。あたしが言いたいのは、普齊が言うのとは違つ。

ねえ、憶えている？　炎が病院を開放したとき、由伽が妹を入れてもらえて飲んでいたつて云う話。そう云うことなのよね。それがパンを頂戴つて云うことなのよ。

分かる？

ばらみた

叭羅蜜多が言っていたことにも通じるのよ。個々人の顔が見えない相手には酷いことが出来るつてことと同じよ。虐待行為をした相手の民族・宗教を恨むこともね。

被害者は事件の実情を見ることができず、加害者も被害者の顔を見ていない。あたりまえな実際から、離れている。

それ以外のことにも言えるわ。

ねえ、例えば、あたしたちに必要不可欠な小麦は郊外の農村地域にあるでしょう。でも、モスコールは今孤立している。当然でしょ？　いくら高価買取で好感を得つつあると言っても、そんなのまだ一部の農民たちだけなんだから。

保守的な農民たちのスタンスから見れば、あたしたちがまだまだ暴徒と見做されている。無理もないわ。本来なら、敢えて商業的取引をしようとする仲買人も農場主もない筈なのよ。

でも、顔が見えて理解し合えるならば、変わるわ。本当の商取引が実存するわよ。革命家と農民とじゃなくて、個人の顔が見えるような付き合いがなくっちゃ。良くも悪くも本当には付き合えない。これが実際のな付き合いってもんでしょう？

あたしたちの革命が本当に目指すのは、そんなあたりまえな世界であるべきだわ。でしょう？

民族紛争や宗教抗争にもそれが必要なようにね。それがあれば、非人道的な殺し戮いだつて起こらなかったかもしれないのよ。

人間は一人だけじゃ本当の幸せになれない、民族単位でも宗教単位でも本当の幸せにはならない、皆が同じように幸福になれなければ、絶対諍いになる。その一步の為に実際のな人間のあり方を踏まえなくっちゃ、できないのよ。

それが完璧に実現する夢みたいな日は来ないだろうけれど、いいじゃない。

叭羅蜜多ばらみたが言うように、解決は無理かもしれない。でも、ましにはなれる筈よ。完璧なんて求めるのは、非人道的な理想主義者だわ。人間に即さない。もつと、人間であるべきなのよ。どうせ、この民族やら宗教やらが絡む憎しみも人間だから生まれたことなんだから。原点でなくつちや、ましにもなれないわ」

普齊ふせうも頷いた。

「ふん。一理はあるな。結局、叭羅蜜多ばらみたの意見と大差ない抽象論だが、他地域と革命思想を共有すると云う一説は尤もだ。方針として悪くない。それができなければ、永遠に孤立して、いずれは経済的にも立ち行かなくなるであろうから」

彝齋いさう肯も我が意を得たりと言わんばかりに言う。

「同感だ。革命を伝播すべきなのだ。我々の行動が正義であることを周辺地域に、自治州全体に、連邦や外国や、そして、シルヴィエにも知らしめるべきなのだ」

樂夏らつかは何か言いかけたが、その時は与えられなかった。毅然と坐って不動に黙していたレオンがここで初めて口を開いたのだ。

「然り。ならば、我々は民衆の思想であるべき民主共和の思想を以て全人民を啓蒙すべく流出しなければならぬ」

間髪入れず、龍肯りようけんが異を唱えた。

「あなたたちは樂夏らつかの言ったことを、都合よく曲げていないか。特にレオン、あなたの言う、その流出とやらは、軍事的な進出を示唆しているのではないか。

もしこれを軍事的に行えば、暴君の圧政と何ら変わらない。シルヴィエと変わらない。

そもそも思想の伝播などと、布教活動のようなやり方には反対だ。いずれにせよ、それは強制であり、暴力だ。思想や主義、信奉、つまり『何か』であることは常に選別的であり、肅清や排他、統制、終には拷問や虐殺を生む。

僕は無思想を支持する。

ただ実情、実態にのみ顧みるべき真実がある。一様ではない。フォルムを持たない。現実にあることは流動的で多用だ。人間的だ。実情・実態に合う実践以外に真実はあつてはならない。実践的ゆえに、無知無学な者らさえそれを嘲笑あざわらいはしない」

レオンが傲然と龍肯りようけんを凝視した。

「俺は必ずしも、共和主義を挙げて他地域を制覇すると言っているのではない。積極的に正義を伝播すべきだと考えるのだ。具体的には状況に応じて様々な有り様が要求されようが、待っているだけではないかと言うのだ。違つか。しからば、龍肯りようけん、おまえは如何にすると云うのか」

龍肯りようけんも負けじと齒を喰いしばった。

「僕は自ずから人々が交流を望む状態を作るべきだと思う。

革命が如何に正義で自由で公正であるかを示せば、郊外の農村部の者らも必然的に革命の優位を感じる。革命側に流れる。

つまり、僕が考えるのは、流出ではなく流入だ。多様な価値観、反グローバル主義だ。彼らを受け入れ、融合するのだ。他地域の者らを染めるのではない。多様な価値観こそ、実情・実態的だ。真理はひとつである筈がない。いいや、真理は存在しない。

事実があるだけだ。彼らが自由意志でこちらに加わり、融合する、それが顔が見える
と云うことじゃないか」

叭羅蜜多ばらみたが敢えて突いた。

「龍肯りゅうけん、それこそが理想論だ。この非常時の実情にそぐわない」

普齊ふせいは何か思案げに、用心深く附け加えた。

「龍肯の言うことも尤もだが、実際問題として、それでは追い附かないだろう、需要
にね」

燎々りょうりょうは言葉を呑んだが、憂貴ゆうきが発言した。

「でも、そう云うことなら、結局は、グローバル主義、対外的武力を以て革命を強要
すると云うこともあり得ると云う考え方なのではないか」

舍却しゃきやが少し愕いた表情で、彼女を振り返った。

彝齋いさう肯は全く表情を変えずにこれに応えた。

「レオン氏の案は必ずしもそうではないだろう。例えば、他地域にいる共和主義的精神の持ち主らを、つまり、民衆主体の意識に啓蒙された人民を援助したり、圧政に苦しむ者たちに民主主義を伝えて革命を指導したりする、それら一連の活動を言うのである」

レオンが頷いた。

「然り。龍肯りゅうけんが捉え方は、まさに一様の、反論の為の反論だ」

龍肯りゅうけんは緋髪を撫で附けながら、刺青の顔を動かさなかった。

彝齋いさう肯が纏め上げようと声を挙げた。

「さあ、おおよその結論は出たようだが、夔裂いれつ、君は何かないのか」

夔裂いれつは腕を組んでいたが、

「いや。何も。革命を伝播し、且つ民衆に餌を与え、不満を軽減し、民族・宗教紛争を緩和させる。結構だ。炎ほのなら、泣いて喜ぶぜ」

彝齋いさう肯が苦い表情をした。

「現実には理想ではない。君の非難めかした態度は理想主義的だよ。我々には民衆への責任がある筈だ」

だが、イキリアも夔裂いれつに同調する。

「それでも何かが違うわ。これじゃ結論的には、従来の王族や貴族、傀儡政権の政治家たちの路線と構造的に大差がないわ」

参廊さんろうが穏やかな笑みで訊いた。

「では、どうしようか。イキリア。昔から実践されてきたことにはそれなりの実的な意味があるのさ。生存にかかわることにに関して人間は保守的なものだ。兵法や戦術は古来変化が少ない。

イキリア、破綻する計画では意味がない。まず生き残る。そして、考える。問題を解決するよう常に会議し、修正する。

当座は、対外的には多少強制的でも思想の伝播をし、防衛・交易を確保し、且つ内政的には保安機構で統制する。これしかあるまい。方便だよ。目的は皆同じさ。

誰もが苦しみの呪縛から逃れ、笑える日々を欲している。結論は、それだけだ。違うだろうか」

イキリアは参廊を凜と睨む。

「滅びたって構わないじゃない」

参廊はもう一度、穏やかに、ゆつくりと微笑む。舌なめずりのように。

叭羅蜜多が諦めのように言った。

「潔癖だが、つまりは理想主義的だよ、イキリア。民衆はそれを受け入れられない。それがこの論争の唯一無二の回答だ」

イキリアは黙って俯く。

彝齋肯が再び声を挙げた。

「さあさあ、では、裁決に入ろう」

普齋が言葉を挟んだ。

「ちよっと待ってくれ、彝齋肯。一つ確認したい件がある」

彝齋肯が微かに構えた。

「何だろうか」

「市民共同体や、一部工場の労働組合が我々を公然と批判し出していると云うのは、本当だろうね」

普齋は当然、その情報を握っていた。と云うわけで、彼と彝齋肯以外は皆傍にいた。いや、参廊も冷静であった。叭羅蜜多が言う。

「何だって！ 馬鹿な。命懸けで闘ってきた俺たちを、同志を批判するなんて！ あり得ないことだ」

彝齋肯が沈着に応えた。

「君らの驚きは尤もだ。

だが、事実は事実だ。私はそれを知っていた。敢えて諸君らに言わなかったのは、君らの気持ちを慮つての上だ。決して、隠匿したわけではない。

それ以外にも、主導権を握ろうと様々な組織が動き始めている。悲しいかな、我々が革命も多くの為政者と変わらぬ、本質から離れた権力争奪戦の様相を呈し始めたのだ。

我々は革命の純潔を護り、本来の民衆の為にと云う大義を失わず、断固、本質論を以て戦わなければならない。

保安体制の整備はその意味でも重要なのだ。革命に対する反動勢力を根絶やしにしなければならない」

叭羅蜜多が言った。

「だが、その正義を誰が判定するのだ。そのような権力を持った者が専横し、過たないと誰が言えるのか。批判されない者は必ず暴君同様に墮する。その原則を忘れてはならないぞ」

参廊が言う。

「では、どうするのか。きれいごとでは現実に共同体を護ることは不可能だ」

彝齋肯が続ける。

「参廊の懸念はそのとおりだ。また叭羅蜜多の言うことも尤もだ。当然、保安活動には監査機関が必要だ。具体的な組織作りは別につめる必要があるが、方向性として保安機関なしの治世は不可能であろう」

ばらみた

叭羅蜜多も止むなし、と云う表情で同意した。

「分かった。いいだろう。異存はない」

「では、ここにひとつの案文がある。先の論議に沿うものと考えてるが、読み上げるので、諸君らの裁定を頂戴したい」

彝齋肯は颯爽と法案を記した羊皮紙を胸元から出す。それは憂貴が清書し、舍却から手渡されたもので、金や顔料でふちを染色された見事な法文書に仕上げられていた。

彼が読み上げた内容は、革命保安委員会と真実査問審判委員会の制定、さらに同委員会に対して重ねて別個の諮問機関、民族融和会議及び一般選挙による監察査察官制度の制定に関するもので、法とともに施行令及び運用規則まで既に作ってあった。

完璧な法文で、ただちに裁決は下された。併せて真実査問審判委員会の委員長として、彝齋肯は舍却を推挙した。七対六で可決された。なお、正式任命は総選挙後の革命会議による承認を得てから行われるべき旨、附加される。

「これで閉会とする。なお、革命思想の伝播・交流については、最低数週間以上の準備期間が必要であらうし、必ずしも火急の時事問題ではない。後日別途協議するのが妥当であろう」彝齋肯はそう告げて閉会宣言とした。

散会后、中庭を見渡す廊下で龍肯は楽夏と一緒にになった。

「どうしたの、龍肯、本当に最近元氣ないわ」

龍肯が頷く。

「ああ。何か、どう言ったらいいのかな・・・まるで、何も彼もがずれて行くような気がして、虚しいんだ。

革命も、従来の政治的なものに墮落して行くような気がしてね。結局、人間はそこから逃れられないんだ。世俗的な生存の渦に巻かれてゆく。高邁な理想を掲げようと、下世話な金銭欲や権力欲を満たそうとするにせよ、僕らはただ自分の生存を遂げようと、自分たちに都合のいいことを言っているにすぎないのではないか、ってね。厭世のかな。でも、僕はそう云う性分なのさ」

「そうね。でも、だから、龍肯は利口そうに見えるのよ。

だけど、例えば、どうしたいって云う考えはあるの？」

「ないよ。さっきはレオンと争ったけれどね。実はないんだ。

だから、あれ以上、何も言えなかったのさ。

と云うか、諦めているんだ。答えも解決もあり得ない、ってね。まあ、君の言うとおり、何もないよりはましになる方がいいことはいいのだが。でも、僕には虚しさが拭い切れない。不安がね。

全ては自分の主張、自分の利益、自分の理想、自分の家族、自分の国家、自分の仲間、自分の民族、すなわち広い意味で自分を肯定する為に衝き動かされる以外、人間にはあり得ない。それが人間、仕方ない事実として踏まえるべきなんだろう。

だが、挫折的だ。それとも、気の持ちようなのか。深い絶望に襲われたことがある者なら、そんな言葉では納得し難いよ。少なくとも、すぐにはできない。

全ては生存の命題に従って、自己を肯定し、自己を守り、自己を生き永らえさせ、自己の喜びを追求しているだけ、その枠からは絶対に逃れられない。全てはその構築

の為の架空だ。

諸概念は架空なんだ。実体がない。そして、その諸概念以外の僕らはあり得ない。僕らは生存の構築する現実から逃れられない。だから、不幸は消えない。苦しみは終わらない。苦しみの鞭から逃れようともがき、幸福を求めのたうつ。それしか選択肢がない。それが生きると云う現象だ」

樂夏が困り果てた表情をし、龍肯は少々落胆した。

「でも、龍肯、実際、あんたの言うように仕方がないのよ。少なくとも今は。それは確かだわ。イキリア流の考え方を民衆にあて嵌められない。現実的に、この中で何とかうまくやって行くしかないのよ」

「分かっているさ。」

仕方ない。汚泥に塗れる以外の生き方はない。君にも、普齋や彝齋肯が堕ちてゆくのが見えるだろう？」

龍肯は突如、怒りを顕わにした。

「そう、例えば、参廊の奴の目を見てみる。奴は欲望に滾った眼差しでイキリアを見ている。それだけなんだ。奴は！」

樂夏の瞳が冷ややかになった。

「あら！　つまりはあんたの言うとおり、そう云うことなのよ。あんたもそうやって憤り、自らの正義を主張して諍う。誰しも人間的な動機で動くのよ」

龍肯は赤面した。

「・・・そうさ。僕はイキリアが好きだ。そして、君は僕が好きなんだ。だから、怒っているのさ、今の君同様にね」

樂夏が頬を膨らませた。

「あら。あんたは何でもよく解っているのよね、龍肯。余り自惚れない方がいいわよ！　あたしが嫉妬しているって言うの！　呆れたわ。そんな馬鹿なことを言う人だとは思わなかったわ」

龍肯は寂しげに微笑むと「君の怒りも、僕の憂鬱も諸概念にすぎない」そう言っ去ろうとした。

大理石の廊下を円柱の影から普齋と叭羅蜜多とが現れた。二人はしきりに議論しているようであった。

普齋が龍肯と樂夏とに気が附く。

「やあ。龍肯か。君はさっきの彝齋肯をどう思う？」

「どうって」

「いや、まるで専制君主のようではなかったか。彼は完全に革命を掌握しようとしている。警察機構、まあ、彼は保安機構と呼ぶが、その設立は晰らかに反動勢力の摘発だ。革命に対する反動家への締め上げだが、反動的と云うことの定義が不明確である以上、革命原理となりつつある彼、彝齋肯の手にその定義が握られるであろうことは十分に考えられるし、そうなれば極端な話、彼が自由に誰も彼もを逮捕、処分できることになってしまう」

樂夏が声を挙げた。

「まさか。あの彝齋肯がそんな考えを」

普齊が哀しげな表情を作って見せる。

「いや。権力は人間を狂わせるものさ。そして、理想の追求はいつしか排他的な独善へと変じ、自己の恣意を通ずる手段を選ばなくなる。

歴史の通例だ。

彼の行為は既に形式を重んじる官僚的にすらなりつつある。そのうち、マントを羽織って朝儀を廷し、百官制を布くようになるさ。

見たまえ。ぼくは貴族の出身だ。憂貴とぼくとがこの中で貴族の出身だが、けして虚礼を重んじることはないし、常にざつくばらんだ。気取りなんて真実ではない。

彝齋肯は危険だ。彼はじきに恐怖政治を始めるよ。ぼくらは革命を正当な道へ導く手立てを用意しなければならない。

その為には地盤が必要だ。

王政はなぜ倒れたか。自治州政府はなぜ打倒されたか。民意を失ったからだ。どんな強国も、民意を失っては永続できない。なぜなら民衆こそが国家であり、歴史は数多くの人民の複雑系的な動きで構成され、人類の圧倒的多数は平凡な庶民たちだからだ。彝齋肯はじきに民衆の人氣を失うよ。それは歴史が証明している。彼自身、過去の歴史から、その過ちを学んでいる筈なのにね。

避けられないのだよ。全ての為政者らが飽きずに必ずそれを繰り返したのと同様に。歴史が証明しているのにもかかわらず、常に権力者らは陥ったのだから。

権力の掌握は人間にとって最高の自己肯定だ。自己肯定ほど人間を酔わせるものはないのだ。人間は自己肯定の為に生きているのだ。

正直に言おう。ぼくは彝齋肯のように真実の為に革命を戦うのではない。その反面、権力にも執著しない。彼のように理想主義的に民衆を称揚したりもしないが、理想の為に苛烈に、自己の主張に関して非妥協的になることもない。

そうさ、庶民こそ真実だなんて言うものか。人間なんて皆同じ程度にくだらないものさ。

だが、それが真実あるべき状態であり、事実であり、現実なのだ。それでいいのだ。

まあ、御託はいい。要するに言いたいのは、民衆を味方につけるべきなのだ。しかもそれは彝齋肯に知られぬように、だ。

叭羅蜜多は学生をまとめる。ぼくは労働者組織を反彝齋肯でまとめる。ぼくは元々そこに地盤を築いていたのだから。それに労働組合やコミュニンは既に反彝齋肯的になりつつある。まあ、それはそれで彼らの権力奪取の為の画策なのだが。

いいではないか。これが人間の現実だ。きれいに生きることは不可能なのだ。

龍肯、君なら解る筈だ。君も叭羅蜜多同様、家族を虐殺されていると聞いた。ぼくは知っているんだよ、龍肯。

さあ、だから、君は人間が如何に変わりやすいか、どんな欲望を日常性の奥底に隠しているか、人間が人間に対して何をするか、よく知っているだろう。

君と楽夏には、コミュニケーションとの協定を模索して欲しい。いや、単純なことだ。民衆の人氣を得て欲しい。派手で見立つことと、彼らの直接的な利益を擁護してやるだけでいい。単純な人情に訴えることをするんだ。解るか。君ならできる。是非やってくれたまえ」

普齊ふせいの説得は決め附けるように、強引で決定済みのような確信を持っていた。
叭羅蜜多ばらみたはそれほど乗り気でなさそうであったが、こう附け加えた。

「俺の懸念は、むしろ、参廊さんろうだ。

俺の推測が間違いないければ、現在の奴は仮面の偽装にすぎない。奴はパーリ人民族主義者で、パリヴォ王党派だ。

そう、ユヴィンゴ王党派ではなく、大昔のパーリ人による王朝の復活を願う一団の一人だ。いや、未だに彼らはいるし、現にこの革命の無政府状態を歓迎し、主導権奪回の機会を窺い、狂った夢の実現の為に暗躍し、虎視眈々と狙っていると云う。

そして、今日、参廊さんろうの辣腕りゃくわんぶりが明晰になった以上、放っては置けない。奴は彝齋肯いさうの起案に乗じて、おのれの勢力を拡大するだろう。諜報能力を認められた参廊さんろうが保安委員会を実務レベルで仕切ることは明白だからな」

龍肯りようは溜息をついた。

「僕の刺青はバフォーマンスの為にあるのではない。ファツションじゃないんだ。はつきり言って断るよ。

革命は終わった。もう革命は死んだのだ。皆、適当にやってくれ。人は自らの行為で、その行くべきところに堕ちて行く。それ以外の道はあり得ないのだ。誰にも救えやしない」

龍肯りようはこの日附けを以て革命会議議員を辞した。

翌日、ヴィーボルグ地区の十五の労働組合指導者数十人が逮捕された。

参廊さんろう

参廊は反革命分子、すなわち反動家たちのリストをリイリュイー宮殿いさうの彝齋肯いさうに報告した後、旧自治州警察本部の庁舎に戻った。

彼はそこを基地として、保安委員会執行部長の役職にあった。もう一つのリスト、パーリ人王朝復古派、パリヴォ王党派でモスコールに残った者たちのリストは金庫にしまわれている。

参廊さんろう

参廊は普齊ふせいらの反彝齋肯運動に関する報告書を眺めて思索した。

「さて。おれはどちらへ附くべきか。

つまり、この報告書を隠匿すべきか、手渡すべきか。無論、おれは常に勝つ側へ附く。さてさてどうするか」

彼はそれを金庫にしまった。お蔵入りにするが破棄はしない。いざと云うときの切り札にする為に。いずれにせよ、参廊さんろうは彝齋肯いさうの敗北を見抜いたのである。

数日後、参廊さんろう

数日後、参廊は彝齋肯からの命令書を受け取った。逮捕した労働組合指導者の処刑と新たにコミュニケーション指導者の逮捕指示であった。

総選挙まえに権力地盤を固めようと焦っているのは明白であった。

その日に行われた第三回革命会議では革命防衛構想と防衛委員会の設立、及び革命会議議員選挙について論じられた。龍肯りようの姿はなかった。

革命防衛構想ではレオンが提議した。

「いずれユヴィンゴ連邦政府軍とシルヴィエ駐留軍との合併軍、若しくはシルヴィエ本軍が派遣され、この州都モスコールを討伐せんとするは自明だ。これを迎え撃つに、当方は監督府の駐在軍及びレストフの駐留軍一個師団のみ。不足だ。

いつの時代も正義は数多の無名の戦士らによって護られている。

この世の真実を追究するなら、思惟にくれるな、俺はそう言う。如何なる思案も便宜の記号にすぎない。そこに実体はない。だから、ここに主張する。

徴兵制を布くこと、まず第一義にこれを提案したい。同時に義勇兵をも募ること、これを第二義の提案とする。

さらに併せて主要街道の所要所に前衛基地及び中継基地を設けるべき旨、提案しよう。その為にも郊外の近隣地域、及び各農耕牧畜地域の統合を急ぐべきこと、再び強く提議したい」

革命防衛委員会委員長はバ裂と決定した。レオンは特別顧問となり、爽烈が軍総帥として選ばれた。

選挙については舍却の提議で論じ合われたが、争点はその方式であった。舍却の提案では地域ごとに選挙人を推挙し、その選挙人によって投票する選挙人方式であったが、普齊が完全なる総選挙方式を唱えて反論した。

意外にも舍却は反論に対して清々しい表情であった。なぜなら、彼は彝齋肯の案を提示したにすぎず、自身総選挙すべきとの意向を抱いていたからである。彝齋肯は最近の彼自身への反発を顧慮して、自らを表に出さぬよう配慮しているものの、堪らずついに自分で抗弁に至った。

「総選挙は未だ選挙権を持つ人民の把握が困難であり、実務上の無理がある。また周知徹底に時間を要し、事急を要する時勢に不適である。

私もまた本来総選挙であるべきと考えるも、今は暫時選挙人方式によるべきが妥当だと主張する」

だが、一般庶民の間で人氣に衰えの見え始めた彝齋肯が総選挙を避けたのは誰の目にも晰らかであった。政治的操作の余地のある選挙人方式に起死回生の機会を見出さうとしているのだと。

多数決で総選挙制が決議された。

選挙の実施が公布された。

翌日以降、焦慮する彝齋肯の動きは苛烈を極めた。逮捕、拘留していた旧自治州政府の議員や大臣をはじめ、為政者全てと事務官ら高級官僚とを次々真実査問審判委員会の審議にかけた。委員会の勧告に基づいて裁判が行われることになっていたが、実際にはなきにも等しき状態で、一日に数十人の単位で即日公開処刑された。

仮決定上の委員長である舍却が彝齋肯派であるが為に、総選挙後に承認される可能性が薄いと判断した彝齋肯は今のうちにとばかりに徹底的な粛清を行ったのである。労働運動の指導者や旧政府要人らが処刑される反面、民族紛争絡みの審議は一向に進まなかった。白黒をつけて民族紛争に終わりを告げるべく設置された委員会は全く別の方向に向かっていた。なぜなら白黒をつけられないからである。論理的、或いは倫理的ではない。

一方の宗教・民族を断罪すれば他の宗教・民族は喜ぶが、断罪された側の属する宗

教・民族側から猛反発が起こった。

その抗議は暴動寸前になることや自爆テロにもなった。世情を攪乱するに十分な暴挙を平然と行う。彝齋肯の権力は既にそのような状態に陥ることに耐えられなくなっていた。

舍却は、彝齋肯から審議対象者のリストを貰うと、憂鬱な翳りを帯びるようになった。彼は事実上、彝齋肯の下請け死刑執行人であった。しかもリストは全て参廓によって作られ、或る種のパーリ人は絶対に載らなかった。

時折り舍却は彝齋肯に言った。

「彝齋肯よ、我らの理想はどこへ行ったのだ」

その度に彝齋肯は苦々しく応えた。

「今しばらく待て、舍却。今は耐える時期なのだ。今は身を護らなければ滅びてしまう。我々が滅びては世界を救えないのだ」

だが、各地区の労働組合やコミュニティからの非難も露骨に烈しくなってきた。

「彼は暴君だ」「自治州政府よりも暴虐的だ」「彼の行為は民主的ではない。まるで専制君主だ。彼は自分が皇帝になったつもりなのだ」

彝齋肯の焦慮は募るばかりであった。

「何も彼もが狂って行く。歯車を違えたように。一度逸れてしまったそれはもはや容易に戻らない」彼はそう独りごちた。

そうこうするうちに、延命ばかりに夢中で本来夢見語り合った理想を実現しようとしないうちに彝齋肯に業を煮やした舍却が、私有財産を禁ずる法律の草案を持ってきた。

過激に平等化を推進しようと初めて彝齋肯の意向に逆らったのだ。

彝齋肯は当然、激怒した。乱れることのなかった彝齋肯が舍却の目のまえで狂乱したように叫び、怒鳴り、壊した。

その理由は明白で、労働組合やコミュニティの人気を失っている彝齋肯は、その反対勢力である富裕市民層の支持で辛うじて持ちこたえていたからだ。

穏健な革新を求める彼ら富裕市民は、妥協的な政策を提議するようになった彝齋肯を支援するようになっていたのだ。だが、私有財産を禁ずれば、富裕市民層たちは持てるものを失うことになる。彼らの猛反発は必至であった。彝齋肯は支持母体を失うことになる。

舍却は強固に主張し、譲らなかった。舍却をそうさせたものは、実に彝齋肯への強い思い込みであった。かつての強烈で潔癖な理想主義者であった彝齋肯への思い入れであった。

追いつめられた彝齋肯には、それは裏切りとしか見えなかった。

短絡的な、目先の善施策を実行し、民衆の人気を集め、コミュニティと労働組合とを味方につけた普齊はこの様子を窺っていた。

参廓は表立った行動を控え始めていた。

一方でレオンとベ裂とは偉容を整えた軍列を以て庶民の崇拜を集めてゆく。翌日には彼らは五十キロ北にある都市サンピチェロの労働組合の要請に応じて進軍するのだ。当地でも革命の気運が急激に高まっている。

シルヴィエ機械化装甲師団を持つモスコールの革命政府は事実上、自治州一帯で

最強の軍団であり、最近、各都市の革命家がこの援助を頼りとして公然と行動を始めているのだ。革命は手を触れずとも確実に伝播し、市の為政者や地域の領主たちが如何に警戒を強めようとも制御することはできなかった。

叭羅蜜多は穀倉地帯へ買い付けと契約の為に出張することを彝齋肯に命令されていた。

総選挙は軍の出陣による選挙民の激減を理由に延期された。

軍を見送ってから、普齊は監督府の爽烈に手紙を書いた。返事は即日で帰ってきた。そこにはこう書かれていた。

「その件に関して州都残留軍は動くことはないでしょう」

夕刻、普齊は不意に舍却を訪れた。世間話をして普齊は帰った。当然のように

参廊はこの事実を、『普齊と舍却との密会』として彝齋肯に報告した。

彝齋肯は舍却の裏切りを決定的に信じた。

書記官を呼んで口述した。

「私はここに民意と革命の真実正義を以て命じる。真実審判委員会委員長を革命に対する反動的行為の罪で逮捕せよ」

その知らせを聞いて憂貴は気も狂わんばかりの心持ちになった。今や真実査問審判委員会の審議にかけられることは死を意味していた。急いで舍却の部屋へ行った。

舍却は落ち着き払っていた。まるで初めから死を覚悟していたかのように。いや、事実そうであったのかもしれない。

「こんなことって赦されないことです。革命の同志を処刑するなどとして云うことは。ああ、何と云う恐ろしいことでしょうか！」

「まだ刑は決まっていないのです。委員会の勧告の後に、裁判がある」

「そんな形式だけです。舍却様、あなたはよく御存知ではないですか。組合の執行部長や委員長は次々処刑されてしまったではないですか」

「馬鹿なことを言わないでください。革命は適正です。革命の決議は真実です。彼らは罪あつて罰せられたのです。死を以て償ったのです。そうでなければ、彼らの死は何だったのでしょうか」

「彼らは彝齋肯の勝手な理想の為に抹殺されたのです」

「違つ。委員会の勧告によつて裁判の結果、罪科が晰らかにされたのです」

舍却の喚問は全ての人々に衝撃を与えた。誰もが驚愕したが、普齊と参廊とは内心微笑んでいた。

憂貴はイキリアに泣きついた。イキリアは爽烈に訴えに行つたが、爽烈は外出中だと言われるだけであつた。燎々は普齊を訪れて問い糾したが、普齊は委員会の決定を尊重すべきだと言っただけであつた。

龍肯は彝齋肯のところへ直訴に行つたが、既に革命から離れた彼は守衛に門前払いされた。

委員会に喚問された舍却の態度は寸毫の乱れもなく清々しいものであつた。起訴内容については「そのような事実はありません」と言う以外に何の弁明もなかった。委員会は死刑を勧告した。憂貴が慟哭した。

革命裁判所は自治州政府時代の最高裁判所をそのまま使っていた。新古典主義建築で、円柱が整然と並ぶ白い建物であった。

起訴状の読み上げ、罪状認否、証人喚問、検事の質問等々の間中、相変わらず「そのような事実はありません」と言うだけであった舎却は、最後に弁明の機会を与えられたとき、傍聴人席にいた彝齋肯の方を向かずにこう言った。

「私は革命に、神の言祝ぎを受けるべき理想社会を夢見ました。しかし、全てはただの現実に呑み込まれてしまったのです。

彝齋肯。私が憧憬した貴方は変わってしまった。私はもはや生に執著を持たないのです」

処刑はその日のうちにギロチンを以て執行された。メ裂はその数時間後に戦地で事実の報告を受けて涙を流した。

彝齋肯はどうしようもなく動悸がし、精神の混乱を感じていた。処刑場を急いで立ち去ると、執務室に戻って慟哭した。

「おお、神よ。私は何と云うことをしてしまったのでしょうか。私は親友を殺してしまったのです。分からない。なぜこのようなことになってしまったのか」

その夜、彼は独りで盛り場をうろついた。髪も着衣も乱れた酔漢を、あの彝齋肯だと思ふ者はいなかった。

路地裏で嘔吐しているとき、後ろから誰かに突き飛ばされた。倒れた彝齋肯は自分が血だらけであることに愕いた。彝齋肯は突き飛ばした相手を見極めようとして、フード付きの外套で全身を覆っている人物を見上げた。その人物はフードを外した。

「私よ。彝齋肯。あなたは狂っているわ」

それは憂貴であった。彝齋肯は既に失血の為に力が入らなくなっていた。醜く顔を歪めて絶叫した酔漢は十数か所をレイピアで刺されて絶命した。

憂貴はその場で逮捕された。イキリアや療々たちがどのような嘆願をしようとも余りに晰らかな殺人罪には無効であった。彼女自身が死刑を望んでいた。

処刑の日、憂貴は白い装束で現れた。それは婚礼の花嫁衣装であった。聖ドミコクス騎士修道会士は終生独身を神に誓う。もし舎却が生きていたとしたら、この清衣はけして着られることのないものであった。恐れる風もなく毅然と、彼女は階段を昇る。

絞首刑の寸前、憂貴は恍惚と微笑んでいた。

龍肯は喪服に着替えると、アパートの部屋を出た。

辻馬車を待たせてある。土砂降りであった。玄関から出て歩道を横切り、馬車のところへ行くだけで水浸した。龍肯は車のステップで雨滴を払い、傘をたたむ。

馭者が鞭を振った。

大聖堂の近くまで来ると、葬列参加者や様々な身分の人々の馬車等であふれ、怒号飛び交う混雑となっていた。雨がそれに拍車をかけている。

龍肯はサント・アッジア通りで降りた。歩いてカフェ・ラタンに入るまでの舗道十数mは通行人同士でぶつかるのも構っていられない。傘など無きが如しだ。

カフェには叭羅蜜多が待っていた。彼は席を立った。

「行こう。急いだ方がいい」

龍肯は再び豪雨の中に舞い戻る。

炎の公式葬儀には、龍肯は一般者としてしか参加できないのだが、叭羅蜜多が便宜を図ってくれた。二人は待たせてあった叭羅蜜多専用馬車に乗ると、一般人進入禁止とされた通りを使って、何の支障もなく二〇〇m先にある聖堂へと向かった。

この日、併せて彝齋肯の葬儀も行われることが決まっていた。二人の私的な葬儀は既に家族らによってそれぞれ行われており、龍肯や普齊らも参加していたが、今日の式典は公的行事として国家的に執り行われるものである。なお、イキリアの発案で由伽と舍却、及び憂貴の弔いも内輪だけで行うことが予定されていた。

馬車が聖堂内にある車寄せ車庫に入った。雨打が唐突に止んだので分かる。出入口から来る瀧垂れ音だけが遠く轟くと、洞窟のような感じだった。出迎えの騎士に蠟燭で導かれ、二人は控え室に案内された。

燎々や楽夏、イキリアがいた。ベ裂とレオンとは厳しい軍服で正装している。

今日の為に戦線から一時帰還したのだ。彼らはベリテとヴァーゴウニユと云う都市の革命に協力し、政府守備軍を撃退中であった。

州都モスコールを奪われ、自治州政府中枢がない今、残りの地方政府は完全なる形骸で、儀礼的な抵抗があるだけにすぎず、すぐに逃亡するか投降するかどちらかで、革命政府は連戦連勝、一日で二個の街を落とすことも珍しくなかった。

いまやモスコール革命会議は中央政府として近隣都市に君臨している。農村でも領主を殺して農民が自治している地域が多く、十月革命以来のわずか一ヶ月で、自治州は八割方革命側の掌中に落ちた。一部地方領主や教会領内の村落、大牧場主及び大地主などの連盟が与しないにすぎない。だが、安寧には程遠かった。現にユヴィンゴ連邦政府が進軍を始めたと言う情報も入ってきている。

「シルヴィエ駐留軍と併せて二十万の大軍だ。そう云う情報さ」挨拶もなく、ベ裂は龍肯にそう話し始めた。龍肯もすぐ何の話しかを理解して頷いた。続ける。「だが、俺ら革命連盟軍も今や十七万にまで膨れ上がった。その中には、レオンの呼びかけに応じて同盟を申し込んだ自治州駐留のシルヴィエ正規軍も約四万含まれている。

結構、いい勝負の筈だぜ。ただし」

ベ裂は言葉を切つてにやりと笑った。

「レオンの存在がシルヴィエ皇帝の帝位を脅かす性質のものである以上、いずれは本国から七、八十万の軍団が来襲する可能性があるがな」

「クーデターはもうないのか」龍肯が訊いた。実際、現革命政府から権力を奪取しようとする派閥による二度のクーデターが起こっていた。どちらも小規模で、あっけなく潰されている。

総選挙は延期に次ぐ延期になっていた。軍の出動によって多くの民衆が徴兵され、投票者が定数に満たないことや、葬齋肯らの死によって時期を逸しているせいだったが、普齊の策謀と云う噂もあった。

いずれにせよ、もはや限界で、この葬儀の一週間後に実施が決定されていた。

龍肯はイキリアを見た。深い憂いに浸された睫が喪のベールのように双眸を翳している。彼女の心は既にどこか遠くにあるように見えた。イキリアは龍肯の視線に気が附くと、歩み寄った。

「ああ、龍肯」嘆きのイキリアは言う。「最近、あなたの気持ちがよく分かるの。もうわたしは仲間同士の殺し合いについて行けないわ」

そのとき颯爽と参廊が入ってきた。彼が早速

「イキリア、涙しているんだね。近頃の君はすっかり気落ちしたようだ・・・どうか元氣を出してくれたまえ。おれはいつも気にかけているよ」

だが、さも軽蔑したように見遣るだけでイキリアは何も言わず、その場を退いた。参廊は怒ったように赤面したが龍肯の目に気が附くと、取り澄ました顔に戻って、つかつかと部屋を出て行った。

今度は見事な黒貂のマントを羽織って王者のように飾った普齊が現れた。

「さあ、皆そろったかね。偉大なる革命理念の具現として生きた者の死を悼もうではないか。間もなくだよ。」

やあ、龍肯。元氣そうで何よりだ。今は何をして暮らしているんだい」

鐘楼の音が時を告げる。

従僕たちが慌しく動き始める。

「さあ、皆様方。そろそろ式典の御時間です」そう呼びかけたのは、普齊の従騎士コルドバであった。漆黒のビロードと銀鎧とで、壮々しくも厳か。一段と昏い影を帯びたように見える。参廊が胡散臭そうに沈鬱な騎士を一瞥した。

式典は炎に関するところではヴァルゴ教で、葬齋肯に関するところではオーデ教で行われ、羅教などのその他の宗教が二人の宗教に共感と崇敬を示す形で参加協力した。

これは普齊が腐心して調整した結果であった。それでも各宗教の一部原理主義者たちは反発したが、各々の宗主らに尽力を依頼し、どうにか抑え込んでいた。原理主義過激派のテロ行為に備えて、この日、参廊の指揮による厳重な警戒が布かれていた。各宗教の賛美歌が響き、厳かな雰囲気が雲霞のように聖堂を揺らぎ満たす。満場の参列者は壮麗に並ぶ各宗教の代表者や革命に携わった各組織の指導者たち、富裕市民層や各種業界の代表者、著名人などであった。立錫の隙もない。烈しい雨の中であるにもかかわらず、外もまた一般民衆らで埋め尽くされていた。それがどこまでも続き、皆一様に俯いている。

祭壇の上方には聖なる像が薔薇窓のステンドグラスを背景に、憂いを込めた表情で神に問いかける仕草をしていた。

龍背は眩暈を感じ、天井のリヴ・ヴォールトを見上げた。

普齊が壇上に立ち、追悼の辞を述べた。選挙に向けた演出だ。革命の主宰者と云う印象を全民衆に向けてアピールしている。

非業の死を遂げる直前は暴君であったと評される葬齋背の葬儀を国葬で行うことには若干の反対もあったが、普齊は断行した。死者を鞭打つよりも、感傷を引き出して涙を誘う方が庶民らの好感情を得易いと計算し尽くしている。

式典の後、小さな教区教会で憂責と舍却、及び由伽の為の祈りが内輪で行われた。沈黙と鼻を吸える音だけのしめやかな儀式で、司祭の言葉も短かった。

既に埋葬は済んでいたので、祈りの後は一同、敷地内の墓所へ出て花を手向けた。

全てが終わって、三々五々に散っていった。

龍背はイキリアが独りで降りしきる中を馬車に乗って出てゆくを見送った。

イキリアの専用の四頭立て馬車はようやく雑踏を抜けると、カディッシュ街にあるシルヴィエ聖教の教会のまえで止まった。

誰もいない教堂に入ると、薄暗い祭壇のまえで彼女は跪き、祈りを捧げた。

イキリアは足音で振り返った。

レオンであった。

イキリアは瞬時困惑を浮かべたが、凜と立ち上がる。

「どうしたの。レオン」

長身のレオンは漆黒のマントを引きずり、長い髪から雨滴を垂らし突っ立っていた。表情に幾許かの憂いが浮かんでいる。

「イキリア」そう言っただけであった。

彼女は顔を横にして俯き、そっと瞼を閉じる。

「レオン。わたしたちは終わったのよ。いつまでもその瞳の奥に哀しみを湛えているのはやめて頂戴。あなたは英雄だわ。それらしくしなさい。

今は御互いにやるべきことがある筈よ」

常に傲然たる厳しさを失わぬ蒼白な顔に、レオンは複雑な色を交えて呟くように告げた。

「君を今でも愛している」

「レオン！」叱りつけるようなイキリアの眼差しに少しばかりの揺らめきがある。

沈黙の後の吐息、イキリアはこう言った。

「いいわ。

わたしもあなたを愛している。分かっているでしょう。だから、あなたはここに来たのでしょ。友人の死を悼み哀しみに打ちひしがれる女が心の拠りどころを求めて、今ならあなたを受け入れるかもしれないと思いついて来たのでしょ！

・・・ごめんなさい。今のわたしには、人間がそんな風にしか見えないの。卑しい言葉だったわ。

レオン。

今は愛なんて口にしても、自分で自分に嘘をついているような気分になれない。虚しいばかり。

ずっとあなたへの気持ちを抑えてきたわ。でも、今はその気力もない。そうでなければ、こうして思いを言うことなんてできないわ。逆に言えば、あなたを愛する気持ちが萎えてしまっているのね。

本当に愛している気持ちがポジティブに生きているのなら、今あなたを愛しているとは言わなかった筈だわ。

レオン、あなたはここ、モスコールで何をしようとしているの」

レオンは俯き、ひたむきな凝視で再び瞼を挙げて双眼を輝かせた。

「無論、君にも何度か言った。俺はこの現実の世に真実を貫く。真の理想を実現させる」

イキリアは強く悲しい青碧の双つ目で彼を見た。

「レオン。」

それなら、真実っていったい、何なの」

レオンは眼を動かさなかった。

「あるべき姿だ。」

まことにして動かざるもの。神に属するものだ」

イキリアは眉を顰めた。

「具体的には？ それって、実際のことで言えば、どう云うことなの」

レオンは間髪を入れずに言った。

「例えば、全ての人間が叡智に目覚め、正しい生活をして、正義の幸福に達する。そんな世の中になることだ。」

「違うか」

「そうね。そうならいいいと、わたしだって思うわ。でも、レオン、そんな夢みたいなことが本当に実現するとあなたは考えられるの？」

「困難な事業であることは判り切っている。だが、挫けてどうする？ 全ては意志の力だ。強く信念を持って全うすれば、必ず亨^{とよ}る。諦めて何ができるものか」

「ねえ、レオン。」

そんな問題だとは、わたしには思えないわ。何か・・・

そう、何か、構造的にそうはならないのよ、わたしたち人間は。

結局、わたしたちは自分を超えられない。自分や自分の家族を、愛する人たちを超えられない。どこかで必ずその選択にぶつかる。そのときに、その問題を超越して、完全な正義に走ることなんてできないわ。

そうでしょう。現にあなたもわたしを愛しているじゃない。他の人と何が違うの。わたしもあなたを愛しているわ。革命の為にそれを超えることはできない。そうでしょう。それであなたの言うようなスタイルの真実が貫けるの？ 全然、違うわ。

本当の平等なんてない。できないわ。それなら、争いや権力の奪い合いが終わるわけじゃないじゃない。見て！ これが革命よ。でも、これがわたしたちの求めているものだったの？ まるで、かつての政治家や王侯貴族たちがやっていたことと何ら変わら

ないじゃない。これが人間の構造なのよ！　ここから逃れられないんだわ！」

レオンは厳しく憂悶を刻んだ。

「確かに君の言うとおりだ。論理的に推し量ればどこにも出口はない。

だが、不可能を可能にしなければならない。意志の力を以てどこかに、想像すらできなかったようなどこかに、不可能な筈の突破口を求めなければならない。必ずそうでなければならない。

ただ、強靱な意志を以て裂き開くしかない。他に何があろうか、人間にとって！」
再びイキリアは嘆息した。

「レオン。

それはあなただから言えること。誰かが言っていたけれど、十億人のうち一千万人しか達成できないような真理を、わたしは真理と呼びたくないわ。

もし仮にあなたの言うような真理をあなたが達成できたとしてみてよ、どうなるの？　わたしには、分かるわ。達成できた人間とできない人間との相克になる。あなたは、結局、あなたの真理を達成できない者たちを屈服させ強制するか、滅ぼすか、若しくはその逆になるか、それしか選べなくなるわ。独裁か、滅亡か、よ。

ねえ、レオン、皆が幸福に至らなければ、本当の平和は来ないのよ、本当の正義の時代は。優しい真理、易しい真理以外は、差別と虐殺との生みの親になるだけなのよ。或る特別な真理は、或る特定の者たちへの愛情と同じで、逆に言えば他者への苛酷なのよ。レオン、あなたの言う真理では、結局、王侯貴族たちと同じ轍を踏むだけだわ。血統の良さを誇る者たちが平民を蔑むように、血統と云う言葉が、ただ真理や正義と言う名に変わっただけじゃない。

そう、あなたの言うような真理を達成できたとしても、構造からは逃れられない。

レオン、強い者なんていない。強さなんて、虚しいのよ。構造的な観点から見れば、人間には互いに差異なんてない。ただ、与えられた運命が異なるだけ。

人間は様々な運命でその人生を生きている。ただ、それだけの違いなのよ。独裁者や虐殺者や泥棒や殺人鬼だって、彼が彼に生まれていなければそうはならなかった筈だわ。善人も聖人も清く義しく生きていることを誇りにする理由はない。彼らだって、殺人者に生まれていれば人殺しをしていたんだわ。

だからって悪い人を赦せなんて、言うつもりじゃない。

ただ、運命が違うだけで自分自身に由来するものじゃない、だから、違いなんてないんだって言いたいなのよ。結局、偉人も悪辣者も操られているだけなのよ。人間を衝き動かすちからに。

聖者も偉人たちも努力はしたでしょうけれど、なぜ彼らには努力ができたの？　わたしが言いたいのは、それよ。なぜ彼らには、その意志や気力が湧いたのかって云うこと。逆になぜ悪いと言われる人たちにはそれができなかったの？　なぜ彼らは自分の欲望の為に人を犠牲にしまったの？　全てが彼らの意図なの？

人間は操られているだけだわ。あなたは強靱な意志を以て、と言うけれど、それも同じなのよ。どこにも逃げ場はない。

人間には、どうにもならないのよ。わたしたちは、投げ込まれた情況や、与えられた条件を生きる他にない。改善はできるわ。やろうとすればね。でも、そのまえに、

やる気持ちが起る人間や継続できる人間にならなければ、できないのよ。

善いだの、悪いだのを意識するのは、ただ差別化して、自分を慰めているだけ。本当は、皆同じだわ。人間は肯定を求めているだけ。所有や愛や権力や富によって、ね。そうよ、皆同じなのよ、レオン。あなたのように誇り高く、意志も強靱で、特別なカリスマ性を持っていて人々を追従させることができる人でも、結局、わたしを愛しているわ。あなたは、わたしを殺そうとする人がいれば、その人に家族や愛する者がいても、斬り殺してしまうでしょう。だから、争いは終わらないのよ、レオン。あなたも特別じゃない。

人間は、誰もが同じ苦しみを持っていて、そこから逃れたくもがいていて、そのもがきが御互いに凌ぎ斥け合うことになっているのよ。愛もそのひとつのかたちだわ。そして、それ以外の選択肢がない。

今苦しんでいる人には、今苦しみを癒すものがどうしても必要だからよ。苦しみがその人自身であって、それが正義か真理かなんて批判するだけの余地も距離もなく、苦しみを癒したいって思う、理屈じゃない衝動が強烈に人間を駆り立てる。それは動かし難い、絶対だわ。是非のないことなの。

現実なのよ。あるのは、現実だけなのよ。ただ、現実だけがある・・・

ねえ、レオン、いったい、現実って何？ 答えはいつも空論。どこにも行き着けない。ただ苦しみがあって、ただ逃れたいって云う、それだけにしか見えないわ。どうにもならない。

結局、そうやってもがきあがいているうちに、現実の中で泥塗れになってしまう。

何かをやるうとしても、いつしか現実に呑み込まれてしまう。革命が現にそうなったようにね。いくら高い理想を描いて高潔な精神を持っていても、人と人との間で現実的に何かしようとする、そこへ堕ちてしまう。

自分自身から逃れられないように、そこからは逃れられないのよ」

言い切ると、イキリアはレオンを置いて歩き出した。教会の外へ出た。雨の中に龍肯が蕭然りようといた。

龍肯りようは一部始終を嫉妬に苦しみながら見ていた。イキリアはレオンを愛していると言った。言葉には微妙なニュアンスが含まれていたが、龍肯りようの耳にはその言葉の骨組みだけが象かたどられ刻まれた。

昨今、超越的な生き方をしているかと自負していながら、何の進捗もないことを痛感する。

「見ていたの、龍肯りよう」その問いに彼は答え、「ああ。見ていたし、聞いてもいたよ。君を追っていたんだからね、当然さ」と言った。

「そう」イキリアは言って、傘も差さず歩き出すと馬車に乗ろうとした。

「イキリア」龍肯りようは言った。「悪いけれど、僕を送ってくれないかい。傘があってもずぶ濡れなんだ。一般庶民は馬車なんか持っていないからね」

「いいわ。乗って」

二人は車内で殆ど口を利かなかった。龍肯りようは親指と人差し指とで頬を押さえて考え込んだままだった。イキリアは遠くを見るように車窓に流れる雨滴の動きを眺めてい

る。蹄の音だけが規則正しく響いた。

「最近、どうしているの、龍背」唐突にイキリアから訊いてきた。

「どうもこうもね。」

ばらみた

実は生活費は叭羅蜜多から貰っているんだ。昼間はボランティアに従事しているよ。国庫から出した食糧を貧しい人たちに配給する仕事さ。それから比較的裕福な家を廻って要らなくなった衣類なんかを回収している。着るものがない人たちに配る為だ。後は仮設住宅の建設を手伝っているかな。

衣食住足りて、初めて人間は人間らしく振舞えるのさ」

「いいわね。わたしもそうするわ」

「そうするって？ どう云う意味？」

「どう云う意味もないわ。辞めるのよ。あなたと同じになるわ」

「議員に立候補しないのかい？」

「してどうするの？ 何の意味もないわ」

りょう 龍背は両方の眉を上げながら、

「なるほどね」と言った。

その後、再び沈黙。

アパートが近くなってから、龍背が口を開いた。

「イキリア、一つだけ言って置きたいんだけど、・・・その、君が教会でレオンにしていた話のことさ・・・」

ねえ、確かに君の言うとおり、僕らは人間構造の中でしか生きられない。僕はそれを生存と呼んでいる。僕らは確かに操り人形さ。

けれど、イキリア。それでもそれなりの答えの中で生きている。事実、そうじゃないかい？ 他のありようなんか考えられないだろう。

イキリア。

僕らはできることを努力するしかない、って云う結論は、気の持ちようでそれほど絶望的な結論ではないよ。悲惨な事実は多々ある。歎びだって、幾らかはある。全面的には、認められないけれど、どうにかやっている。それ以外の生はないのだから。他にはないのだから。

これが優しい、つまり、易しい真理なんじゃないのかい？ 事実だから。ともかくも、僕らは生きている、少しでいいからましになるように頑張ろう、死んだ者たちの為にも、ってね。

誰もが普段しているような、そのあたりまえな生き方以外に生き方はないと云うだけの、そんなあたりまえな真理さ」

「でも、それでは、何の進捗も見られないことになるわ。不可能は認める。認めるけれど、批判を止めたら、それは、結局、今のままでいいってことじゃないの。宗教・民族紛争を放って置くって云うことじゃない。

繰り返し、終わりのない悲劇が継承されてゆくのを」

「分かっているさ！ だけれど、どうしようって言うんだい？

君らに、いったい、何が分かると言うんだ！」

イキリアは少し驚いた目で龍背を見つめた。

リョウ
龍背は感情的になる自分を抑えられなかった。

「僕だって家族を虐殺されている。この刺青はそのとき彫ったものだ。君らには何も分かっていないんだ！」

イキリアにとつては理不尽なことを感情任せで言っている、それが分かっているがら、分かっているけれど抑えられない。過激な言葉が次々とあふれてくる。意識が止めようとすればするほど、堪え切れず逆上してみたくなった。何か抑えていたものの堰が切れて流出してゆく。イキリアへの残酷な気持ちが込み上がって抑制できなかった。

「僕の家族は、陵辱され、切り裂かれたんだ」

リョウ
龍背は嗚咽と慟哭とを以て姉や妹の死に様をイキリアに告げた。イキリアは黙って聞いていた。聞き終えるとはらはらと涙を零した。その双眸は煌めくように美しかった。

「そうだったの。ごめんなさい。知らなかったわ」

「いいんだ。別に」

リョウ
龍背は恥ずかしくなった。感情はすっかり落ち着いていた。

「だから、ここで異民族間の殺し合いが起こったときは、悪夢が甦ったようで、まるで魂を抜かれたようになってしまったよ」

「可哀想に。それで元気がなかったのね」

「炎は本当に悲劇だった。彼は全ての民衆の為に戦った。それなのに、民族に名を借りた憎悪のせいで、何の罪も犯さずして殺されたんだ。それが民族紛争なんだ。個人の顔を見ようとしらない。それが人間の愚かさなんだ。誰もが同じように持っている愚かさ。」

炎を思うと胸が裂けるようだ、イキリア。彼は皆の為に自分を犠牲にしたのに。それが民族紛争なんだ。何も冷静に見ようとしらない、見ることができない。事実を見ようとしらない。本当の残酷さだ。

本当に惨たらしいことだ。でも、それは歴史の中で飽きずに何百万回も、互いに、御互いに続けられてきたことなんだ」

「分かるわ。でも、だからこそ何とかしなくちゃいけないんじゃない」

「どうやって？　それができるなら千年まえにもできているさ。誰も苦しんで死んではいけない筈だ」

イキリアの双眸が湖のように静まった。宗教的な厳かさを湛えて。

「そうかしら」

リョウ
龍背は目を伏せた。

暗澹とした狭霧が胸に滲んだ。嫉妬だ。妹の死を悼みながらも、自分自身の嫉妬から抜けられない。噛み潰す。

「やはり、君とレオンとは似ているよ。君らには本来的な意味での絶望はない。知ることもない。だから、自分を慰めることもない。絶望とは、自分自身への慰謝なんだ。弱い者が生きる為の方便なのさ。君には優しい真理は似合わない。」

イキリア、気が附かないのかい？

君の姿勢は本質的にレオンと同じだよ。

ねえ、イキリア。

レオンの生き方はとてもポジティブだ。今の君と同じさ。限界の壁のまえでも屈しないんだ。

彼を責めるのは酷だし、君が言うのはおかしいよ」

そう言い終わると、龍肯は黙った。イキリアがじっと考え込むのを眺める。龍肯は馬車を降りて手を振った。

「じゃあ、また」

「龍肯」イキリアが呼び止めた。

「僕はもう行くよ」

「そう。また会えるわね、あなたに」

龍肯の顔は滑稽に歪んだ。微笑んだ。

「今度、ゆっくり話そう」

切り返し去り行く馬車。窓枠に嵌まったイキリアの画像は、ずっと考え込んでいるように、龍肯には見えた。

見送りながら、どこかで似たような場面があったような気がしていた。

けれど、思い出せない。龍肯はふっと思った、いいじゃないか、そんなこと。現実が何者でもないのなら、何であつても変わらないのだから。現実なんて、ただ記憶でしかない。記憶が実際、何者であるかなんて、誰にも知ることはできない。

リイリュイー宮殿。普齊は赤漆塗りで巻き込み式の蓋が付き、贅沢な細工を施された机で物思いしている。豪奢な衣装をまとい、権力の頂点にるように見えても、普齊の権威は不動と言えない。それは膨れ上がった泡のようなものであつて、彼には実質的な力がなかった。

レオンとベ裂とは、自治州内の他地域で連戦連勝を飾り、革命を広め、民衆を高揚させ、かつ絶大な人気を誇り、また革命存続に絶対必要な、軍隊と云う力を持っている。参廊は現時点では普齊の下で働いているが、抜け目がなく油断できない巧者で、警察・諜報と云う具体的な力を持っている。

それに比べて普齊には物理的な力がない。あるのは、いわゆる手腕と云う奴だけだ。レオン、ベ裂、参廊のうちの誰かがその気になれば、たちまち彼の権勢は覆されてしまう。

尤もレオン、ベ裂については懸念していなかった。参廊の動きには眼を光らせていた。偵察を怠っていない。だが、同時に参廊が情報網を駆使して、偵察されていることを知っていることをも、普齊には判っていた。彼の立場は絶対と言うには程遠い。

そうでなくとも、連邦とシルヴィエとの合併軍が迫っていた。いや、普齊の耳には既にシルヴィエ本国から五十万を軽く超える軍勢が進行中であることが聞こえている。神聖シルヴィエ皇帝ジュダスは本気なのだ。

普齊は久しくまえから南北両大陸の超大国同士を牽制し合わせ、そのパワーバランスの下に自らの生きる小国の平和を構築しようと画策していた。

湖上城のラグナレク伯爵の許へ使いに出したコルドバは、今から一ヶ月まえ、革命の日から数えて五日後に死者のような顔でモスコールに帰って来た。

普齊は封印されたマールロ皇帝羅班からの親書を受け取り、読了後、日取りを決めて隠密裏にモスコール郊外でアイリッシュと会った。そして、契約を締結した。

彝齋肯の影で不遇をかこつていたかに見えた時代、実に普齊は暗躍し、自ら練った計画の実現に勤しんでいたのである。

マールロ帝国との密約後、普齊はラグナレク伯爵の摩訶不思議なコネクションを利用し、マールロ帝国軍の北大陸上陸作戦の為のルート作りに奔走した。帝国軍が上陸後、ユヴィンゴ連邦内に入るまでには二つの王国を渉らなければならない。その国王らにマールロの進軍に協力するよう、約束を取り付けなければならなかった。

当初、普齊は相当な困難を予想していた。利益と脅しと両方で交渉し、粘り強く譲歩を引き出すつもりでいた。他国の王族が、いくら貴族出身の普齊とは言え、民衆による革命政府の一員などをまともに相手にするとは思えなかったのである。

だが、それは実際、始めてみればいとも容易いことであった。

実はそれらの国々の実質的な有力者たちは既に以前からの巧みなラグナレク伯爵の外交術によってシルヴィエの脅威に対する畏怖を掻き立てられていた。また、ラグナレクを通じて皇帝羅班の提示する甘い約束の下に懐柔され、普齊の交渉以前に帝国マールロに与する心を決めていたのである。

普齊はそのとき、ふと自分自身もそう云う王たちのうちの一人にすぎないのではないか、実はこのプランはラグナレクによって主宰されているのではないかと感じた。

思えば、湖上城に籠ったままで世界を動かす、彼の伯爵ほど怪異な人物も世にいない。普齊には顧慮する余裕はなかった。惑いを振り切って、ひたすら行動した。ただし、参廊の監視には十分注意して。

当時は彝齋肯が台頭し、普齊が目立たぬ存在となつていられたとは言うものの、参廊に知れないよう動くのは並大抵ではなかった。

普齊にとつて、最大の敵は参廊なのである。したたかな参廊、何とかして彼の力を殺ぐべく、普齊は総選挙後の革命政府内の人事案作りに腐心していた。

頬杖を附く自分の顔がランプの光で鏡面のような机上に映るのを見て、ふと革命以前の日々が思い出されたが、苦笑が込み上げるだけであった。あの時代に思いを凝らした計画を今実行している。それなのに、全然別の場所にいるみたいであった。全く別の場所。見たこともない田舎道。

参廊は組織上、普齊の下で働いている。暗礁に乗り上げたままの真実査問審判委員会の委員長代理を兼ねて任せられていた。すなわち舎却の後任となつたわけであるが、舎却が当時の権力者彝齋肯と密接な関係があつたのとは全く異なり、参廊は普齊が自分を失脚させるべくこの任を委ねたのだと明瞭に感じていた。

だが、活路を見出すべく、逆境を順境に転じようと、参廊は自らの持てる特性を最大限に活かした。細密な情報収集で立件し、晰らかに立証されるものについては刑の執行に踏み切り、曖昧なものや自らを危くする件については引き延ばしに延ばした。

また緩やかな措置を取って恩を売っておけば後々自分の立場を有利にするであろう取引の余地があるものについては、最大限の配慮をした。特に民族主義者である彼は、パーリ人の有力者を殺ぐことのないよう十二分に熟慮していた。

こうして、いくらかでも彼は自らの基盤を足していた。

総選挙は一部過激派の反対テロがあつた以外は無事に終わった。結果は大方の予想どおりで、暫定的であつたかつての革命会議のメンバーは、死んだ者と脱退した者とを除いて全て議員となつた。当初と状況が異なり、各地方都市も含めた広域な革命会議を構成する必要から、結局、地方会議と中央会議との二段構えの代議制となつた議員定数は総数で五百名となり、齊暦二七二七年十二月八日、正規の議員による第一回革命会議が開会され、普齊が議長に就任し、会議の召集権を握つた。以前より練つていた憲法案を第一議案として、議長自ら提議した。

また組閣すべきことが急務であると論説し、組閣組織委員会の設立を併せて提議する。翌々日の第二回革命会議には委員会の構成員を各自推挙するよう求めた。いずれも承認を得た。なお、組閣までは暫定的に従前の役職者が従前の組織で公務を継続する旨、確認される。

議員レオンと議員^{いれつ}とは再び戦場へと戻る為に、議員^{そうれ}爽烈と議員^{ばらみた}叭羅蜜多とにそれぞれ委任した。かくして両名は十二月十四日、ペンティア平原でシルヴィエ駐留軍とユヴィンゴ連邦軍との連合軍を撃破し、十七日には連邦の首都ヘルツエを完全制圧、事実上、連邦国は革命政府の掌中に落ちた。

モスコクールは戦勝気分で盛り浮かれ舞い上がる。遂に勝利したのである。ユヴィンゴは民衆のものとなつたのだ。

普齊^{ふせう}は軍部に人気を取られぬよう、よく十八日、国名を『コム・デ・エルゴ』と改める旨を発議し、緊急会議を召集した。アッシューラ語で人間共同体と云う意味だ。

普齊^{ふせう}はさらに盛り上がった空気の乗せるように勢いよく、革命憲法の制定を一気に決議にまで運ぶ。

龍背^{りよう}は旧市街のカフェでぼんやりしていた。新聞を広げると、驚くべき記事が載つていた。

「何だつて！ レオン革命会議議員（革命防衛委員会顧問、軍事全権代表）暗殺未遂事件！

どう云うことだ、これは」

十八日未明、首都ヘルツエを占領し、戦勝祝賀で浮かれていた革命軍の隙を突いて、何者かが軍幹部の宿泊所となつていた当地の高級ホテル、オテル・リティに潜入、最上階のラウンジに入ろうとしたレオンを短剣で襲つたらしい。幸い、怪我はなかった。その場で逮捕された犯人は、地元のカリレオ人青年で、帝国主義者を抹殺するのだと口走つていると言う。龍背^{りよう}は詳しい事情が知りたくて、爽烈^{そうれ}の許へ急いだ。

途中で燎^{りようりよう}々の馬車に出会つた。行き先は同じであつた。

「早く乗りなさいよ、龍背！」
エルゴノミクス

人間工学に基づいた造形で、絹織張りの贅沢なソファに腰を沈めると、早速、
燎々りようりようが話しかけてきた。

「これは陰謀よ。絶対そうだわ」

「陰謀説かい？ つまり、犯行に及んだこの青年の単独行動じゃないと云うことか」

燎々りようりようが鼻尖を突き出す。

「もちろんよ。考えられるのは、三とおりね。」

第一はシルヴィエからの刺客よ。大枢機卿イヴィルが送り込んできた可能性はあるわ。第二がレオンの人気を畏れ、いつか権力を掌握されると恐れる者が企んだ。でなければ、国内の反革命勢力よ」

「まさか君は本気でそんなことを考えているのかい？」

「もちろん、本気よ」

「考えられないよ。」

で、第三の推測は？」

「イキリアよ。遂げられない想いに身悶える女が、思い余って愛する人を殺戮しようとする」

「まさか！」

「何がまさかよ！ 本当にあんたたちったら！

ねえ、ちよつと考えてみてよ。ほら。」

・・・愛情のもつれからくる依頼殺人つて云うの、 どう？」

「どうつて、三文歌劇のタイトル決めているんじゃないんだから。低俗なゴシップ記者みたいだよ。僕は・・・そうだな、確かに陰謀説は十分あり得る。」

でも、それならやはりシルヴィエだろうな。シルヴィエからの刺客説さ。いくら何でも革命政府内部の権力抗争や反革命勢力で、つて云うのは・・・さすがにそこまではないだろう。だったら、狂信者の単独行動の方が解り易いよ。」

イキリアが、なんて馬鹿馬鹿しすぎるね」

「あら、そうかしら。男どもは皆イキリアの味方なのね」

「別にそう云うことじゃない」

「ねえ、あんた。今イキリアが何しているか、知っている？」

「いや」

「イアウエル地区にいるわ。最近、ガリレオ人過激派が住み始めてね、ノルティオ人やアルレリア人と殺し合いをしている地域よ」

「その抗争のことは知っているけれど、なぜイキリアがそんな危険なところで、いたい、何をしているんだ」

「布教活動よ・・・と言うか、よく分からないんだけど、民族の平等と和平を説いて共同生活しているらしいわ。」

多分、あんたは明日あたり行くんでしょうね、そこに」

龍背りようは応えなかった。イキリアの行動の理由を考えていた。燎々りようりようが独り続ける。「人間はね、その心の奥底に様々な壁や暗黒を抱えているのだよ。人格つて云うのは一つじゃない。いろんなものが統合されているだけであつて、心は複数だし、複雑系

的なのよ。解る？」

馬車は川に面したネオ・ルネッサンス様式の建築の馬寄せに着いた。二人は飛び降りた。

だが、爽烈そうれと話すことはできなかった。

彼の邸宅は監督府の傍にある高級マンションであった。燎々りょうりょうが名乗ると、管理人と護衛の将校とが取次ぎの為に階上へ昇っていった。すぐに蒼白そうはくになって二人が戻ってきた。

「大変です。死んでいます。殺されたんです。御返事がないので、合鍵で開けたら、もう血の海で……」

燎々りょうりょうが小さく叫んだ。龍肯りゅうけんは気が遠くなるような感覚を覚えた。

爽烈の遺体は異常に惨たらしい状態で、切り裂かれ、抉られ、肉片と化していた。

「警察へ！」

翌朝、世上は騒然とする。

連続暗殺事件。暗殺者がモスコールにも公然と潜入している！ たちまちそう云うことになってしまった。普齊ふせいの号令の下、参廊さんろうは緊急捜査本部を設置して、旧ユヴィンゴ連邦領内全域で反革命主義者であると推定される者を次々拿捕し、その半数を反逆罪で処刑したが、レオン暗殺未遂、爽烈殺しの犯人はいなかった。参廊さんろうの処置に異議を唱える者もいなかった。また参廊さんろうは旧政府の管理していた入国者の記録にあたって、シルヴィエから怪しい者が入国しなかったか可能な限りの検閲をするよう指示した。

犯人は捕まらなかった。

爽烈事件に関して言えば、犯人はデヴィレ川側の窓から侵入している。恐らくは小舟で川を下るか、或いは上るか、いずれかの方法で来たに違いない。

爽烈そうれの部屋は四階にあった。川面から垂直に聳える堤壁、また堤壁から一直線に伸びるマンションの四階まで、一気に登攀できる相当に身軽な奴だ。特殊部隊の連中かもしれない。しかも犯行推定時刻が午前八時頃であることを思えば、人目に附く可能性も考慮されるわけだし、短時間で周辺に注意を払いながら見立たぬように登れる自信がなければできない」

叭羅蜜多ばらみたはそう分析してみせた。

龍肯りゅうけんも頷く。

「だとすれば、やはりシルヴィエの線が濃厚だろうな。この国には、そう云う人間を育成するノウハウがない。軍人でも民間でも聞いたことがない。

シルヴィエの兵士の中には、特殊訓練を施されて殺戮兵器と化した選抜精鋭部隊があるそうじゃないか」

「確かにそうだが……しかし、腑に落ちない点もある。殺し方だ。余りにも猟奇的で、職業的じゃないような気がする」

「では、何か恨みだとも言うのか」

「そう云うわけではないのだが……」

「判りましたよ」

「何だと。早く言え、何者だ？」

ここで参廊さんろうは勿体を附けるように間を空けて上目遣いに普齊ふせうを窺った。

「やはりシルヴィエの手の者でした。しかも驚いたことに単身でこのモスコールに潜入潜伏している」

「となると、レオンを襲ったのも、シルヴィエの関与が考えられるわけだな」

「そうですね。可能性としては。さて、その真犯人ですが・・・」

本名、カール・ヨハン・ヴォロフ。男。二十五歳。身長一九四cm。シルヴィエ人で、二十年前に辺境のイリノイチと云う寒村で家族を目のまえて虐殺されています。神聖帝国を非合法に出国しようと計り、国境外にまで出たのですが、なおも追ってきたシルヴィエ兵士に屠られたようです」

「相変わらず酷いな。で、何でカールだけは助かったんだ」

「そうです。当時、五歳でしたからな。どうも特殊部隊に編入させられたようです」

「五歳でか」

「幼年部もありますから。特殊精鋭部隊は完全なる殺戮ウエポンへと人間を変えます。こどもの頃から専門に教育するシステムもあるのです。そして、聖教への絶対帰依を誓い、生涯妻も娶らないのです」

「狂信集団『死屍の軍団』とは、また一味違うんだな」

「しかしながら、記録を見る限りこのヴォロフと云う男は、怪物ですよ。二七二年八月にコギトスム王国の二個小隊、完全武装した兵士約五十名を独りで皆殺しにしています。しかも」

「何だ、さつきから。変な間を置くな。俳優か、おまえは」

「素手です。解りますか。モウリイの森で五十人の兵隊を素手で皆裂き殺したのです。あの爽烈そうれつの死に様と同じですよ。以来、彼は血塗れのメアリーフランドエイ・マリーから取って、MARIEと仇名されています」

普齊ふせうは身震いした。

「どうしてそのようなことができるのか」

「解りません。ただ彼には異常な能力があったのです。恐らくはそれを見出されて殺されず、特殊部隊に編入させられたのでしょう」

普齊ふせうは聞きながら、ラグナレク伯爵を連想していた。

「記録によれば、虐殺のショックで人格が一変して、感情表現等がなくなってしまったとあります。見てください。これが来歴書の写しです。ほら、ここです。『彼は十数時間泣き続けていた。五歳であのような場面を見せられればさぞかし魂までも引き裂かれるであろう。だが、これこそ我々には好都合である。こう云った人間は容赦のない、仮借なき兵士になる。泣き止んだとき、面を上げた彼の眼は既に人間の領域にはなかった』

どうです。天性とこの経験によるトラウマとで、常人離れた殺戮兵器になったと推定できます」

さすがの普齊ふせうも目が潤んだ。同時にこんな記録を入手できる参廊さんろうの手腕にも震えた。

「酷いもんだな。それがいったい人間のやることなのか。まるで、誇らしげに記録しているではないか」

「仕方ありません、それがシルヴィエですから」

「レオンが叛逆に立つのも解る。こんな国に世界を制されて堪るか。

ともかく、これで判った。至急非常線を張ってくれ。刺客の狙いは帝国を裏切ったシルヴィエ人だと思われるが、全ての革命政府要人の警護を嚴重にしておくんだ。それから、レオンにもこのことを連絡してくれ。

可能性とすれば、本来シルヴィエが一番殺したがっているのは彼なのだから、例えばここから五百km北の国境附近に布陣していようと、与えられる情報は全て与えておくべきだろう」

ばらみた
りよう
龍羅蜜多の邸宅の書齋で談笑しているとき、革命保安委員会からの使いが訪れ、龍肯は初めてMARIEの話を聞いた。

「とんでもないことになったな。レオンは今、シルヴィエ本国から進軍中の大軍に備え、急遽ユヴィンゴ連邦国軍二十万を編成し直しながら国境に布陣しているから、MARIEから被る危険はないだろうが、むしろ、シルヴィエに近い分、暗殺の機会はより多くなるのだろうな。

向こうは占領した首都の暫定統治や高級将校や政府要人らを拘束し、その処分待遇等に追われていると言っから、護衛などは手薄になり易いらしい。本当に危険だ」

りよう
龍肯は叫んだ。

「いや、龍羅蜜多、それよりはイキリアだ。彼女が危ないよ！シルヴィエ人の裏切り者で、しかも僕と同じく既に要人ではないから警護も附かない！」

「確かにそうだ。今彼女はどこにいるんだ。取り敢えず、ここに匿おう！」

「場所は大体分かる。急ごう、龍羅蜜多！」

イアウエル地区に着くと、階段に坐っていたノルティオ人の老婆に龍肯は訊いた。イキリアの居場所はすぐに判った。ここいらで彼女を知らぬ者はいないらしい。

「教会堂にいらつしやいますよ。子どもたちを教えているんです」

路地を抜けて、小さな広場に出ると、オーデ教徒の古い教会堂があった。入ろうとすると正面入口で参廊が出てくるのに行き逢う。

「何だ、おまえたち」狼狽しているようであった。その顔の赤さには、ただ驚いたと云うだけではなく、憤怒の相が読み取れた。

さふらう
参廊は目を逸らして言った。「イキリアに会いに来たのか」

「そうだとも。おまえこそ何だ。犯人探しで多忙の筈だぜ」龍羅蜜多が皮肉を込めて言った。龍肯にもなぜ参廊がここにいるかは察しが附く。

「そうともさ。ただかつての仲間を心配して見に来ただけさ。では、おれはこれでおまえの言っとおり多忙なものだな」

光差す堂内の祭壇の近く、十人掛けの席が二列あって、その前二段に子どもらを坐らせ、イキリアが何かを語っている。声は晰らかに響いていた。

りよう
龍肯は躊躇したが、龍羅蜜多は遠慮なく声をかけた。「イキリア！」

彼女は驚いたように声のした方を見たが、誰だか分かって少し顔を曇らせた。

「あらあら。今日は本当に、訪ねてくる人が多いのね。さあ、皆、もうここまでにしましょう。気を付けて御帰りなさい」

「はあい、せんせい、さようならあ」

子どもたちは元気よく声を挙げて出て行った。

三人は席に坐った。イキリアが真剣な表情に変わって言った。

「あなたたちが来た理由は解っているわ。爽烈そうれのこと、さつき参廊さんろうから聞いたの。

・・・本当に酷いこと、信じられない。シルヴィエが差し向けた暗殺者だなんて。でも、ジュダスならやり兼ねないわ。裏切り者たちへの見せしめで彼は殺されてしまったのよ、可哀想に！」

「うむ。だが、それが分かっているなら話が早い。ここでは余りにも危険だ。俺の屋敷に籠はらっていた方が安全だ」

叭羅蜜多ばらみたはそう言ったが、イキリアの表情を見て、龍肯りょうこんはそう早くもなさそうだと直感した。

「悪いけれど、断るわ」案の定イキリアがそう言う。叭羅蜜多ばらみたは怪訝な顔をした。

「なぜだ。イキリア？」

「ここの人たちを見捨てて、去ることはできない。今また再び起こった爽烈そうれの死を思えば、なおさらだわ。権力への欲望の為に彼は殺された。生存への執著が、彼を殺したのよ。わたしたちの仲間に殺し合いをさせたのよ！ 命を惜しんで、ここの人たちを見捨て引き下がれと言うの？」

それに今さら命を狙われることなんて！ わたしは既にガリレオ人の過激派組織に命を狙われているわ。

わたしが何をしているか知っている？」

龍肯りょうこんが応えた。

「何か布教活動だって、療りょうりょう々から聞いたけれど・・・」

イキリアは高らかに笑った。

「相変わらずね、彼女も。まあ、でも或る意味ではそうかもしれないわね。

いい、龍肯りょうこん、わたしはね、さつき見たとおり、ここでノルティオ人やアルレリア人の子どもたちに読み書きや簡単な計算、それから道徳教育になるように物語をして教えているの。ここの子どもたちは貧しくて学校に行けないのよ。

他には壊された家の修復を手伝ったり、簡単な怪我や病気の手当てをしたりしているわ。医学の知識もあるのよ、わたし。ささやかにやっているわ。

そして、同じことをガリレオ人の子どもたちやその家族の為にしているの。時々ノルティオ人やアルレリア人とガリレオ人の子どもたちとを一緒に話し合わせたり、共同学習させたりしているわ。そうすると、ガリレオ人の過激派やアルレリア人ノルティオ人家族なんかから抗議苦情や脅しがくるのよ。でも、言われっ放しじゃないわ。

このまえ、ガリレオ人のテロがあつて、ノルティオ人の家族が被害に遭ったときは怪我をした子どもを連れて抗議に行ったわ。この子を見て、こんな幼い子どもにあなたたちは何てことをしたの！ あなたたちがしたいことはこう云うことなの！ って

訴えたわ。

相手も大半がまだわたしくらいの若い男の子たちで、黙ったままだった。

だから、わたしが今住んでいる借家のまえによく動物の屍骸と脅し文句が置かれていることがあるのよ。

ガリレオ人たちは言うわ。自分らが受けた虐待の償いを奴らにさせるんだって。

仕方がないわ。

それが生存なのよ。わたしたちだって、彼らと同じなんだわ。でも、それを赦したら、永遠に平和への可能性は閉ざされる。どうしていいのかわからないけれど、黙って入られない。認知はしても、容認はできない。

わたしは、生存に抗議する。だから、ここを退かないわ」

龍肯は内心唸った。叭羅蜜多が反論する。

「だが、イキリア、それでは現実問題として生きてゆけないだろう。君が言うのも理解できないが、何より生きてゆけないのでは論議以前だ」

「どうして生きなければならないの？ だったら、死ねばいいのよ。多くの不幸を救う為に！」

龍肯が静かに言った。

「だが、イキリア、それでは君がいつかレオンに言った言葉と矛盾するよ。君の言う真実は、十億人のうち百万人ですら受け容れられない真実だ。超越的な真理は相克しか生まない。君が言ったじゃないか！」

イキリアは一瞬、黙ってしまった。だが、

「そう、矛盾しているわ。でも、どうすれば、いいのかしら。

龍肯、叭羅蜜多、あなたたちだったら、どうするの？ 永遠にこのままなの？

できないわ。もしそうなら、生きる理由なんかない。龍肯、あなたがまえに言ったように、少しでもましになるよう、にじり寄ろうとすることは、止められない。

これがわたしの執著よ。何か心理的な要因はあるのかもしれない。ともかくこの事実を認めるわ。選択肢はないの」

沈黙。

龍肯の脳裏に様々な思いが独白する。そう、万民に容れられなくとも、生きる為に避けられない真理がある。素粒子の数だけ真理はある。畢竟、所謂真理と云うものはないのだ。別段、どうと言うことではない。諸概念は無効なのだから。

だから、悲劇は終わらない。終われない。逃れられない。イキリアのまえではそれを言いたくない。

心底からそう確信すれば、彼女は自分を貫いて容易に死へ向かってしまうだろう。いや、じきに彼女は覺る、このまま放って置けば。或いは彼女自身を晰らかに享らしめて生存への闘いを挑まんとするイキリアの本質的姿勢を遂げさせることがその生の真実を全うさせ、真実の愛と言えるのか。

無責任な空論だ。龍肯はそう考え直した。だが、生存への闘いと云う言葉が彼女の双眸の燦めきに似つかわしく見えてしまう。翼がもげて墜落するイカルス。そうさ。

無論、不可能なのだ。イキリア自身も知っている・・・

ようやく叭羅蜜多が切り出した。

「だが、このまま君を放つて置くことはできない。俺たちもここに残ろう。俺は家へ連絡して護衛兵士を呼び寄せよう。それなら文句はあるまい」

「勝手にしていいわ」

その一部始終を参廊さふらうの密偵が聴取していた。参廊さふらうはその報告を受けると、嫉妬と憤りと緋い交ぜになったどす黒い焦燥に駆られた。彼は普齊ふせうの許に赴いた。こう言った。

「イキリアは革命への裏切りを行っています」

普齊ふせうは一瞬驚いてから笑った。

「何を、馬鹿なことを！」

参廊さふらうは真剣な表情でさりげなく言った。

「彼女は今、龍背りようや叭羅蜜多ばらみたと寢食をともしして、反革命思想を抱いています」

普齊ふせうの顔色が変わった。ためらいながら訊ねる。

「詳しい状況を話したまえ」

聞き終えて普齊ふせうが言った。

「うむ。で、どこが反革命なのだ」

「神聖なる革命憲法条文では、法の下での自由と平等とを認めています。すなわち財産所有の自由、居住、言論信条の自由と、裁きの平等、税や労働、教育、法令遵守などの義務の平等です」

「うむ。無論、そうだとも」

「彼女イキリアの思想は完全なる平等です。私有財産の放棄です。過激な平等思想は私有財産と矛盾します。私有財産を罪と見做します。一切の差異がないことを自由と見做すのです」

普齊ふせうが唸った。

「そのような理想主義は確かに美しい。

だが、それは美しすぎるのだ。

「いったい、そんなことで社会が成り立ちえようか。むしろ、偽善に満ちた形式主義的な社会構造が生まれるだけだ。

それだけではない。実際問題、現状社会を構成する上で最も有力な富裕市民層が黙ってはいない。実質的に彼らの経済が社会を構築しているのだ。

だが、参廊さふらうよ、まさか彼女を逮捕するのか。少なくともそれだけの理由では、ぼくにはできない。

いいか。ぼくは彝齋いさう肯のようににはならんぞ。それにレオンが黙ってはいない。今彼に叛かれれば、軍に叛かれるのと同じだ。ぼくらは成り立たない」

「何と弱気なことを。」

MARIEの件を絡ませるのです。彼女がMARIEを手引きして、モスコールに侵入させた証拠を挙げればよいのです」

「それではでっち上げではないか。冤罪だ」

参廊さふらうは引きどきを心得た者の表情で狡猾に言う。

「そうですか。解りました」
その夜、悶々と過ぐす普齊の許に参廊からイキリアら三名の生活振りの詳細なレポートが届けられた。

龍肯は朝、目を覚ますと、イキリアを探した。

蒼穹の下、彼女は既に働いていた。

イキリアの額やうなじに解れ落ちた髪があった。生え際は汗ばんでいた。双眸の紺碧には疲労の色が濃かった。彼女は人々にパンを配っていた。それが終わると、子どもたちに読み書きを教え始めた。

龍肯は痴れ懂れながら、深く絶望し、眺め続けた。既にイキリアは、彼女自身がここにいると云う事、PRESENCE実を心身で確信してしまっている。だとすれば、もはや避けられない。

普齊は眠られぬ夜を過こした目で、その日の夕方、イキリアを訪れた。龍肯と叭羅蜜多がそこにいた。

「イキリア、君に反革命の嫌疑がかかっている。それにここは危険だ。ぼくの屋敷へ来たまえ」

イキリアは碧蒼の双眸を凜々と煌めかせ強く言った。

「参廊も同じことを言ったわ。おれの屋敷へ来いってね。わたしの脚を見ながら」

普齊は怒気で赤面しながら帰宅した。参廊が待っていた。

普齊は開口一番叫ぶように言った。

「イキリアは、あの女は全然分かっておらん！ 全然だ！」

参廊は冷静だった。間を置いてから言った。

「普齊、これが命令書です。証拠はそろっています。署名をどうぞ」

普齊は無意識にペンを取ったが、すぐに躊躇した。参廊は何も知らない表情を装って言った。

「裏切りと民衆への不善とに対し、どうか義しき御裁きを」

普齊は怒鳴った。

「馬鹿なことを、馬鹿なことを！」

そう喚いて部屋を歩き回った。出て行こうとはしなかった。

普齊の頭の中でイキリアの言葉が繰り返されていた。

『参廊も同じことを言ったわ。おれの屋敷へ来いってね。わたしの脚を見ながら』

わたしの脚を見ながら。普齊の脳裏で鮮やかにイキリアの脚が翻った。華奢な身軀。碧蒼の双眸が蠱惑的に移ろう。

真実査問審判委員会の開会は三日後と決まった。

『……先生の最後の日（イキリアが真実査問審判委員会に召喚された日。以後、彼女は留置され、戻ることにはなかった）、それは私たちが読み書きの授業をしているときでした。紺色の制服を着た人たちが教会堂に入ってきて、イキリア先生を呼びつけると、赤い羊皮紙を両手で広げて先生に差し向けました。先生はそれを読むと、とても厳しいお顔をされました。

「分かりました。支度をして、すぐに行きます」先生はそう仰おつやいました。

そして、私たちの方をお向きになり、「皆さん、先生は急な用事でこれから出かけなければなりません。先生がいなくても、お勉強を一生懸命頑張らなければなりませんよ。それから」そう言つて少し黙つてしまわれました。けれども、美しい目で、私たち一人一人を見つめられ、こう仰いました。

「皆さん、もし先生がいなくなっても、物事によく注意して、正しく暮らしてください。その為には、どんなに目を逸らしたくなるような事実でも、きちんと観てください。

世の中にはたくさん民族が御互いに争っています。御互いに相手を恨んで復讐しようとしています。色々な宗教があつて、御互いに貶し、蔑み、嫌い、相手に残酷な仕打ちをしようとしています。

教父たちや近所の人たちが、あいつらは悪いんだと言っても、その宗教の人たち全てが、その民族全ての人たちが悪いのではないのです。そのことは、あなたたちにはも

う、充分に分かるでしょう。多くの人たちが実は同じ悲しみや苦しみに身を裂かれて
いることも事実なのです。

この当然の事実が気が附いて、執るべき行いを為し、少しでもいいから皆が均しく幸せになれる
ようにすれば、多くの喧嘩がなくなつてゆくでしょう。

その為に、気が附く為に、心や物事をよく観て、糾してください。事実をあらさ
まにするよう、隠された醜い事実をもはっきりさせるよう、努力してください。そう
してこそ、はじめて過ちを正す努力が為せるのです。

さあ、今日はお終いです。

これが皆さんへ送る先生の言葉です。もし永く先生が帰つて来られなくても、この
言葉を忘れずに、いい子でいてください。

それでは、さようなら。気を付けてお家にお帰りなさい」

それからはもう、先生は二度とお帰りにはなりませんでした。・・・』

(叭羅蜜多^{ばらみた}著『イキリア』より。第三章「イアウエル地区の子どもたちの証言」
から抜粋)

無骨な厚い樫材でできた長大なテーブルに委員たちが居並び坐っている。薑薇色の縞目大理石で律たる壁面に、黄金細工が粉飾され、黄昏差す為に、やや小麦色がかかって映える。ポルテッセの大広間で聴聞は行われた。少女は召喚台に立つ。金燦の髪が微風もなく靡くように観えたと言う。

真実査問審判委員会による審議喚問の席、イキリアは毅然たる態度で反駁した。

「わたしは爽烈を殺害の為の手引きなどしていません。晰らかな事実です。はっきり申し上げます。」

けれど、わたしは爽烈を殺したのかもしれませんが。嫉妬、欲望、憎悪、悪意、残虐性、いずれも誰もが持っている構造です。わたしも爽烈殺しの真犯人です。あなた方も、全ての民衆も同じです。わたしたちは爽烈たちの殺害者でしょう。

わたしたちは生存原理の企てる罠に絡めとられ逃れることはできない。あなたも、わたしもです。剥がそうと思っても剥がれない。生存原理に基づく以外の行為も、意識も全く持つことはできない。生存とは、わたしたち自身であり、わたしたちを構成している。

全ては、生存です。意志も意識も、心情も、行動も、思惟も想念も、苦しみも快樂も、一切は、生存原理に衝き動かされている。正義も愛も道德も、全てそこへ駆り立てる為の架空。だから、諸概念は無効なのです。生存がどこへ向かおうとしているのか、その意義や目的があるのか。けれど、そのような問いは虚しい。そのような設定自体が全て生存の生んだ架空だから。ただ、生存へのベクトルを有するフォースがあるだけです。そうとしか見えません。

あらゆる判断は虚しい。だから、わたしは、求めるのです。全ての民衆の幸せを、この大地に永遠の平和のあらんことを。例えそれが間違っているとしても。誤謬であることが、いったい、何だと言うのですか。人間は、これ以上を求めることができない。他に、どんな人間があり得るのですか。わたしたち誰もが、生存から逃れられないから・・・

わたしが理想主義的だと言う批判はあたってはいません。

民衆の幸福と永遠の平和を希求することさえ、生存原理に衝き動かされ、複雑な動機が絡み合う欲望なのです。

執著は超えられない。捨てられない。抑えれば、歪曲する。消えることはないのです。その異様な生命は、何だかのかたちで生き残り続ける。永遠に。

そして、満たすことさえできない。終わりが無い。わたしたちは、誰も常に苦しみ、駆り立てられる。だから、求め、行為し、意識し、生きようとするのです。欲望は永遠に満たされない。なぜなら、人間が求めるのは、自己肯定、自分自身だから、全くの合致、完全な愛だから。自らを厳密に観照してください。そして、その望みは叶えられない。必ず叶わない構造を持っている。

求めるものはいいつも対象でしかありようがないから。どうしたって対峙するものとならざるを得ない、どうやったって何かでしかあり得ようがない。

逆にそうでなければ、わたしたちは何も得ようがない、得られないではないですか。

そうです、完全なる相克矛盾。

だから、わたしは、ただ、少しでもましにやろうとする、それだけです。それ以外にはどうしようもできません。一握りの藁をつかんで、粒の麦を口に運ぶのです。

わたしは、反革命かもしれない。だけれども、理想主義者ではあり得ない。

人間は美しくなれない。ましてや、完全な平等や私有財産の放棄など幻です。非現実です。全人類から欲望や執著をなくさない限り不可能です。そんな日が来る筈がありません。不可能な夢です。

理想を制度化して社会に適用することは可能でしょう。けれども、必ず歪み、人間的な諸々に変換され、複雑に絡々合^{こいねが}い、本来の秩序は崩壊してしまうでしょう。

心は理想を希^{こいねが}つています。それは余りに多くの人たちが不幸に苦しんでいるからです。どうしても本当の平和を、永遠の平和を、全ての人たちが幸せになれる時代を願わずにいられましょうか。

けれども、夢を描き理想を現実の世界に移し替えようとする、全てが狂ってしまう。

人間的な、そう、人間的な真実である、そのどうにもならない構造によって、何も彼もが狂ってしまうのです。

理想主義的になって生きることは、畢竟、真実を隠蔽し、虚飾と美辞麗句とに替えて、欺瞞に満ちた官僚主義的世界を捏造してしまうだけになってしまふのです。矛盾し、必ず歪みを生む。

結局、人間的な、自己肯定の衝動、保身、執著、それら氾濫する奔流の怒濤に押し流されてしまふ。現に革命は醜怪な暴力であり、殺戮であり、民族の虐殺紛争であり、宗教的な、聖なる意義を騙つて憎悪・憤激を晴らす抗争、或いは欲望の捌け口を見出した被抑圧者の乱舞する輪姦の饗宴です。革命は破綻し、既に失敗している」

この言葉に場内は騒然となった。

イヰリアは全く動じず、超然と見渡す。凜たる青燐の双眸。黄金の髪は炎のように燦めきに燃え裂けるかのようにであった。

「そうです。革命は万全、全て成功し、勝利に向かって邁進しているかのように見えるし、そうプロパガンダされています。でも、それは違う。はっきり訴えます。何があるかと、わたしの言葉を止めることはできません。革命は破綻している。これは、事実です。王政と同様の不幸への道を歩んでいる。

聴いてください。いったい、どうして革命がわたしたちの願いを叶えているように見えるのですか。見えません。見せようとしているだけです。なぜ見せかけようとするのか。あなた方が体制を守ろうと、保身するからです。

なぜでしょうか。答は簡単です、生存の原理に基づく以外の、選択肢がわたしたちにはないからです。あなた方にも、わたしにも。

逃げられない。けれど、求めずにはいられない。わたしたちは、自分の行為が生存原理に基づく生物的動機の複雑な絡みによると分かっている、それを避けられない。喉の渇きに苦しんでは、聖者でさえ水を求めるのです。

水が喉を通り、潤す。その幸福、生存が生み出す架空です。正義も真実も在りません。空であつて、概念として無効であり、事実、何者でもない。

でも、渴いた者には、かけがえのないものなのです。無であり、無効であろうが。それが現実だからです。喉を通る水が、渴いた者にとって真実だからです。どうにもならない。

それが現実と云うものです。誰でも知っている。知られすぎていて、本当には誰も知ることができないほどに。

生存原理に衝き動かされた架空だからと言って、どうして避けられましょうか。できない。

わたしたちは、生存だと知りながら、正義や真実ではないと知りながら、結局は苦しみの道でしかないと、どうしようもないと分かりながら、幾らかでもましになるよう、努力する、それ以外の生き方があり得ない。

その努力の為には、ありのままの事実を正視するよう、開かれた存在である必要があるのです。

だから、わたしは批判します。革命を、そのあるがままの現実を見据えるように訴え、そして、批判します。

考えてください。日常でも同じです。いったい、批判されないものがまともであり続けましょうか。批判されないものは必ず腐敗します。炎もそう考えていたではないですか。あなたたちも知っている筈です。

わたしはわたしの言っていることが、絶対に正しいからと訴えているのではないのです。わたし自身のこの発言全体も含めて、正義であろうと努めるのなら、常に自らを検証しなければならない、そう言っているのです。

絶対不可侵であるものは、必ず大きな誤謬に陥る。絶対不可侵で神聖なものなど、悪魔だと言っている。分かる筈です。歴史が証明してきた既成の事実です。揺るぎのない真実です。数多の過去を検証してください。人類の歴史の中にあふれるほどの悲劇を見出すでしょう。いったい、この悲しみはいつ終わるのでしょうか。

きつと、終わらない。人間が人間である限り。

だからと言ってどうして、哀れな、不幸な人々を眺めて行動せずにいられるでしょうか。できません。絶対にできないのです。その動機自体が生存の絡繰りに仕組まれた、保身、執著、自己肯定の変型の一種だと解つていても。人間悲劇の原因を生み出す生存的な動機的一端であると解つていてさえも。

渴いている者には、一滴の水でも躊躇いもなく、口にするでしょう。喉を満たさなくとも、渴いているよりましなのです、誰がその判断を迷いましたでしょうか？

今苦しんでいる者にとっては、少しでも苦痛を和らげるものが必要なのです。誰だつてそうでしょう？

とするならば、いったい、この革命絶対神聖化は何でしょうか。傷口を腐らせる黴菌です。

革命万々歳？ それは、事実、虐殺行為です。あなた方は殺戮者です」

委員の一人であり、弁護士資格を有するミシャロナビッチが髪粉たつぷりの鬘を垂らして立ち上がった。

「革命同志諸君、これ以上冒瀆の言葉を聞く必要があるか。彼女の罪は晰らかで、あらためて裁判の必要もないほどだ」

死を覚悟した者の持つ平静さを湛えながらも失われない悪戯的な調子を込めて、イ
ヰリアは言った。

「あら、そうかしら。少なくともあなたには何も聞こえていなかったようだけれど」
ミシャロナビッチは目を瞠みはつたものの、すぐに取り澄まして言い放った。

「感情的な発言は止めたまえ、イヰリア君。わたしはそのような大人気ない挑発には
乗らないよ。」

さあ、我々は理性的に、民主的に話し合おうではないか。我ら同胞諸君！我々は
世界史に燦然たる自由平等の光を挙げた、崇高なる先駆者なのだ。

議長、他の委員の方々にも御意見がありましようから、どうか、伺っていただきま
しょう」

「議長、宜しいでしょうか」白髪の男が挙手した。

「どうぞ、フランチェスコ君」

「イヰリア君、君の言うことは解る。だが、革命は失敗したのではない。今でも進捗
しているのだ。様々な誤謬や不幸が起こってしまったのは、遺憾ながら認めよう。だ
が、それが革命の最終結論ではない。我々は努めている。様々な紆余曲折を経ながら
も相互に調整し、漸進すべく努力している。君の主張と何の隔たりがあるうか」

その一言で、委員会の空気が変わった。実はフランチェスコは叭羅ばら蜜多みたに仕込まれ
た者であった。暫時、ざわめきが起こったが、終息した。わずかながら、委員会がイ
ヰリアに「同情的な雰囲気になっていた」。

ここまで黙っていたイヰリアは、突然、嘶らかな声で朗々と言った。

「いいえ。」

このままではいけない。あなたの言っていることはわたしと同じであっても、全然
違います。あなたが言っているのは、結局、このままでも良いではないか、と云うこ
とです。わたしが言っているのは、このままでは駄目だと云うことです。

革命は進捗中？ 美辞麗句です。革命など最初からなかった。これが現実です。

どうして人々は権力を争奪するのでしょう。異教徒を蔑み、憎み、殺し合うのでし
ょう。どうして赦せないのでしょうか。なぜ民族紛争は起こるのでしょうか。

全て執着がなければいい。自己を棄捨し、全てを、運命を、敵をも愛すればいい。
そうすれば、永遠の平和がくるのです。

右の頬を打たれたのなら、左をも差し出せばいい。服を奪われたのなら、食べるも
のをも差し出せばいい。

二度と終わることのない永遠の平和がくるでしょう。

でも、それはできません。人間は生存の原理から逃れられないからです。できない
ことを掲げると、それは理想主義に墮して、歪曲を生むだけです。事実を見据えなけ
ればならない。

わたしは、わたしの左頬を差し出すことをできるのでしょう。どんな理不尽な状況で、
赦せない相手であっても、どうにかできるのでしょう。でも、心からはできない。

もし、それができたとしても、それは自分に関してまでです。自分の愛する誰かで
あった場合には、絶対にできない。しようとかえも思わない。

できる人がいるなら、人間ではない。それができてしまう人には、どこかに必ず別

の問題がある筈です。

いったい、あなたは妻を殺されて、息子をも差し出すことができますか？ さらに娘をも暴徒の欲しい俤、暴かれ曝され狼藉まじまじされることを快諾できますか？ あなたが妹が苦しみ裂かれる様子を甘受し、眺められますか。理不尽な他者の行為の為に！ 民族紛争や異教徒らに家族を虐殺された人たちなら、はつきり分かる。できる筈がありません。

ただ、異民族も、虐殺者も善良者も、異教徒も同じだと云う叡智だけを持つて欲しい。神の為に。なぜなら、真の神は異教徒をも愛するから。

そして、あなた方が愛した多くの人たちの不幸な死に報いる為にも。

その為にも、革命の誤謬を晰らかにすべきです。革命は持たざる者の恨み、貧窮の鬱積、マイノリティの怨嗟、権力争奪戦、そう云った一面をも有していることを公然と認知しましょう。

異教徒間の虐殺は、差別や貧困、失業への憤懣、狂信者の自己満足、抑圧された欲望の歪曲した願望、そう云った一面をも有していることを。

民族紛争もまた、家を奪われた者の怒り、家族を殺された者の復讐、傷つけられ心の捏造した昂揚感、貧富の差、違和感、蔑まれた人々の憤り、奪われた権利を訴える為の心の拠りどころ、そう云った一面を有していることを。

革命はこれら心情の坩堝でした。人間構造によるこれら様々な波が複雑系的に集合体となって有機物となったもの、人間的な実存でした。革命とは、これらの潮が滾り合つて、結果的に出来上がったものでした。

この状況を精確に認知し、すなわち批判すべきです。

今の状況を受諾し、自らをその状況として状況を生き、開かれた状況として、より良く生きたいと希いを掲げるべきです。不可能であろうとも夢見、かつ理想主義にならないよう、気を附けながら。

民衆は民衆の革命を非難しなければなりません。殺戮に涙し、哀しみ、憐れみ、糾し、憤りに身を焦がし、痛みを忘れられずとも、民族・宗教紛争を終息へと導くことこそが、死者の魂を聖化し、生きている者たちの魂を救うと云う事実じじつを覺つて、心を励まし。

血で贖おうとすれば、怨嗟は非業の死を遂げた人々の魂を血の悦びで震わせ、悪鬼へと変えてしまふと云う事実じじつを覺つて、常に叡智えいちを持つて自分自身を批判し。

有史以来、多くの犠牲を伴った凄惨な悲劇を救う為に、今苦しむ人々を和らげる為に、平和を。それ自身が生存への動機に塗れているとしてもです。幾らかでもまじな方を迷わず選ぶ、それが自然で、当然で、選択の余地がないのだから。苦しむ者なら、例えわずかであつても苦しみが和らぐことを迷わず選ぶでしょう。それと同じです。

平和を。どうしてそう願ひ、行動せずいられるのでしょうか。不可能だからと云うだけの理由で。

これが言いたいことの全てです。わたしには、他にどんなありふれた、あたりまえな、いくらかでもましな、人間的な生き方の選択があり得るのか分かりません」

審議会は再び騒然とした。委員長が木槌を烈しく打った。

イキリアが真実査問審判委員会の審議にかけられていると云う噂が市内に広まると、市民もまた騒然した。

地域によつては、（言葉だけは）反乱さえ起こり兼ねないくらいの騒ぎとなつてゐた。

ただし、イアウエルの人々の抗議は本当に暴動寸前だった。年老いた者たちはそれぞれの教会で祈りを捧げた。

黄昏。普齊は紫摩黄金の憂鬱を浴びていた。

窓の外は群衆であふれ返っていた。かつての自治州政府の連中の気持ちもなくやと思つた。自分が革命される側に廻つたようだった。

その夜、龍肯は狂乱状態になつた。辺り構わず相談した。そうしなければ不安でいられなかつた。動揺をどうすることもできなかつた。普齊は会つてくれなかつた。どうにか叭羅蜜多の家に着いた。彼も苦悶を浮かべていた。叭羅蜜多はレオンに知らせるべきだろう、と言つた。そして、そうした。しかし、どのくらい時間がかかるだろうか。

龍肯はじつとしていられなかつた。叭羅蜜多の制止を聞かず、街に飛び出した。涙に濡れて、夜明け近く、路傍に伏せて苦悶していた。

磨耗して滑らかに濡光していた石畳が、白燦と黄金とに変わり始めていた。

二頭立小型馬車が止まつた。

「龍肯、何しているんだ。行くぞ！」

叭羅蜜多だつた。

「ともかくイキリアに会おう。彼女を説得すれば、救いはある。妥協させるんだ。

哭いている場合か」

龍肯は気概を振り絞つた。監獄は八番街の終わりにある。かつての砦だつた。

叭羅蜜多とイキリアの牢屋に入った。議員の力を持てば、容易いことだ。薄暗い石壁の部屋で、筵を敷いた寢床。彼女は澄み切っているように見えた。

やや力なく、それでも向日葵のように微笑んだ。

「来てくれたのね。龍肯、叭羅蜜多」

龍肯は嗚咽しかけて言葉が出なかつた。叭羅蜜多が咳払いしてから、言つた。

「イキリア、君への同情はモスコール全体に広まっている。君の罪は晰らかに冤罪だ」

彼女の表情は変わらなかつた。

「そう」

「イキリア、御願いだ！」龍肯が叫ぶ。

彼女は冷静だつた。

「ねえ、二人とも聞いて。」

あなたたちの同情には感謝するわ。でも愛も友情もすべての執著同様、生存が起こして、人間を駆り立てる為のシステム。あなたたち自身の心になるべく苦しめないでいて。ごめんなさい、せつかく来てくれたのに、わたしにはそんなことしか言えないわ。申し訳ないけれど、忠告には従えないの。

生存は超えられない。それでも挑む以外にない。

ねえ、龍肯。

わたしがレオンに言ったことは間違っていたわ。万人の為の真理ではなくとも、必要な真理はあるのよ」

委員会審議の翌日、監察査察官の審査が行われた。疑異はなかった。監察結果にサインが為され、翌日が裁判となった。参廊の段取りで恐ろしく早く進められていた。レオンやペ裂等々、軍部の妨害・反乱を恐れてのことだ。周到に練られたシナリオは、刑の執行後全てを普齊の責任とするよう用意されていた。ともかくも邪魔されず、執行してしまうことに彼は憑かれ狂奔したのだ。

裁判は呆気なかった。反革命罪。参廊の手配によって、審議や裁判以前に、既に結論は決していた。イキリアは何の反駁もしなかった。刑の執行は翌日であった。

龍肯は独り部屋で震えていた。何を畏れているのかさえもう解らなかった。

生存に挑む・・・だが、彼女自身も言ったように、その意志、意識自体が生存に基づく構造によって生じているのだ・・・余りに虚しい試みではないか。だが、彼女は分かっているのに止めようとはしない。無駄だと知りながら、大死しようとしている。人類が少しでもましな方へと攀じ登る為の、魁になろうとしている。

遠くで教区教会の鐘楼の音が響いていた。夕靄のように臆に聞こえる。

龍肯は斜陽に刺され、窓辺の椅子にかがみ込んだまま。動けない。

自分が何を考え込んでいるのかさえ判らなくなった。鐘の音が突如、脳裏で太く木魂する。立ち上がった。眼は生き生き輝く。

龍肯は哄笑した。

『いったい、自分は何を考えているんだ。そもそも諸概念は無効ではないか。全て無だ。空だ。自由だ。解放されているのだ。実に歓喜の中にいるのと変わらない。自由解放ですらない。』

そう、斯くも苦しんでいながら、僕らは解脱のまっただ中にいるのだ』
シンバルのように哄笑し続けた。

そうさ、僕らは、苦しみながら、苦しんでいない。ここにいない。この現実を生きながら、全く別の現実を生きているのと同じなのだ。

脳裏に、戸姑郡噫曾良村の波羅噫曾良寺が蕭々と雨に打たれる姿が彷彿とした。

龍肯は叫んだ。余りにも自由なのだ。と。だが、哄笑は引き攣る。笑いながら哭き崩れる。

虚しい。事実として無であり、我ら解脱にあるとしても、『この苦しみ』やら、『痛み』やらは、

紛れもない 現実 としてしか現象しないし、人間はその内部でしか生きられないのだから。

参廊さくらんどうがイキリアの為に用意した刑罰は三日間の磔刑、及び火炙りであった。前例のない残酷極まりないものであった。それを知らせに来たのは楽夏らっかだった。

「龍肯、こんな酷いことってないわ、よりによつて磔刑、火炙りよ。本当なのよ、街にはクーデターの雰囲気すらあるわ。」

コミュニケーションを煽動して、あなたや叭羅蜜多ばらみたが立つしかないのよ。このまま普齊ふせうや参廊さくらんどうの専横を赦しては置けないわ」

だが、龍肯りょうこんは表情を歪めただけであつた。

「楽夏らっか。僕らにはどうすることもできない」

楽夏は驚いた。

「どうしたつて云うのよ、龍肯りょうこん！ あなた、そんな意気地なしなの！ あの革命のときの勢いはどこへ行ったのよ！

あたしたちは、最後の幸せをつかむまでは、何回でも革命するのよ」

叭羅蜜多ばらみたが逮捕された。クーデターを企てた容疑だった。事実、彼はコミュニケーションと接触していた。併せてコミュニケーション指導者や労働組合の執行委員が再び逮捕された。

参廊さくらんどうは拔かりがない。市街は暴動の空気を孕み始めた。

帷幄のうちで、知らせを聞いたレオンは狂える如く憤った。

「馬鹿な！ イキリアが！ 何と云う愚かなことを！ 気違い沙汰だ！ あいつら、いったい、何をしているのだ！ こうしてはいられない。ええい、愚か者めが。このような電信を打つまえに為すべきことがあるうが！ 腑抜けらめが！

おい、大尉、馬だ。馬の用意をするのだ！ 早駈馬だっ！」

レオンに理性が甦った。

今ここを離れることができるか。ここは国境、最前線である。五十万のシルヴィエ工軍が目前に迫っている。状況は不利である。彼を信じて帝国を裏切ったシルヴィエ人も何万人という。

彼は指導者である。それでもここを去れようか。敵前逃亡同然ではないか。

「俺はこう云ったものを超克すべく立ち上がり、今、敵と闘うのではないか」

イキリアに教堂で言われた言葉が甦る。

参廊さくらんどうは執務室で諜報員から書類を受け取った。

「これだ。遂に見つけたぞ。普齊ふせうはこれで終わりだ。とうとう尻尾をつかんだのだ。だが、それにしてもこのような恐ろしい、大胆なことを考えていたとは。あの男はこんなことが本当に実現できると考えていたのだろう。」

帝国マーロとの共謀だと！ シルヴィエとのパワーバランスだと！ 我々のような小国、たちまち食い物にされるだけだ。愚かな！

だが、これで普齊ふせうの失脚は確実だ。

あのコルドバが湖上城でラグナレクと接触とは！

革命のさなか、普齊ふせうめ、そのような動きをしていたとはな！

ふふ。だが、これでいい。神は勝利者へ采配を振るのだ。まさしくこれでいい。

普齊ふせう、おまえがイキリアを冤罪に陥れたのだ。なぜなら、おまえはマーロの羅班らはんと手を組んだ裏切り者だからだ。これで完璧な絵ができる。あとはこのアイリッシュと云う女騎士を拿捕できれば完璧だが」

レオンは眼を覚ました。真つ暗だった。自分の叫び声で起きたのだ。

平原、夜明けまえの駐屯地は静かで、歩哨の交替だけが遠く聞こえた。

全身に汗をかいていた。震えていた。レオンは簡易ベッドから飛び出た。着替える。天幕を出る。薄明、馬を寄せ、鞍や手綱を附けた。

そして、驚く歩哨たちを後に、キャンプを脱兎の如く抜けた。追い詰められた者のように目は血走っていた。

駐屯地本部は瞬く間に騒ぎとなった。

知らせを聞いて、裂いれつは驚いた。

「そんな馬鹿な、レオン！

いや、イキリアのところへ行ったのだ。それは分かっている。分かっているが、レオンを信じてついてきた奴らは動揺する。それはそうだろう。これでは敵前逃亡だ。裏切りだ。将兵は氣力を失い、総崩れになるぞ。

もはや敵は目前なのに！

糞つ垂れ！

いいか、皆を集めろ！ 全部隊に公表する。残りたい奴だけで戦う。逃げたい奴らには行かせろ。

残った者らで革命に散る」

イキリアは一本の巨棒に縛り附けられた。と言っても足台が附いているので、酷くきついわけではない。火炙りの日までに衰弱させない参廊さふりやうの配慮だった。

広場に柵を設け、そこに晒された。

人々は早朝、不安とも怒りともつかぬ、怒号交じりの声を挙げたが、囲むだけで誰も動かなかった。龍肯りようけんはそこへ近付き跪き祈った。多くの人がそれに倣った。龍肯りようけんは遂に慟哭した。

レオンは疾風の如く駈けに駈けた。所々で馬が斃れ、豪農や牧場主から新しい馬を賄った。

二日目の夕刻、細い田舎の街道を疾駆していた。小雨が降り始めていた。雪になるかもしれない。

レオンはまっすぐ続く道の真ん中に一人の男が立っていることに気が附いた。無視して行くとしたが、手前で急激に馬を止めた。前脚を挙げて嘶く。

男は漆黒の服に身を包み、長身で、眼差しは異様であった。

見紛うこともない、レオンはシルヴィエ時代に何度か会っている。人間殺人兵器、MARIE。

眼光は微動だにせず、金色がかった薄緑で、見る者を射抜く。

衰弱し項垂れ晒されているイキリアに黄昏が差す。太腿が顫えた。いく筋かの漏尿が脚を伝う。射光に透かされ、燦めきながら。そして、右足中指、薬指から微風に散った。

楽夏が逮捕された。女工たちを煽動しているところを現行犯で捕縛されたのだ。

龍背は広場の隅で毛布に包まって寝泊まりしていた。モスコールは寒さの厳しくなっている季節であった。

楽夏の逮捕を聞くとさすがに燎々も動揺した。だが、イキリアがスパイであると云う彼女の信念は変わらなかった。

「仕方がないわ。でも、革命は変わってしまった。それだけは真実ね」

普齊は恐れをなし始めた。余りに参廊が強行にことを進めることに、不安を感じ始めていた。

そう、彼はまさに自分が罠に嵌め込まれようとしていることを直感していた。普齊は密かに逃亡の準備を始めた。

龍背は埃に塗れて眼差しは虚ろ、全くの痴呆のように見えた。緋髪はおどろおどろしく乱れた。刺青は泥で不鮮明であった。「イキリア・・・」

ただ、そう呟くだけであった。

アイリツシュはロレアル・アンダルジョ王国のヴィクトウリー駅で降りた。

「おい、あいつを抑えろ。このヴィコ・エクスプレスですつと我らを見張っていた」構内の人目に附かぬところ、柱の陰で抑えた男は参廊の諜報員だった。

どうせ口を割らすには時間がかかるだろうと思い、アイリツシュはその場で追尾者の首を捻った。

「どうせ、参廊とやらの手の者だろう。哀れだが仕方がない。数時間だけでいい、見附からぬよう、うまく処理して置け。

さあ、これでは普齊も危ないな。計画はやはり再検討の余地があると後でラグナレク伯爵に伝えよう」

火炙りの日は晴天。

広場に人が集まっていた。

普齊と参廊とは、ともに確認者として、壇上に詔えられた席に着いた。厚顔な参廊に比べ、普齊は蒼白であった。

龍肯は頭を抱えずくまっている。

レオンはとうとう来なかった。無意識に自分がそれを期待していることに気が附いていた。龍肯は立ち上がった。

イキリアが殺される、この世からいなくなってしまう、それは現実には迫れば迫るほど、堪え難いものとなっている。理屈なんてどうでもいい。柵に近附こうと、群衆を掻き分ける。裁判官の口上が終わろうとしていた。執行人が篝火から、松明に点火する。

民衆がどよめく。龍肯は声さえ出なかった。

火は放たれた。十数人がかりで大きなふいごを以て吹き風を起こす。よく燃やす為もあるが、煙で窒息死させないことが主たる目的だ。窒息死ではすぐに終わってしまうのだ。

人間は焼かれただけでは即死しない。皮膚が焼かれ、肉が焼かれて骨が焙り出されてもすぐには死ねない。

少しの間、イキリアの白い身体が、まともな人間とは思えない、飛び跳ねるような動きで悶えた。叫びを押し殺しているようだった。それも数秒間だけのことだった。

「あつ、熱つ、あ、あぎやああ」絶叫。芯を刺し貫く激烈な熱さに身体は勝手に暴れる。脳を射通す余りの熱さで気を失った。だが、熱さですぐに意識が戻る。「ぎやあああああつ」再び気を失う。飛び起きる。失神する。跳ね起きる。

人間はこの繰り返しで、発狂してしまうのだ。火炙りの最終的な死因は心不全であると言われる。

イキリアにはもう状況など分かつてはいなかった。ただの炙られた細胞の生存反応でしかない。狂ったように烈しく弾み暴れ、叫ぶ。

龍肯は髪を掻き毟り、この凄惨な姿を見て絶望的に後悔した。どう考えても、生存への執著に戦いを挑むとか、わずかでもましな方へとか、戯言でしかない。我々にはどうにもならない。

突然、群衆が割れた。血塗れのレオンが倒れこむように現れた。剣は折れていた。爛々と、狂気を帯びた眼光。

「イキリアああつ！」悲痛な絶叫。

普齊はその姿を見ると怯えて逃げ場を探す。蹴躓き転ぶ。

レオンの目が憎悪に満ちてその姿を捉える。

それも束の間、取り押さえようとする官憲の制御を振り解き、警護兵を押し倒し、柵を破って刑場内に入る。

もはや誰もレオンに近附けない。眺めながら、微笑んでいた参廊が声を挙げた。

「あの無法者を捕らえろ！ あれは裏切り者だ！ 数十万の同胞を裏切って来たのだ
っ」

だが、誰が動こうか。兵士らも余りの光景に微動すらできなかった。

「イキリアああつ！」レオンはもはやイキリアしか見ていない。夢中で折れた剣を振るい、十字架に二撃、二撃、三撃する。燃え盛る十字の柱が崩れ倒れる。焼け焦げたイキリアの身体を自らの身体で包み、必死で火を止めようと泣き叫ぶレオン。狂おしく縛っていた綱を素手で引きちぎりながら、片膝を突き、イキリアをかき抱くレオン。炙られ爛れたイキリアの頬に頬を寄せて、こどものように喚き歎くレオン。場面はそこで止まった。

『龍止』が止まった。

誰かの声が聞こえている　と

思った途端、眼前にあつたものがいきなり風景となった。裂雨が耳を劈く。同時に、僕の科臼が僕の口からこう言われていたのが判った。

「イキリアっ！　いったい、どうしたの、傘は？」

気が附くと、僕はここにいた。ここは、いったい、

戸姑郡噫曾良村。真言宗室生寺派、波羅噫曾良寺を由緒とする。群馬県。関東甲信越。日本。地球。

理解が僕を暴虐的に襲った。

判然とする。イキリアを見附けた雨の日だ。四辻。古参道。竜垂涎通り。信号機。書肆や文房具屋、骨董屋や料紙卷子の老舗。古い瓦から樋をあふれ、瀧のように一条、烈しい音。

さつきからずっとここにいたのに、周囲の全てが忽然で、唐突にこの状況に投げ込まれたかのようだった。見知らぬ土地へとさらわれて来たように。無論、分かっている。だが、説明できない。わかっていると云うことは、何もしないと云うことと事実、同義だ。

あれは現実だった。ここで起こっていた。鮮烈に憶えている。僕の科臼が唇で動いた。

「風邪引くじゃないか」

イキリアは不思議な目で、哀しそうに黙って僕を見つめていた。下瞼が堰のように涙を溢れさせたまま。その双眸は、青碧蒼各々に烟々と燐となつて焰え、太陽の眩き、深淵の如くに透明にして毅然たる燦々。僕は射抜かれた。

だけど、イキリアは睫を伏せた。

「何でもないわ、龍肯^{りょう}。ただ、ちよつと・・・」

言葉を一度途切れさせ、何かを言おうとし、僕には、それが何を言おうとしているのか分かった。だが、イキリアは言葉を止めた。一度口を嚙み、そして、こう言った。

「ごめんね、龍肯。何でもないわ。そう、何でもないのよ」